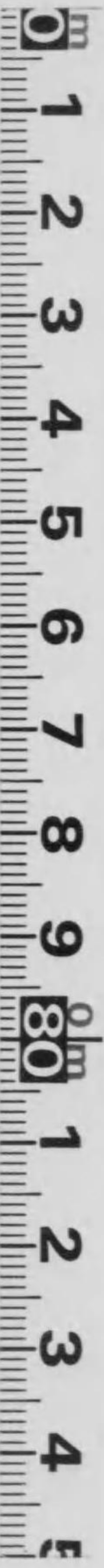


2636  
83



始



263.6-83



菊地勝之助著

地理新教授法

東京教育研究會出版

大正  
11.12.22  
内交

## 巻頭の言葉

「地理學は、人類の生活舞臺としての地球を、研究の對象とする學問である。」といふ見解は、現今地理學界に於て、略々一致して居る概念であります。即ち地理學は人間の文化事業に影響を及ぼす自然、人間の文化事業によつて開拓された自然、又は開拓され待べき自然等を研究の目標點とし、而も地球上各地各國の自然的、人爲的區劃に應じ、そこに實現されて居る自然と人文との特殊關係——文化の個性を、位置、地勢、氣候、産業、交通、都邑等の地理的現象の關係上から窮明せんとする一箇の文化科學であると見ることが出來ると思ひます。

この見地からして、吾人の攻究せんとする地理教授は、先づ、幾千年の歴史を有する吾々人類が、この廣い地球上に如何に分布——生活し、如何にこの地球——自然と親しみ、如何にこの自然力に支配を受け、又、この間如何に自然そのものを理解し、自然を克眼して人類の文化を創造して居るかを明確に研究せしめねばなりません。尙、本科教授の本質上、この

自然と人生との間に結合されてある因果の關係——地理的歸結を、吾々人類が如何に統御することによつて、更によりよき文化生活を求め進んで人類文化の向上發展に如何に参加すべきかを闡明にすることが緊要であると着眼されて居ます。

翻つて最近に於ける時代の要求を見るに、時勢の進運は世界列國をして、政治的にも、經濟的にも、文化的にも著しく接近せしめ、國際的關係は爲に益々複雑と緊張とを加へ、今や如何なる國家——國民と雖も、全く他の社會、若しくは異民族の文化を度外視し、世界の趨勢に無關係なることが殆ど出來得ない境遇に置かれて居ます。

従つて何れの國家——國民も、それ／＼國家の維持發展、國民文化の向上發展の爲には、單に自國の國力充實の如何や、國民文化の特質如何の討究に止まらず、進んで廣く世界各國の國情なり、各民族の特有文化なりを十分に理解せしめ、且、國民として當に爲すべき着實公正なる國民的責務を自覺せしめ、總て堅實なる國民的活動に参加し、國民文化の向上乃至は人類文化の發展に貢献し得る様な有爲有能の國民を教養することが、極めて肝要であるといふことに、強く覺醒して來たのであります。

茲に於てか、かゝる方面の事實を當面の研究對象とし、而も時勢の要求に應ずべき内容を豊富に有する地理科は、頓に其の教育的價値が重視され、該博なる地理的識見の獲得と、堅實なる國民精神の體得とは、現時に於ける文化國民の最も貴重なる修養であるとまで見られて來ました。殊に政治的・經濟的・文化的諸關係の極めて緊密な國際場裡に、生活々動せんとする吾々國民にとり、必要缺くべからざる教育——修養であると、各方面から事實として要求——高潮されて居ます。

本書はかゝる時機に際し、如上の意味に於て、特に文化中心の見地に立脚し、主として現今地理教授の文化に關する諸問題に對し、私の過去に於ける狭き經驗と、現在歩みつゝあるさゝやかな理想とを、をこがましくも、腹藏なく披瀝せんと努めた小さな記録であります。

私はこの書をものするに當つて、自己の有する總てを擧げて努力しました。併しながら非才淺學、加ふるに短時日の研究、あらゆる意味に於て寔に貧弱なものであります。唯、私としては今後重ねて研究と思索と、而して親愛なる讀者諸彦の御指導とによつて、更によりよき道に進み、他日又新なる研究を公にしたいと祈つて居ます。

大正十一年十二月

廣島  
著者識

文化中心 地理新教授法目次

第一章 時勢の進運と時代の歸嚮……………一

第一節 新時代の基調と本邦の世相……………一

第二節 時勢の推移と世界の趨勢……………七

一、交通機關の發達と世界列國の接近……………七

二、國家主義と國際關係の緊張……………一三

三、東西文明の接觸と國民思想の動搖……………一八

第三節 現代國民理想の歸嚮……………二五

第二章 時代の要求と地理教授……………三三

目次

- 第一節 地理教授に對する時勢の要求……………三
- 第二節 本邦國勢の理解と其の世界的地位の自覺……………三六
- 第三節 國產獎勵の必要と經濟思想の涵養……………四一
- 第四節 海外發展の緊要と植民並に移民思想の培養……………四七
- 第五節 各國々勢及國民性の理解と國際關係の闡明……………五三
- 第六節 日常生活に必要な地理的知識の指導……………六〇
- 第七節 國民精神の教養と國際精神の喚起……………六四

第三章 現今地理教授の目的觀……………七七

- 第一節 教則の精神から見た地理教授の目的……………七七
- 一、地理科の立場と其の教則……………七
- 二、現行教則の根本精神……………八〇
- 第二節 地理學の本質から見た地理教授の目的……………八九

- 一、地理學發達の概観……………八九
- 二、現今地理學の本質……………九二
- 三、教材としての地理……………九六
- 第三節 時勢の要求から見た地理教授の目的……………一〇一
- 一、教則の時勢的解釋……………一〇一
- 二、現今地理教授の使命……………一〇八

第四章 地理教授に於ける自然と文化……………一〇九

- 第一節 位置の關係と文化生活……………一〇九
- 第二節 地勢の狀態と文化生活……………一一二
- 第三節 氣候の影響と文化生活……………一二一
- 第四節 産業の變遷と文化生活……………一五一
- 第五節 交通の發達と文化生活……………一六六

目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 第六節 都市の勃興と文化生活…………… | 一八 |
| 第七節 民族の特質と文化生活…………… | 一九 |

### 第五章 最近地理學習指導の進歩と方針……………二〇五

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 第一節 學習基礎としての郷土地理……………    | 二〇五 |
| 第二節 地理を學習する心理過程……………     | 二一〇 |
| 第三節 郷土地理の範圍と直觀地理の學習…………… | 二一五 |
| 第四節 想像地理の立場と類推地理の學習…………… | 二二一 |
| 第五節 讀圖力の養成と地理の學習指導……………  | 二二七 |
| 第六節 地理科學習法の指導方針……………     | 二三一 |

### 第六章 地勢教授の着眼と實際……………二三元

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 第一節 地勢教授の主眼點…………… | 二三元 |
|-------------------|-----|

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 第二節 山脈教材の主眼と其の取扱…………… | 二四四 |
| 第三節 河川教材の主眼と其の取扱…………… | 二四七 |
| 第四節 平野教材の主眼と其の取扱…………… | 二五一 |
| 第五節 湖沼教材の主眼と其の取扱…………… | 二五六 |
| 第六節 海岸教材の主眼と其の取扱…………… | 二六〇 |

### 第七章 氣候教授の着眼と實際……………二六九

|                        |     |
|------------------------|-----|
| 第一節 氣候教授の主眼點……………      | 二六九 |
| 第二節 氣候教授上重視すべき教材……………  | 二七五 |
| 一、産業の發達に關係深い氣候……………    | 二七五 |
| 二、交通運輸に影響を及ぼす氣候……………   | 二七五 |
| 三、住民の生活々動を左右する氣候……………  | 二七五 |
| 四、國家の文化に大なる關係ある氣候…………… | 二七五 |
| 五、海外發展に直接關係の多い氣候……………  | 二七五 |
| 六、日常生活に關係の深い氣候……………    | 二七五 |
| 第三節 氣候教材取扱上の重なる着眼…………… | 二八七 |

目次

## 第八章 交通教授の着眼と實際

- 第一節 交通教授の主眼點……………二九七
- 第二節 交通教授上重視すべき教材……………三〇一
  - 一、幹線をなす主要なる交通
  - 二、水陸を連絡する交通
  - 三、重要なる都市港津を結ぶ交通
  - 四、交通の中心又は要路に當る地點
  - 五、交通の特に發達せる地方
  - 六、特に人力を注いで經營した交通
  - 七、最も進歩した交通機關の設備
  - 八、特殊計劃のもとに經營された交通
- 第三節 交通教材取扱上の主なる着眼……………三〇九

## 第九章 産業教授の着眼と實際

- 第一節 産業教授の主眼點……………三三三
- 第二節 産業教授上重視すべき教材……………三三七

- 一、國家並に國民生活に關係深い産業
- 二、郷土並に日常生活に密接な關係ある産業
- 三、國際的經濟關係を示す産業
- 四、生産業の進歩發達を語る産業
- 五、歴史的發達を示すに足る産業
- 六、特に人間の努力の結果勃興した産業
- 七、特に豊富な物産と不足な物産
- 八、新計劃の産業と將來有望な事業
- 第三節 産業教材取扱上の重なる着眼……………三三六

## 第十章 都邑教授の着眼と實際

- 第一節 都邑教授の主眼點……………三四九
- 第二節 都邑教授上重視すべき教材……………三五四
  - 一、國家的世界的の都市
  - 二、地方文化の代表的都市
  - 三、歴史的遺蹟に富む都邑
  - 四、産業の中心としての都邑
  - 五、交通の要路に當る都邑
  - 六、保養遊覽地としての都邑
  - 七、宗教的靈地としての都邑
  - 八、特殊的設備のある都邑
- 第三節 都邑教材取扱上の主なる着眼……………三五五

目次



第一章 時勢の進運と時代の歸嚮……………一

第一節 新時代の基調と本邦の世相……………一

第二節 時勢の推移と世界の趨勢……………七

一、交通機關の發達と世界列國の接近……………七

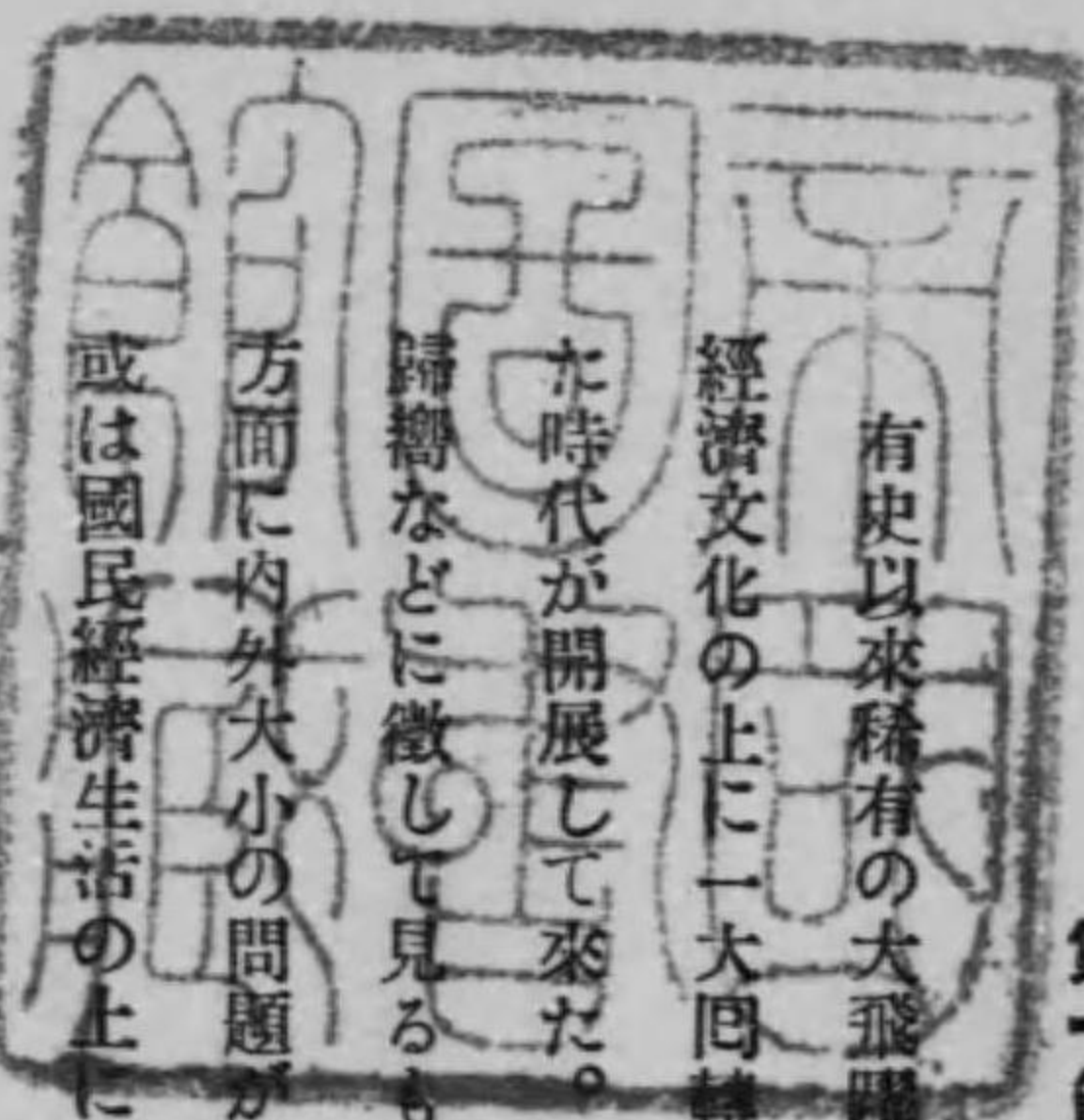
二、國家主義と國際關係の緊張……………三

三、東西文明の接觸と國民思想の動搖……………一八

第三節 現代國民理想の歸嚮……………二五

## 第一章 時勢の進運と時代の歸嚮

### 第一節 新時代の基調と本邦の世相



有史以來稀有の大飛躍をした明治大正の聖世は、更に歐洲大戰の勃發により、茲に政治經濟文化の上に一大回轉機を劃し、國際的關係や國民生活の各方面に亘つて氣分を新たにした時代が開展して來た。これを近く吾人の環境の變遷なり、實生活の要求なり、國民理想の歸嚮などに徴して見るも、日露戰役此の方今次の世界一大事變を峙として、物質的精神的の各方面に内外大小の問題が勃發し、而もそれが深刻に要求し來つて、或は國家社會組織の上には國民經濟生活の上には、或は國民文化の上に深甚なる刺戟——影響を與へて居ることが覺知される。曰く平等化、民衆化、勞働化の諸傾向、曰く世界化、國際化の形勢と云ふ様な時代の思想、精神は、人類生活の總てに改造——向上を要求し、而も國家社會の世相や實生活の面目を刷新せざるは止まぬと云ふ様な、新しい精氣に満ちた時代精神の迸つて居る時世が明

にやつて来た。

所謂新時代とは何を意味するであらうか。先づ之を我が國について見るに、明治維新は封建時代に對して、確かに政治的社會的に一新機を劃した改造の新時代であつたと云ふことが出来る。又、日露戦役以來歐洲動亂を境として區別される大正維新は、之れ亦新面目を現出した刷新の新時代であると見ることが出来る。何をか大正の今日を明治の盛世に對して、第二の維新と呼び——新時代と稱へ得るであらうか。明治年間に於ける過去三千餘年は世界史上、寔に未曾有の成績を挙げた時代であるが、當時に於ける歐米諸國の文化に比し、物質的にも精神的にも、極めて幼稚であつたことは事實である。

素より明治の盛世は維新の大精神たる五ヶ條の御誓文の大方針に基いて、大に歐米諸國に接近して泰西文明の粹を吸収したのであるけれども、未だ學術・技藝の上に於ても、政治・經濟及び軍事等の上に於ても、單に泰西文明を其の儘輸入するとか、機械的文明を模倣するとか、或は立憲政治の體裁を形式的に整へるとか、又は國力に伴はぬ無理な軍備の擴張を圖ると云ふ様な次第で、主として、精神的文明の吸収並に物質的文明の輸入に急がしかつた時代

である。従つて當時は國家乃至國民生活の全般に周匝し徹底して、我が國獨得の精神的眞價を發揮する餘裕のない時代であつたのである。

然るに時勢の推移は、日英同盟の締結となり、日露戦争の大捷となつた。殊に日露戦争は嘗に本邦上下三千年の歴史に、未だ曾て其類を見ない大戦であつたばかりでなく、又世界歴史上に於ても殆ど其の例を見ない回天の大戦争であつた。従つて邦家の運命に重大な關係を有つて居たことも、固より日清戦争の比ではなかつた。この日英同盟の締結と日露戦争の大捷とは、如何に我が國民の自覺を促し、吾人の自信を高めたことであらうか。かくて自覺の徹底期に達入つた國民は、更に世界大戦亂の勃發並に戦後の形勢に鑑みて、頓に國民を自覺活動の期に導いた様な感がする。

かくして産み出された新時代を、過去の時代に對照して見るならば、その社會組織、經濟生活、文化生活並に國際的關係などの實相に於て、天地の差あるを認めねばなるまい。世は舉つて國力の充實、國民生活の向上、生産能力の増進、活動功率の昂進を要求し、又社會の平等化、民衆化、勞働化を唱へ、進んでは人類生活の世界化、國際化さへも叫んで居るので

ある。明治時代が物質的、社會的維新と呼ばはれるに對して、精神的、國家的、世界的維新と識者が稱へて居るのも、蓋し故なきにあらずと考へる。

尙、明治時代を人生に於ける少年の模倣學習の時代と見るならば、大正の新時代は壯年の自覺活動の時代と見ることが出来る。又前者を國民文化の量的擴充の時代と云ふことが出来るならば、後者は國民文化の質的擴充の時代と云ふことが出来るであらう。實に現代は總てに内容の充實、質の改善、能率の増進を要求し、標榜して居る時代である。

而して今日、我が日本が世界の日本時代と呼ばれて居る様に、總てが國際的關係を以て結びつけられ、世界的舞臺に立つて、廣く世界的活動を試みて居る。従つて國家社會に於ける大小幾多の問題は、總て列國との諸關係を顧慮して行かねばならぬ時代になつて來た。

さてこの新時代の到來は我が國のみの現象であらうか、否決して我が國のみが遭遇した機會ではない。時期に多少の差異はあらうが、世界共通の機會であり黎明の全世界に明け渡つた時代であることを思はなければならない。随つて新時代に對する國民の態度も亦慎重でなければならぬと思ふ。

## 第二節 時勢の推移と世界の趨勢

日進月歩の時勢に鑑み、苟も時代の要求に應ずる教育の精神を樹立しようとするならば、必ずや時勢其のものを知らねばならない。それが爲めには今日に於ける内外の時勢を更新形成した主なる原因及び諸關係を訪ねる必要があると考へる。素よりかやうな企ては、到底吾人のよくする處ではないが、先づ大體に於て近世に於ける自然科學の進歩、殊に交通機關の發達が著しく世界文化を開發し、世界列國を接近せしめた次第なり、又は國家主義、帝國主義の勃興が廣く國際的關係を緊張せしめた経緯なり、東西思想の接近が深く現代思想を變遷せしめた真相などを吟味することによつて、略々國際的關係の趨勢や、國勢の世界的地位や國民生活の歸向などが明にされて行くと考へる。以下是等の諸點について其の概要を述べて見よう。

一、交通機關の發達と世界列國の接近——今日の世界にかやうな燦爛たる文化と、密接なる國際關係とを産み出すに至つた其の主なる素因を穿鑿して見るならば、固より一二に止ま

ることはあるまい。ベンガルの哲人タゴールが「現代の文明は實に顯微鏡や石炭殻の中から生れ出た。」と言つて居る様に、近世に於ける自然科学の發達が、著しく世界の文化——時勢の進展に偉大なる關係を及ぼして居ることは争はれぬ事實である。就中、短日月の間に一大進歩を遂げ、而も時勢の進運に其の機會と影響とを切實に與へて來たものは交通機關の發達であらう。

マコーレーが彼の交通觀に於て「文字と印刷術を除いては、總ての發明中、距離を短縮することの發明程、人類の文明に大なる貢獻をして居るものはあるまい。」と觀破して居る様に交通機關の發達程、今日の時勢に重大なる影響を及ぼしたものはあるまい。世界文化の發達を歴史的に見るならば、恐らくこの交通機關の發達につれて、或は結合され、或は開發され或は融和統一され、進んで來たことであると思惟される。

西洋に於ける第十五世紀末は、世界の大發見時代と稱せられて居る。即ちコロンブスの亞米利加發見と、バスコダガマが阿弗利加を廻航して印度航路を開いたことなどは當時の奇蹟である。この功績たるや、單に新世界の發見、新航路の開拓としてのみ價值があると見たく

はない。寧ろそれが爲に發達した交通運輸、並にこの發見によつて促進された交通機關の發明こそは、後世、世界文化の發達に偉大なる貢獻をしたものであると考へる。

常時航海に使用された船は、運送力に於ても甚だ微弱な帆船に過ぎなかつた陸上交通の如きも馬車位のものであつた。然るに十八世紀に入り、ジェームス・ワットの創意によつて蒸氣機關が發明され、更にスチブソンの努力は、之を機關車に應用して鐵道交通の便を開いた。十九世紀の中葉頃には鐵道網が歐洲全土に擴り、一方水上の交通はフルトンの蒸氣船の發明によつて促進され、其の後海上運輸術の進歩は實に目醒しく、人々は到着日を幾分豫定して、大洋を航行することが出来る様になつた。

爾來、水陸交通機關の發達は日に月に進歩したが、殊に交通機關の急激なる發達を遂げたのは十九世紀末である。英國の社會文明評論家ウエルスは「二十世紀の交通機關」と云ふ一論文に於て「若し他日年代記の上に十九世紀と云ふ時代の特色を要することありとせば、其の記號こそは正しく鐵軌の上を走れる蒸氣機關の圖なるべし。」と婉曲に其の發達の様を指摘して居る。

かかる間に電氣に關する新しい科學が生長し、十九世紀に至り、電氣力の應用は忽にして電信機・電話機・電車・電氣鐵道・海底電信等の發明となり、最近に於ては無線電信、無線電話等の發見と飛躍して來たのである。人類の交通に對する努力は、殆ど底止する所を知らぬと云ふ様な次第である。かくて最近世界人類の注意は、更に爆發性混成物の膨脹力を應用して輕快な能率の高い自動車・飛行船・飛行機等の完成に集中し、列國は競うて多大の才智と莫大な犠牲とを拂うて、之が實用化までに努力して居る。従つて是等交通機關の完備と其の偉力とは、漸次、迅速と正確の度を加へ、地球上の距離を實際的に縮小し、世界列國をして比隣の如く益々接近せしめて來た。

マゼランが世界一週に四年の日數（一五一九——一五二三）を費したのは、既に昔の夢である。一九一一年には或る佛蘭西人の試みによつて、僅か三十九日十九時間を以て世界一週のレコードを作られた。更に最近注目すべき航空界の進歩で、地球上に於ける二點間の距離は、又著しく短縮された。一九一八年英國航空委員會の報告によれば、倫敦と濠洲メルボルン間の距離、即ち地球の約半周の距離は八日行程に短縮することが出來るとのことである。

かく世界の交通は日に月に進歩發達と、その速力と正確の度を増すに従つて、其の距離はあらゆる方面から縮小され、同時に世界列國は相互に接近して來たのである。

世界交通の發達して居るその時は、世界列國の接近して居る時で、又東西文化の近かづきつゝある日であると見ることが出来る。歐羅巴區域と北米東海岸區域とは、特に著しく鐵道網が發達して居る。鐵道網の發達はあらゆる文化の進んだ標徴であるし、又國際關係の緊密なるを表はすものである。交通の發達して行く進路は國家社會の政治、經濟、文化の進展して行く姿で、又、世界的諸關係の深みを加へつゝある状態であると云ふも過言であるまい。

即ち太平洋上に於ける我が國の航路、海底電信、無線電信の延長は、我が國政治、經濟、文化の發展であり、太平洋沿岸諸國との國際的關係の緊密——擴張を語るものである。換言すれば交通機關の發達は心身に於ける神經系統の發達に相當するもので、神經系統の發達は心意の統一心身の發育に密接不離の關係を有つて居るものである。故に交通の發達は纏て世界——國家文化の發展であり、國際關係の接近を意味するものであると思ふ。

要するに輓近に於て長足の進歩發達を遂げた世界の交通が、ここに前代未聞の新時代を

形成し、而も世界の大勢を醸して來たことは争はれぬ事實である。林子平が「細かに思へば江戸の日本橋より唐山阿蘭陀まで境なしの水路なり。」と言ひし思想を、奇矯の言葉と聞きし當時の日本の世態と、千里比隣の世界に擡頭した今日の我が國情とを較べて見たならば、誰がその變遷の甚だしきに驚かないものがあるであらうか。吾々は今日に於ける交通機關の發達が、全然新たな歴史相を作り得る程に、重大な影響を世界に齎しつつあることを發見するものである。

二、國家主義の勃興と國際關係の緊張——激甚な交通機關の發達と相俟つて、世界の大勢を醸すに至つたその主要な直接原因とも言ふべきものは、近世に於ける國家主義——帝國主義の勃興であると考へる。素より國家主義の思想——國家的生活の事實は、獨り現代のみの現象でも、特産でもないが、確にこれは現代人類生活の一特色と見ることが出来る。而して特に著しくこの國家主義思想の勃興したのは十九世紀初頭のことである。

佛蘭西革命に引續き、ナポレオン一世の雄圖は、先づ武力を以て政府を仆し、國會を解散し、新憲法を布き、統領政府を組織して其の實權を握り、總て國民の歡心を得て佛蘭西帝國

に登り、進んで世界的帝國を建設し、自ら世界を支配せんとの覇業を企てた。ここに於て歐洲全土の騷亂が勃發し、爲に歐洲各國の國家組織は全く破壊され、その文化も亦將に亡びようとする危険に陥つた。

この時に當り各國民は古昔より傳來せる文化を保存し、各國特有の良風を尊重し、以て秩序ある國民活動を起さんと努力するに至つた。かくて一面には強固なる意志を有し、而も圓體的、犠牲的精神に富む有爲有能な國民を養成することが、焦眉の急であることを自覺した同時に人類は整頓せられた國家に於て、其の歴史的習慣と共に發達すべきものであると云ふ思想を、各國民が覺知することが極めて緊要であると叫ばれるに至つた。殊に愛國の熱誠に燃え、國民の志氣を盛に鼓舞したものは獨逸であらう。國家主義の思想は實に之れに伴つて蔚然として獨逸に勃興したのである。

爾來、近代國家組織の發達につれ、個人の生命、財産が益々確實に保證され、國民生活が漸次向上して安定の状態を得ることとなるや、國家主義のもとに生活することの有意義なることが、頓に高潮されて來た。加之、交通機關の發達に伴ひ、幾多の對外關係に遭遇するや

民族的、國家的の自覺が益々高まり、國際關係の接近と共に國民活動は經濟的、植民的、軍事的、社會的の各方面に漸次激烈なる競争を惹起するに至つた。かくて國民は個人としても、團體としても今日の世界に處し、生存競争に打ち勝つて自己の生命財産名譽地位を完し、民族乃至國家の繁榮を企圖せんとするならば、徹頭徹尾、國家主義によるの外更に道なきを強く覺るに至つた。茲に國家主義の思想が勃然として各地各國に發達するに至つたのである。

さて人口が日に月に増加し、互に激烈なる經濟生活を営まねばならぬ今日、世界の各國が經濟的國家主義の政策のもとに活動すると云ふことは、寔に餘儀ない次第といはなければならぬ。抑々國家とは個人の集合である。従つて個人々々の希望性質を推究すれば、國家の希望性質も自ら解決される譯である。世界各國民は何れも、皆自己の身體を保護して生命を完からしめ、併せて子々孫々、即ち同一種族の繁榮を企圖するのである。此の理は生物一般の現象で、適者生存の理法は堂々として自然的に行はれて居る。されば個人の集合體たる世界——國家の大勢も亦此の二者に歸するのである。故各に國國民の努力が其の國家の獨立發展

と同一國氏の繁殖と云ふ事に到達するは必然的現象であると思惟される。國家主義の思想や其の政策も證し詰むれば、這般の要求に應じて起つたものであると云ふことが出来る。其の極端なるものは、國家は人類理想發展の極致で、各個は皆國家のもとに統一せられ、國家の一員としてのみ始めて幸福であると、その國家の萬能を唱導し、尙國家組織による生活が民族と乃至家の獨立發展から見て、今日の世界に於ける最良最高の生活形式であるとまで確信して居るのである。

かくて國家主義の思想は全世界に瀰漫し、列國はそれごとく國家組織の整理、國民思想の統一、國力の充實、國民生活の向上に専心努力して止まない。その結果は政治的、自由競争の時代を現出した。而して自由競争の行はれたこの時代に於ては、各國共に進歩を目標とする。従つて其の間に伍して進歩せざるものは、嘗に退歩して弱小國の地位に立ち、進歩の著しいものは嶄然頭角を表はして、強大國の地位を占めるに至るのである。かくて國に大小、國力に強弱、國運に消長を生じ、地球上に大小、強弱五十有餘の國家が相對峙し、到る所に弱肉強食の現象が行はれたである。例へば獨逸の覇制主義の如きは、自由競争の必然の理法に則



り、所謂恵まれたるものの権利を正當に主張し、終に國家主義は軍國主義に形を更へ、武力を以て競争者を壓迫し、眼下に之を睥睨するに至つたのである。

ここに於てか世界各國は勢力の均衡を保つべく、勢力均衡の國際政策をとることになつた。即ち歐洲に於ては獨逸の霸制主義が先づ三國同盟を締結し、露佛は之と均衡を保つべく露佛協商を結んで彼に對立した。東洋に於ては露國の東方經營を背景として、露佛獨が提携して東洋の平和を脅した。茲に於て英國は傳統的な「光榮ある孤立」の態度を代て、我が日本と日英同盟を結び、この勢力に對抗して、日英の要求と東洋の均勢——平和を圖つたのである。爾來、幾多の曲折を重ね、世界は所謂武裝的平和の時代となり、列國は虎視眈々として各國の氣息を窺つたのである。然るにこの武裝的平和は久しからずにて破綻を生じた。即ち勢力均衡の運命的破裂の第一は日露戦争で、第二は歐洲戰亂であるといはれて居る。その關係が國際的、世界的であるだけに戰亂の範圍が廣く、且、慘虐を極めた。かくて國家主義、軍國主義の武力的競争が産んだ大慘劇を、目前に見せつけられた各國家——各民族は、痛く侵略的な國家主義、軍國主義の衝突を恐れ、戦争を平和的の解決によつて、來然に防止せんとす

る態度が著しくなつて來た。即ち巴里平和會議に於ける國際聯盟の成立、華盛頓會議に於ける軍備國防の縮小、四國協約の締結、並に最近ゼノア、ヘイグ等に於ける歐洲經濟會議の如きは之れに外ならない。かやうに最近に於ける世界の趨勢は、總てが國際的而も協動的、妥協的に進んで來た。歐洲大戰以前を武力的平和の時代と稱へるならば、今日の世界を國際的平和の時代と言ふことが出来るである。

さればと云つて世界列國は獨逸の軍國主義的領土膨脹策の脅威にこり、今後、民族的の發展、國家的の政策が全然阻止せられたものとは考られない。列國の競争は國民生活の各方面に向つて、益々激甚なる要求を如へて止まない。ここに於て諸列國は眼を轉じ、形式を變へて、特に自國の國力の充實とか、民族の經濟的文化的海外發展とに着目する様になつた。即ち露骨な侵略的な政治的、軍事的政策は漸次妥協的、平和的な經濟的、文化的政策に形を更めて來たのである。之が即ち世界に於ける國際的關係の現勢である。かく時勢の變遷を討ねその間に流れて居る中心思想を顧る時に於て、吾人は疑もなく國家主義思想が、徹頭徹尾、時勢の底に閃いて居ることに氣がつくのである。極言するならば是等時勢の變遷や國際的關

條の經緯などは、全くこの國家主義思想の反映であると見ることが出来るであらう。

三、東西文明の接觸と國民思想の動搖——前項に於て交通機關の發達は世界列國を著しく接近せしめ、國家主義思想は國際的關係を大に緊張せしめたと述べた。更に時勢の推移に大關係を有つて居るものは東西思想の接觸であると考へる。抑、世界の各國は何れも特殊の文明を有つて居る。東洋には東洋の文明がある。西洋には西洋の文明がある。西洋文明の中にも、英國には英國の文明があり、佛國には佛國の文明があり、獨逸には獨逸の文明がある。是等諸國の文明を仔細に觀察すれば、其の間に多少の相違が見出される。従つて西洋思想と東洋思想と其の趣を異にするは勿論のこと、東洋思想の中にも、支那思想と、印度思想と、日本思想とは其の内容に於ても、其の形式に於ても、大に趣を異にするものがある。

かく各國文明思想にそれ／＼特色の生じた理由は、主として國民性の相違、國民の境遇等によるものであるといはれて居る。けれども長い歴史の過程に於ては、各民族の接近につれ彼我の文明、思想が相接觸し、他の長を採り、己れの短を補つて來たことが明白である。これが文明、思想の發展徑路で、又、各國文明思想に共通點のある所以である。さて野蠻蒙昧

なる民族間の思想は兎も角として、今日何れの國家の文明、思想と雖も、其の國民の獨力のみで創造して來た純乎たる國民の文明、思想は殆どあるまい。例へば現今の歐洲文明、思想にしても、其の源は希臘、羅馬に發したもので、英・佛・獨何れも此の希臘、羅馬の文明思想の影響を受けないものはない。加之、遠く埃及・印度・亞刺比亞の文明をも吸收し、東洋の文明をも融合して 今日の如き百花爛漫たる文明を見るに至つたものである。そは單に西洋文明ばかりでない。我が國の文明も亦然りである。我が國文明の起原は、勿論、其の始め大和民族の特有なる性情に胚胎したものであるけれども、朝鮮、支那と交通するに至つて儒教、佛敎の思想を吸收し、近くは又、歐米諸國の思想を輸入して今日の如き豐富なる思想を見るに至つたのである。

「斷藝に國境なし」と云はれて居る様に、世界各國の文化は洋の東西を問はず、漸次接觸融合せんとする傾向を持つて居る。殊に列國はそれ／＼時勢に應じて自國文化の向上發展を圖るべく、互に競うて他國文化の粹を採り、自國の短を補ふことに専心努力して居るが故に極めて迅速なる勢を以て接觸融合して居る。特に高い文化を有つて居る歐米思想は、恰も水

の低につくが如き勢を以て、世界各地に流れ込んで居る。これを我が國について見るも、明治維新前後この方、如何に東西文化が我が國に輻輳したかを回想する時に於て、實に思ひ半に過ぎるものがある。

明治維新は我が文明史上の一轉回期である。三百餘年間鎖國偷安の眠を貪り、外來文明に接觸する機會のなかつた我が國民が、一朝西洋諸國と交通するに及び、其の諸般の文明の著しき進歩を見て驚倒したのである。以來、諸般の文明は滔々として我が國に侵入した。而も見るもの聞くもの、皆、新しく、忽にして我が國民は西洋文明に眩惑せられた。かくて洋書を讀むものは、頻りに西洋を過賞し、西洋より歸朝せるものは、聲を大にして西洋を謳歌し西洋と云へば一も二もなく歓迎し洋學に非れば學問にあらず、洋風を模倣せざれば、文明國民にあらざるかの如く、歐化思想は忽ち一世を風靡する様になつた。其の極端なるものは國語を改めて英語を使用すべし。」と云ふものさへ現はれた。かやうに歐化思想の猛威を振つた其の一面に、又頑迷固陋な國粹保存者があつて「文明の利器はこれ妖術なり。」として排斥するものもあつた。其後外來思想は相踵いで侵入し、茲に我が國民思想は、古今未曾有の大

亂を見るに至つたのである。

應接に追ない外來文明の侵入は國民思想を混亂し、國民思想の混亂は直接國民道徳にも多大な影響を與へた。元來、我が國は族制的國家の體制をなし、國家は擧げて一大家族の如く君には忠、父母には孝を以て道徳の眞髓として、家族國家の如き團體の進歩を圖ることを重んじ、團體の爲めには個人の生命をさへ、犠牲にして顧みないと云ふ様な美風が存して居たが、新に闖入して來た西洋思想の根柢は、これと全く其の精神を異にし、個人の權利、義務を重んずる個人主義であつた。個人主義と團體主義とは全然相一致しないものがあり、兩者の間には大なる溝渠の横はるものがある。個人主義に走るべきか、家族主義を固守すべきか、我が國民はこの迷路に立ちて、前途の方針に迷うばかりでなく尙功利主義、自然主義社會主義の如き我が國民にとつて奇異な種々の新思想が、入り代り立ち代り侵入して來て、思想界は混亂に混亂を重ね、動もすれば我が國固有の道徳思想も其の精神を失ふではあるまいかと惧を抱くに至つた次第である。

然るに幸なるかな。我が國民の根本思想は歐米思想の爲めに全く崩壊せられることがなか

つた。かくすること二十有餘年、奔流の如く侵入して來た外來思想に眩惑した國民も、漸次自覺の氣運に向つた。恰もよし、明治二十三年教育勅語の御下賜に浴し、一起一伏、動搖常なき國民思想も、茲に千載不磨の經典を得て、其の歸嚮を明にするに至つた。

されど維新以來の西洋崇拜熱は全く熄んだのではない。今日に於ても尙依然としてかかる傾向が認められる。素より最近外來思想に對する國民の態度は、自覺的に進んで來ては居るが、一面列國の文化政策の發展と、國民思想の改造並に國民生活の向上に對する努力とは、益々思想界を賑はして居る。殊に歐洲大戰後、世界思潮の吾々に齎した思想上の影響は極めて大なるものである。

以上は思想の變動を主として本邦國民思想の推移について顧みたに過ぎないが、如何なる思想が最も優勢であらうか。世界各國も亦略々等しいこの經驗を嘗めたことであると思ふ。今日世界各國には如何なる思想が瀰漫して居るであらうか以來現今世界思潮の主なる諸傾向の太要を深作博士著「外來思想批判」から要點を採擷し、博士の意見をかりて余が述べんとする其の論旨を明にしたいと思ふ。

(1) 是れまで社會に存した諸々の階級を打破し、一切の差別を除き去らうとするもので、即ち平等化の傾向と謂ふべきものである。

(2) 少數者の國家的並に社會的權威を輕視し、一般民衆をして彼等に代らしめようとするもので、名づけて民衆化の傾向と呼ぶべきものである。

(3) 勞働なるものが殆ど凡ての社會に偏重せられ、爲に一部の勞働者は無責任なるまでに跋扈し、恰も世界は勞働者の所有とならうとする勢がある。之を勞働化の傾向と謂ふべきである。

(4) 國家の頻りに呪はれ、ともすれば在來の國境を撤し去つて、人類を打つて一丸とする勢が看取せられる。若し強いて世界人類を區別する必要があるとすれば、是までの政治、人種、宗教、歴史等の標を捨てて、其の職業を以てしようとするもので、之を呼んで世界化の傾向と稱すべきである。

(5) 列國共通の事件には、獨りこれが關係國のみの行動を排して、成るべく列國共同して之を解決し、列世共存の理を明にしようとするもので、之を國際化の傾向と謂ふべきであ

る。

博士は以上の五つの傾向を現代世界思潮の特色として明示して居る。更に博士は「如上の世界思潮の諸傾向は、何れも世界の各國の人心を動かして、或は國家の組織を改め、或は社會の制度を變じ、所謂改造の運動となつて、人をして不安、焦燥等を感じしめつゝあるのである。特に人の注意を惹くのは今日の人心に分離、反抗、破壊、革命の遠心性が存じ、又輕信雷同、挑發、熱狂等の騷擾性の存することである。」と述べられて居る。

かやうな諸傾向を有つて居る世界思潮は大戦此の方世界の國てふ國を風靡し、我が國へも亦襲ひ來つて深甚なる影響を國民生活の上に及ぼしたのである。爲に今日吾人が目のあり見るが如く、我が民族は個人主義對家族主義、社會主義對國家主義、民族主義對國際主義と種々の思想問題に於て、思想上の混亂に煩はされつゝある。我が國に於て數年來思想問題なるものと呼ばれる様になつたのは主として是が爲である。廣く云ふならば今日世界の思想界は混沌として底止する所を知らぬと云ふ様な現狀である。之れ取りも直さず東西思想の接觸を意味するもので、又世界の大大勢の混淆たる状態を語るものである。

### 第三節 現代國民理想の歸嚮

世界は巴里の平和會議を基點として、コペルニカス的一大回轉を行つた。其の間大小幾多の事變は間斷なく起り、ありとあらゆる思想の潮流は、滔々として世界中を押廻して居る。この勢の極まる所、世界は果して如何に成り行くであらうかは、全世界の人々をして一様に寒心せしめて居る所である。殊に我が帝國の同胞に於て、一層此の感を深くせねばならぬものがあるかと考へる。

さて前項に於ては臆氣ながら、現時に於ける世界の趨勢と其の基調とを訪ね、其の間、吾々國民の自覺せねばならぬ諸點に觸れた積である。顧るに吾々は世界の大大勢に鑑み、國民として將又個人として如何なる態度をとるべきかを悟り、且本邦の世界的地位を知つて、今後如何なる方面に、如何に活動すべきかを自覺したであらうか。又、時局は如何なる教訓を國民に齎し、吾人は之を如何に感じたであらうか。素より人々の性情により、其の境遇によつて多少その反動反響に相異はあらうが、吾々が等しく感じ、等しく認めて居る所謂時代の要

求なるものが、なんとなく吾人の頭上にふりかかり、而も日々國民生活の上に迫つて来て、國民のとるべき方向を暗示して居る様な感じが強くする。今、自己の淺見菲才を願ふす甚だをこがましいことではあるが、國民生活の上に時代がかく要求しつゝあると思はれる主なる諸點を抜き出して見よう。

- (1) 世界列國の接近につれ國際的關係が益々緊密になつて來たこと、
- (2) 列國は皆經濟的、文化的發展に着目して來たこと
- (3) 國民及民族の獨立と統一とに努力して居ること
- (4) 國家社會の生活は漸次平等化、民衆化に赴いて來たこと
- (5) 國勢の世界的地位に顧み國力充實の一層必要なこと
- (6) 國民の經濟思想を涵養することが急務であること
- (7) 國民思想の統一並に國民生活の向上を圖ることが肝要であること
- (8) 民族發展の傾向に鑑み特に民族的自覺の緊要なること
- (9) 各國の國勢並に國民性の如何を理解することが必要であること

(10) 公民的知識並に國民的訓練の肝要なること

(11) 社會奉仕の精神並に犧牲的精神の發揮を要すること

(12) 國際的關係の接近につれ特に國際的精神の涵養に努むべきこと

かやうに今日の時勢に心を留めて見る時に於て、幾多の問題が目につくのである。素より何れの問題も全然新しい時代の要求を意味するものとは言へまいが、最近特に著しく是等の要求が國民生活の上に一步一步迫つて來て居ることを痛切に感ぜざるを得ないのである。更に進んで是等要求の精神を、教育的見地より要約して見るならば次の様なことになるであらまいか。

第一、現代の國民をして、特に今日の世界は列國間の國際關係が極めて緊密で、又民族的自覺が緊張して居ることを知らしめ、進んで民國——民族の獨立發展から見、國家組織による生活が現下に於て最良の生活形式で、且眞實な個人生活と一致するものであることを理解せしめなければならない。其の間、國家社會の有機的組織關係を明にして理會的國家觀念を養ひ、進んでは理會的世界觀念の涵養に努めなければならぬ。

第二、世界に於ける日本帝國の地位と大和民族の使命とを自覺せしめ、進んで國家——民族の政治的、經濟的、文化的の向上發展を目標として、國力の充實と民族の統一を圖ることが特に緊要であることを覺らしめなければならぬ。

第三、我が國體の精華、國民生活の特質並に國民思想の由來を闡明にし、且、世界各國の國情、國民性の特質、並に各民族の文化の由來を理解し、進んで國民思想の統一及國民生活の向上を圖ることの肝要なることを感得せしめねばならぬ。

さて現代人の遭遇した未曾有の時勢は、國民をして其の屬する國家の眞の姿を省みさせると同時に、又赤裸々な自己をも省みさせるやうになつた。本質的價値を有たぬ國家は次第に其の存立の理由を失ふこととなる様に、眞實の價値を有たぬ個人も亦何時しか社會なり國家なりの落伍者たる運命を免れない。即ち國家の生命と個人のそれとは、全然、別種のものでなく、個人の國家創作の活動に、鑄て國家の生命をなすのである。此の意味に於て、個人生活は取も直さず國民生活である。

人は國家に屬して己が坐すべき席に坐して、對國家的責任を遂行し、以て國家の生命を培

ふ所に、自己獨自の存在を確立することが出来る。それ故に縱んば社會的に偉大でなくも、國家的に顯著でなくも、己が位置、境遇の要求する對國家的責任を遂行すれば、其の儘で國家の存立に對する貢獻となるのである。されば今後は個人生活即國家生活と云ふことが、我が同胞國族の國家生活の信條でなければならぬ。今日我が同胞民族に取つて最も緊要なことは、何人も個人生活即國家生活の理に徹することである。

五星霜に亘る世界の戰亂を經、幾多の國際問題に曲折を重ねた局後の世界は更に局面を新にして幾つかの世界的中心を求めて均衡を保たんとして居る。曰く一は米國で、他は大西洋を距てて之れを對峙する英國と、太平洋を挾さんで之に對立する我が國とであると。實に我が國は世界三大中心勢力の一を占めて、而も政治的・經濟的・文化的の各方面に於て、東亞の天地を双肩に脊つて立たねばならぬ地位に置かれて居る。今や我が國は單なる東洋の一小國ではない。世界の日本として一大使命を帯びて居る。然るに我が國國勢の世界的地位の現狀を政治的・經濟的・文化的の各見地から眺める時に於いて如何に最負目に見るも、遺憾ながら猶其の貧弱なるに歎せざるを得ない。帝國々民たるものは何人もこの重大なる現下の趨勢に

鑑み、深き思慮と堅き決心とを以て、永遠にして宏大なる國民理想のもとに奮發せねばならぬ所以を自覺せねばならない。今後吾人のとるべき教育の大精神も將、地理教授の大方針も亦之れに外ならぬと信ずるものである。

## 第二章 時代の要求と地理教授……………三

- 第一節 地理教授に對する時勢の要求……………三
- 第二節 本邦國勢の理解と其の世界的地位の自覺……………六
- 第三節 國產獎勵の必要と經濟思想の涵養……………四
- 第四節 海外發展の緊要と植民並に移民思想の培養……………四
- 第五節 各國々勢及國民性の理解と國際關係の闡明……………五
- 第六節 日常生活に必要な地理的知識の指導……………六
- 第七節 國民精神の教養と國際精神の喚起……………六



## 第二章 時代の要求と地理教授

### 第一章 地理教授に對する時勢の要求

古今未會の時局に遭遇した吾が國民教育界は、實に多事多端な立場に置かれてある。就中人類生活の舞台たる世界、國民活動の中心主體たる國家を對象として、而も其の國勢の現状と國際的諸關係等を明にすることを當面の主要任務として居る地理教授界は、極めて多忙な立場に立つて居ると云はねばならぬ。加之、改造に於ける世界地理の變動は實に複雑、頻繁で、動もすれば吾々地理教授者の注意を眩惑せんとする様な状態である。

従つて地理教授に對する意見や要求は雨後の筍の如く續出し、それら時勢の要求に應じ或は論說に、或は研究にその歩を進めて教授の革新を促して居る。是等の論說、研究たるや素より人々の着眼の如何によつて其の見解に多少の相異はある様であるが、近時に於ける強き時勢の影響は、多くの論者研究家の着眼をして、略々同一の方向をとらしめた様な傾向が

見える。曰く本邦國勢の理會、本邦の世界的地位の自覺、曰く國產獎勵の必要、經濟的思想の涵養、曰く海外發展の緊要、植民並に移民思想の培養、曰く各國々勢及國民性の理解、國際關係の闡明、曰く日常生活に必要な地理的知識の附與、曰く國民精神の教養、國際精神の喚起といふやうな點に集中して居る。換言すれば地理に對する時代の要求は、恰も自己に對する現代社會の要求と何等異なるものがなく、總ての方面に廣く、深く、徹底的に要求して居る。いざ、現今地理教授に對する時勢の叫びを要約して次に擧げて見よう。

(1) 地理教授に於ては、從來よりも更に本邦の國勢並に其の世界的地位を明にすることに留意し、以て國力充實の必要と大和民族の使命の重大なる所以を自覺せしめねばならぬ。

(2) 地理教授に於ては、特に國產獎勵の緊要なることを理解せしめ、且つ國民の經濟的思想の涵養に努め、以て生産力の増進に産業の獨立發展を企圖する念慮を喚起せしめねばならぬ。

(3) 地理教授に於ては努めて内外の國情を審にして、海外發展の念を喚起し、且、植民並

に移民思想を培養し、進んで國家乃至民族の政治的・經濟的・文化的發展を企圖する念慮を鼓吹せねばならぬ。

(4) 地理教授に於ては世界主要列國の國勢並に民族性、國民性の特質を明にし、進んで現時に於ける世界の趨勢及國際關係の概要を知らしめ、以て我が國との諸關係を會得せしめ、且着實なる國際的精神の涵養に努めねばならぬ。

(5) 地理教授に於ては國民の日常生活に必要な知識並に國家の公民として必須なる公民的知識を附與し、以て國民生活の充實と向上とを企圖する念慮を喚起せしめねばならぬ。

以上の諸要求を國家の立場から眺める時に、この叫びは眞劍な國民の實際問題であり、その聲は、眞面目な國家の死活消長に關する緊急問題であることが容易にうなづかれる。従つてこの要求たるや、國民教育上重要な意義を有つて居るもので、些細たる教材教法を討究する際にも、多くの論者の意見や主張の骨子となつて現はれて居る。以下是等諸要求の精神を述べて、國民教育——地理教授がよるべき方針を考察することに努めて見よう。

## 第二節 本邦國勢の理解と其の世界的地位の自覺

近時に於ける國際的關係の接近と國民活動の舞台の擴張とは、特に國民をして世界列國の國情と各民族の活動状態とを目撃せしめた。かくてその刺戟は國家の實力、國民文化の程度如何の反省となり、聽ては國家の獨立、民族の發展、國民文化の向上の爲めには、徹頭徹尾物質的にも精神的にも國力の充實——民力の涵養を圖ることが現下の最大急務でなければならぬと云ふことに思ひ至らしめたのである。

顧るに近來、我が國は世界の大強國の一に伍し、五大強國の一に數へられ、一等國の地位に置かれては居るが、果して名實共に伴つて居るであらうか、又東亞隨一の文明國民と稱せられる帝國々民が、皆よく本邦國勢の現状を理會し、國民の當に努むべき責務を感得して居るであらうか。之れ吾々急進文明國民の特に顧慮せねばならぬ重要問題である。茲に於てか、國運の發展を企圖し、國力の充實に参加すべき國民を教育せんとする國民教育は、特に國家の社會の實情なり、國民活動の状態なりを討ねて國家の現状を理會せしめ、又、政治

的・經濟的・文化的の各方面より國際的關係を説いて、本邦國勢の世界的地位を自覺せしめんことに着眼して居る。

國勢の理會と其の世界的地位の自覺の喚起とは、我が地理教授の當面の目的とする所で、而も其の要求する内容の大半は、地理教授によつて略達し得られるものと考へる。地理教授の主要任務を詮じ詰めると、結局、國勢の理會と其の世界的地位の自覺にありと云ふことになる。從來に於ける地理教授も亦この主眼をば忘れなかつた。然るに最近時代が要求する其の内容は、從來と多少趣を異し、且其の要求の度に於て過去の比でないものがある。

地理教授に於て本邦國勢の概要を知らしめると云ふことは、恰も歴史教授に於て國體の概要を理解せしめると同様な意識を有つて居るもので、國體概要の理解が、驅て國民志操の涵養となるが如く、國勢の理解も亦眞摯正當なる愛國心の養成並に國民的責務の喚起に資することになるのである。なんとすれば吾々が眞に自己を愛し、己の進むべき道を求めようとするならば、先づ汝自身を眞に理解せねばならぬ。理解せざる愛の多くは盲目であり、理解なき行爲は無謀である。國家は自己の延長であり、國家活動は自己活動の擴張である。地理教

授に於ける國勢の理解も亦同意義を有つて居るものである。従つて組織的な調査、合理的な考察のもとに、國土の特質や、國民活動の現状や、國家組織の状態なりが審かにされる時は自ら國家社會の實相が直覺されるであらうし、又國民文化の程度如何も洞察されて行くことである。進んでは着實な愛國心の下に、統一する國民的活動を喚起促進することになるのである。

曩に我が政府は時勢に鑑み特に民力の涵養に留意して大に督勵する所があつたが、更に當局は國勢の調査を実施して之が徹底を圖らんと努めて居る。尙、今後は現在の人口調査に止まらず、産業に、外交に、軍事に一層調査を進めんとして居る。かやうな國家の企はそれ蓋し、國力の充實を圖らんとする國家が、先づ自國の現勢其のものを明確にせんとする着實な努力に外ならないと思ふ。

尙、地理教授は單に自國其のものの吟味のみによつて國勢を眞に理解せしめ得るとは考られない。更に進んで世界各國の國情なり、我が國との諸關係なりを討ねて、本邦國勢の如何を明にし、諸他の國と併せ見ることによつて、一層本邦國勢の世界的地位を明示することが出

来る。顧るに國際的の接近は世界各國を著しく接觸せしめ、一家國に關する一國の小事件たりとも、悉く列國との關係を顧慮することなくしては到底これを解決することは不可能となつた。又世界的地位を吟味せずして、徒らに自國を尊重し、他國を夷狄視するは獨斷偏見であると云ふことに着眼されて來た。ここに於て地理教授は出来るだけ廣く世界の事情を討ね深く我が國との諸關係を審にして、世界に於ける日本の立場と世界から見た本邦の國勢とを眞に理解せしめ、かくて正常堅實なる愛國心の養成と、統一ある國民的活動を喚起することに努力せねばならぬと高潮されて來たのである。なほこの點に關する誌要求の主なるものを具體的に示せば次の如くである。

1 地理教授は國勢の大要を理解せしめ、國力充實の一層必要な事を自覺せしめる爲めに、特に本邦の國土の特質、國民生活の眞相、國民文化の程度並に國家軍備、財政、政治、外交等に亘つて、隨時現下の國勢を明かにして行かねばならない。

2 本邦の國勢は世界に於ける諸他の邦國と併せ見ることによつて眞相を穿ち、世界的の位置を明にすることが出来るものであるから、外國地理の教授に於ては常に本邦との比較關係

を重じたい。

3 國勢は綜合的のものであるから、一局面より見て判定を下す事は出来ない。故に「大日本帝國總説」「世界と日本」等の課を有意義に活用し、又一國一洲の教授は總括を重視したい

4 地方誌教授に於ては殊に國家的、地方代表的に模式的の教材に着目し、國勢形成の要素として重要視したい。

5 國勢を理解せしめる爲め、比較對照によつて教授を進めて行くことは極めて有效な方案である。依つて國勢一覽、國勢比較表並に領土、人口、貿易額、兵力、財力、富力等の比較統計類を利用して行くがよい。

6 國家的國際的の時事問題は現下の國勢を知らしめる上に利便がある。故に國定地理書の材料に満足する事なく、新聞、雜誌、官報等社會の活きた資料によつて通俗平易に現下の國勢を會得せしめねばならない。

7 我が國の租借地、新領土並に其他國民活動地に對する政策の一斑を知らしめるは固より、更に東洋諸國の一般形勢を明にして、我が帝國の地位と責務とを明瞭にし、將來國民の活

動に關し十分の覺悟を與へねばならない。

### 第三節 國產獎勵の必要と經濟思想の涵養

一度我が國勢の如何を知り、我が帝國の世界的地位を解した時に於て、果して我が國の實力を象徴するものとして誇り得るものがあるであらうが。恐く國體美、國土の美世界に冠絶する以外に何等の優秀性を有つて居らないであらう。その經濟力の貧弱なること、科學思想の幼稚なること、國民生活の低級なること、公民的訓練に欠陥のあること、到底列強の比ではない。更に愛國心とても何時までも我が國民の専有ではあるまい。

殊に經濟方面より之を眺めるならば富力——經濟的實力に於て到底英米を向に廻はして競争するには餘りに貧弱であることに氣づくであらう。實は經濟的實力に於ては伊太利にさへも及ばない。而も其の資源として天産物の貧弱なるは愚か、日用品として欠くべからざる棉花、皮革、羊毛、護謨等は殆ど之を外國の供給に仰かなければならない現狀にある。其の他機械及原料の不足等を列舉して見るならば、實に情なさを感ぜざるを得ないではないか。取

り分け食料品の自給自足の出来ないと言ふ様な現状では、國家の前途に對して憂慮せざるを得ないものがある。

然るにかかる貧弱な天産物と、微弱な經濟力を有つて居るこの國土に、人口既に七千萬、年々の増加率は實に七十萬人、國家の前途や實に多端である。今や吾々民族は國家生存の上民族の發展の上是非とも之が發展地、之が收容の地を求めなければならぬ苦境に立つて居るのである。されど、四周の形勢は容易に其の發展の餘地を見出すことが出来ないばかりでなく、我が國民を歓迎する様にも見えない。排日の空氣は比較的濃厚で、我が國勢の進展民族の發展上に一大障礙を與へて居る。時勢は苟且にも侵略を許さない。無理に排斥しつゝある土地へ押し懸けて行けば、侵略的國家であるとして痛く無い腹を探ぐられるのが目下の形勢である。

なにはともあれ、吾人は生存競争に生きねばならぬ。生存に打ち勝つて生活の安定を齎めねばならない。茲に於てか最近、國民活動の根本動力たるべき國家の經濟的實力の涵養を圖ることが、現下の國情と世界の趨勢とに鑑み、最大急務であると着目され、殊に衣食住の自

給自足や、産業の獨立の必要なることが高潮せられるにつれ、國産が頓に奨励せられる様になつた。更に經濟上の要求は生産力の増進となり、經濟思想の鼓吹となつて來たのである。

凡そ、世界に於て衣食住の自給自足し得る國は極めて少ないであらう。なんとすればかかる資格を有する邦國は、云ふまでもなく國土の廣さと、氣候帯の三帯に跨るを必要とするばかりでなく、地下に埋藏せる天産物の豊富なるを要するが故に、人爲的になし得るものでなく、寧ろ不可抗力に屬するものであるからである。我が國は大平洋中北緯二十度より五十度に亘る細長い島帝國であるが故に、如上國家存立の要件たるべき氣候帯、國土の廣表、地上地下にある天産物等には比較的天與恩恵を受けては居るが、尙幾多の缺陷を有して居る。例へば熱帶地方に適せる棉花、護謨の如きは、とても之を國內で自給することは不可能である。廣大なる原野に乏しい我が國は南北米、濠洲、蒙古等の如き大牧場地を欠いて居るから皮革、羊毛の自給は固難である。又地下に埋藏の金屬なども極めて貧弱でとても需要を満たすことは出来ない。殊に鐵、石油、白金等は其の甚しいものである。其の他農産物に於て、工業の原料品に於て樂觀を許さない。

かやうな現象は國家として止むを得ないことで、吾人は只この與へられた自然を最もよく利用し、之に最善を盡すより外に道はないのである。幸に如上の天産物は、東亞並に南洋の隣境に無限に包蔵せられて居るから、互に國交を修め有無を交換し、漸次經濟的發展を試み其の足らざるを補給し、これを資源として商工業の發展を企圖する用意がなければならぬ。

一面我が國は高山峻嶺に多く林産物に富み、又四面環海の帝國は航海業・運搬業・水産業の如き好箇の天職を有つて居る。是章は立國の要素たる農業と共に我が國の産業として大に奨励し發達せしむべきである。固より今日我が國が全然産業の獨立を圖るとか、食料品、原料品の自給自足を完成すると云ふことは到底不可能なことであるが、少くもこの點を目標として國産を奨励し、經濟思想の涵養に努め、尙、原料品の獲得と生産品販路の擴張とを企て、國民經濟の發展と國民生活の安定とを圖らなければならぬ。

由來、我が國民は經濟的思想と其の實行に於て頗る遺憾が多い。而して我が國の經濟的實力が諸他の列強に比して大に遜色がある。然るに現時の國家社會の實權が軍人から政治家の手に移り、更に政治家から實業家へ移つたと云はれて居る様に全世界の大勢なり、列國の主

力はこの經濟的方面に向つて奮進し、頓に經濟的活動が全盛を占めるに至つた。従つて經濟的實力に乏しい我が國の如きは特に國産奨励の緊要なることを十二分に理解せしめて國民の經濟思想の涵養を圖り、以て生産力の増進と産業の獨立發展とを企圖する念慮を喚起し一面時勢に順應すると同時に世界の經濟戰に備ふる所がなければならぬ。然らずんば來るべき激烈なる國際的經濟戰に於て、劣敗者の地位に立たねばならぬ運命に陥らぬとも限らない。大戰中に於ける獨逸の境遇は吾人にとつてよい鑑であつた。なほこの方面に關する要求を實際的に示せば次の如くである。

- 1 地理教授に於て産業に關する知識は、經濟思想中主要なる地位を占むるものであるから、特に産業の教授を重視して、之に關する國際的知識を授與することに努めねばならない。
- 2 地勢・氣候・風土・天産物の分布等により、産業及産物の種類を異にすることを知らしめ、且人間の努力はそれを或る程度まで變更し得るものであることを知らしめたい。
- 3 時勢に鑑み特に産業の勃興、國産の増殖の緊要なることを知らしめ、又時局の影響によつて振興せる生産業について知らしめるがよい。

4 我が國は産業上地理的關係に於て天與の好位置にあることを知らしめ、來るべき經濟戰に對する方針として益々産業の振興を圖り、海外貿易の發展を期すべきことを明にしたい。

5 産業教授に於て原料、加工費、生産物價値の關係及び用途、販路の廣狹等によつて産物に關する知識を授けて置くがよい。

6 舶來品との品質、價格、用途等について正當なる評價を與へて、國産品改良の必要なることを知しめ、且國産尊重の精神を涵養せねばならぬ。

7 可成、製造工場に於ける生産狀態、加工狀態等を參觀せしめ、又は博覽會共進會を利用して産業に關する趣味を養ひ、尙産物鑑識の能力を得しめたい。

8 外國貿易の現狀を詳にし、以て之に對する國民の覺悟を促し、又、海外市場に於ける本邦品の評價に省みて商業道德の必要を知らしめたい。

9 我が國の産業は其の組織小なるが爲め、整一せる多量の製品を一時に製造し得ざる欠點がある。依つて將來は大工業の必要なる所以を具體的に知らしめるがよい。

10 特に重要な貿易品は産物標本によつて其の品質・價格・用途を知しめ、又統計圖表等によ

つて其の販路貿易額を明にして置きたい。

11 交通の發達は一般經濟に大なる關係を及ぼすものである。故に水陸交通の教授に於ては、如何に經濟的方面に影響を齎しつゝあるかを考察せしめたい。

#### 第四節 海外發展の緊要と植民並に移民思想の培養

抑々近世各種科學及び其の應用の發達と時局の發展とは、主として全世界に於ける經濟の發達を促し、延いて人口の急激な増大を見るに至つたと云はれて居る。かくて過去一百年間に於て世界の人口は殆ど三倍に達し、今や全世界の總人口は實に十六億五千萬を算し居る。今後異なる條件の發生せざる限りは、この加速度的増加率を以て増殖するは當然の勢である。茲に於て全地球に幾億の人口を收容し得べきかについて色々の推定が行はれて居る。若し、現時の佛國々民の生計程度を以て標準とするならば二十三億の人口を收容し得べく、日本の生計を以て標準とすれば、二百二十四億の人間を收容し得べしと言はれて居る。

生活の程度に依つて地球上の棲息し得る人口が變化することは言ふまでもないことである



が、假にその中間を取つて百億の人口を收容し得べしとするも、現在一ヶ年間に増殖する人口を、假に百人につき一人の増加率と見て計算して行くと、二百年に満たずして地球上に百億の人間を算ふるに至る譯である。是は單なる理想的問題でなく、又机上の空論でもない、百年後二百年後に於て必ず遭遇すべき事實の問題である。

顧るに我が國は一躍して國土の面積が四萬三千方里を算するに至つたが、又年々約七十萬の人口を増加して居ることも事實である。人口は年々加速度的に増加して密度を加へて行くけれども、國土の擴張は殆ど不可能であるから、勢、生産に限度ある國內に人口溢れ、益々激甚なる生存競争を現出するに至るのである。茲に於てか天與の富源が裕であり、而も未だ開拓せられざる地點に、自ら手を出して行かねばならぬ境遇に立ち至るのである。かの歐米列國が勢力を我が近隣に扶殖せんとする時に當り、我は徒らに正義人道を標榜し、晏然拱手すべきではない。否我が國は海外發展に於て一步立ち遅れたのである。吾々國民は因循躊躇すべきではない。正當なる手段により、盛に政治的にも經濟的にも文化的にも海外に向つて發展せねばならぬ秋であると考へる。

さて顧るに國內の産業は未だ十分なる發達を遂げて居るとは云へない。故に國內に於て産業を勃興せしむれば、或る程度まではなほ多數の人口の收容を圖ることが出来る。國民が國內にありて生産の途を講ずることは固より大切な事であるが、又故郷に戀々とせず、海外に雄飛發展して大に利權を收めることも、國民——國家の維持發展上大に意義の存することである。動もすれば海外發展と愛郷心——愛國心との間に、大なる矛盾がある様に思ふものがあるけれども、それは謬見である。手段こそ違へ所詮は本國のために致す點に於て一である。尙、我が國の如く人口が多く、而も狭い國土に生活を求めて群集する國家にあつては、一部の壯年者を外國に移したからと云つて、決して内地の生産業に打撃を與へる様なことはない。寧ろ自國民が盛に海外に移住すれば、自國の物産に對する需要を増して貿易の領域を擴張する。又海運業を促進し富源の基を開くことになる。剩さへ移民が本國に送還する巨額の金は本國を富ますこと多大なものである。

かく民族が四方に移住して到る所に本國の言語を傳へ、風俗嗜好を移すことは、總て國力發展の基礎を築くことになる。即ち移民は變じて植民となり、出稼地は又植民地となる様な

ことも古來の歴史が證明して居る所である。

移民と共に植民も盛に行はねばならぬ。植民地の經營も亦我が國目下の急務である。最初植民地經營には多大の費用を要し、この費用は何れも本國が先づ負擔せねばならぬ。今日帝國の富源をなして居る臺灣の如きも、數年間は本國の大なる負擔であつたが、今は本國のため豊富なる原料を供し、廉價なる食物を給して經濟上の發展を助けて居る。又政治上に利權を得て居ることも見逃すことが出来ない。我が國には其の他樺太、朝鮮、關東州、滿州等に植民地を有して居るから、これ等の經營は現下の焦眉の問題でなければならぬ。

海外發展の氣象と植民並に移民思想の培養とは、我が國の現状から觀て極めて重要な問題である。地理教授はこの點に觸れる機會が多い。故に現時の國情や、國民の海外に於ける活動の狀態等を明にし、國家の經營並に民族の發展から見て、特に海外發展、植民及移民政策の緊要なる所以を知らしめるがよい。尙、今日本邦の移住者が到る所に於て排斥されて居ることであるから、特に此の點を顧慮して、移住者の出稼狀態なり、排斥の真相を討ね、十分に反省を與へねばならぬ。

由來、日本人は海國民たるに拘らず海洋に關する知識に乏しく、徒らに郷土に執着して、海外に雄飛するの氣分を欠いて居ると云はれて居る。偶々海外に出動することがあつても一時的移住に過ぎないとか、單に個人的局部的の活動に止まると云ふ様な有様で、團體的に持續的に着實なる成功を遂げるものが少いと云ふことである。これ素より我が國土が氣候溫和にして、土地豊饒なるが故に、今日生活上に強い壓迫を感じないとか、古來農業を重んじた爲めに、土地に對する執着が鞏固であるとか、又は開國尙日淺く、國民の海外事情に精通しないと云ふ様な諸種の事情もあらうが、現下の國情に鑑み等閑すべからざる國家の緊急問題である。何にはともあれ盛に着實なる海外發展の氣象を鼓吹して、國家百年の大計を立てねばならない。

それが爲めには先づ時勢の要求に鑑み、特に經濟的發展に着目するが肝要である。而して現下の經濟的發展は主として移植民を行ふこと、商業上の權利を擴張すること、の二方面に主力を注ぐがよい。然るに日本は目下生産の材料が不十分で商工業の發展も今日のまゝでは甚だ覺束ない。そこで第一に海外に投資を圖り事業を企て、内地の工業原料を得るの途

を講ずることが肝要である。之によつて内地の工業の勃興を企圖し、その製作物を世界各國市場に提供して、商權を廣く獲得しなければならぬ。かくして本國に於て人口過剰の爲めに減縮せられた富の分配を緩和し兼ねて本國の工業材料を供給し、商業の發展を誘導することが出来るのである。之は單なる理想論ではない。我が國の境遇として最も適切なる方案で、又最も實行し易い方途であると言はれて居るものである。海外發展、移民及植民思想の鼓吹は此の意味に於て目下の急務として要求されて居るのである。この思想を涵養する上に特に着目されて居る點を擧げると次の如くである。

- 1 海外發展の氣象は、我が國の實情を知る事によつて生じた正當健實なものでなければならぬ。故に土地の事情を顧みず徒らに海外雄飛の必要を鼓吹するは至當でない。
- 2 特に本邦人活動の好舞臺たる地方の地理、即ち其の地の位置・氣候・産業・交通・人情及風俗等を明にして雄飛の氣象を鼓舞するがよい。
- 3 海外に於ける本邦住民の活動狀況を明にし、尙近時に於ける移民排斥の真相を訪ねて、將來、移民の素質をよくすることの急務なることを知らしめねばならぬ。

4 我が國は海外移住も必要であるが、特に植民地の充實上、植民政策の極めて緊要なるものがあるから、植民地の地理は之を重んじて植民活動の氣象を鼓舞して置きたい。

5 本邦の女子は外國の婦女に比して海外雄飛の思想に乏しい。依て女子教育に於ても海外發展の氣象を作興することに努めるがよい。

6 過去及現在に於ける各國の移植民政策の概要を知らしめ、且各國の植民地が如何なる状態にあるかを知らしめたい。

7 人口過剰は單に植民又移民等の實行のみによつて緩和されるものではない。國內産業の發達によつても調節され得るものなることを事實について説かれないものである。

#### 第五節 各國々勢及國民性の理解と國際的關係の闡明

一國家が一國の獨立の對面を維持し、世界の競争場裡に立つてよく國民の理想を實現して行くには、常に自國の國情を理解して國力の充實を圖ると共に、廣く世界の趨勢に着眼し、現實及將來に於ける世界列國の形勢なり、各國の國情なりを洞察せしめて、世界に於ける本

邦の地位を知らしめ、衆に先んじて國を愛ひ、國を愛し國を圖るの國民を養成して行かねばならぬ。特に國際的關係の接近と國民活動の擴張とは、他國の國情並に國民性の理解を一層必要ならしめた。然るに比較的世界の趨勢とか、各國々勢とか其の國民性などを理解せしむる機會に富んで居る地理教授の如きも、尙、依然として個々の地理的事實、區々たる事象の取扱に止まつて、全局を大觀せしめるとか、真相を考察せしめるとか云ふ様な方面の努力が未だ充分でなかつた。

さて日本人でありながら日本を眞に理解しないものが尠くない。たとへば誰でもよく云ふことであるが日本は天然の風景に於て地球上第一で、日本は實に世界の公園だと信じて居る果して世界一の風景國であらうか。外國人が日本の風景を賞するのは彼等本國の大陸的風景と全然異なつて居るといふ點、即ち一種の畸形的の風景を奇として賞讃するのではあるまいか。外國人の本國にはそれ／＼大陸的に雄大な天然山水の風景を有つて居るのである。決してその特徴に於て日本の風景に劣るものでないと言はれて居る。又、日本は氣候風土に於て世界唯一の樂天國であるかの如く稱して居るが、果してさうであらうか。之れ亦世界の地理

を廣く理解せざる偏見ではあるまいか。

又、日本人を以て最も愛國の精神に富み、此の美風に於て世界第一であると自稱し居る偏見論者が尠くない。固より何れの國にも國民的自尊心があり、又愛國的精神を有たないものはないのであるから、所謂お國自慢は決して奇とするに足らない。しかし從來の教育は動もすれば日本人のみが世界唯一の愛國者を以て充されて居る唯一の國の様にして、外國人は其の國に對して忠誠の精神を有つて居る程度が何れも低いものゝ様に考へ、愛國心——犧牲的精神は日本人の獨占かの如く思はしめた。恰も支那流の中華思想の如く周圍の外國人を輕蔑して、東夷・南蠻・北狄・西戎など、稱へて居ると同一徹な偏狹思想であるまいか。現に最近の歐洲大亂に英・佛・白・塞等の國民は勿論獨逸でも勃牙利でも皆よく愛國犧牲の精神を遺憾なく發揮して居るのである。愛國心は決して日本の獨占でない。かやうな思想を傳統的に信じて居ると云ふことは、取りも直さず世界に於ける民族——國民の國民性を十分理解して居らないからである。

尙、又日本人は米國民を評して彼等は拜金主義、物質主義で、而も人情輕薄で尊敬すべき

國民でないなど、一概に放言するものがある。寔に慎まなければならぬ言動である。一度米國の國情なりその國民性なりに接したならば了解せられることであらうが、世界に於て米國人ほど慈善とか、宗教とか、人道とか、又學問獎勵の爲めに私財を投じて偉大なる事業を経營して居るものは他に其の類を見ないであらう。特に自國のみならず、國外に對してまでも活動して居る尊敬すべき人物に富んで居る。其の他各國の國民性にもそれ〴〵特徴を有つて居るよろしく吾々地理教授者は親しく國民性を調査し、一概に東洋流な日本式な偏見を以て、獨斷を下す様なことがあつてはならない。之れ國民性研究の必要なる所以である。

かやうな偏見は蓋し外國の事情に無理解なその結果に基くもので、外交問題などについては屢々遭遇することである。例へば最近米國が態々ウィルソン大統領自ら巴里會議に出馬して調印した條約が、米國上院に於て批准が拒絶された。之を我が國の事狀を以て解すならば實に不可解なるものがある。然るにこの事情は全く米國憲法に於て、上院と政府との間に條約に關する特殊の權限的關係がある結果に外ならないのである。

又加州に於ける日本人排斥の種々の運動が起つた。日本政府は華盛頓政府と外交上の交渉

を試みても一向埒が明かない。そこで忽ち米國の誠意を疑ひ一概に米國に對して惡感を抱く様になる如何にも加州に於ては日本人排斥問題が頻々として起り、甚だ不愉快であるが、而も此の問題を日米兩政府間で解決しようとする双方の誠意は疑ふ餘地がないのである。けれども容易に解決が付き相でない、と云ふのは、畢竟、米國憲法上に於て中央政府と州政府との權能が極つて居るからである。日本が米國に交渉を重ねても華盛頓政府が加州のなす事に對して如何ともすることが出来ないこと云ふのは米國憲法の他の國と異なつて居る所である。要するに此等米國の國情即ち米國特殊の憲法、米國の政治組織等について理解があれば、徒らに米國の態度を非難したり、或は其の誠意を疑つたりする様なことはない筈である。

以上は主として米國の國情について述べたが、其の他支那が何故に南北の統一が出来ないで混沌たる状態にあるか、バルカンの地方は何故に屢々騒亂の巻となるか、佛國は何故に人口が増加せぬか、何故英國の如き國家にも愛蘭問題の如き事件が勃發して居るであらうかと云ふ様な事情は、どうしても其の國の國情を審に理解せねば容易に解決がつかない。殊に國際的關係などに至つては一層其の理解が緊要である。

要するに世界の現状を知らんとせば、廣く諸外國の事情を解さなくてはならない。世界各國の文化を理解せんとせば、其の民族——國民の國民性を窺はねばならない。又、眞に自國の國情を正當に解さんとせば、深く國際的關係に通ずる必要がある。殊に世界的國民を養成せんとする日本の教育に於ては、今後一層世界的識見の涵養に努力せねばならぬ。

流石は英國である。最近英國に國際事件協會なるもの設けられた。それは英國人の爲に外國の國狀や國際關係等を知らしめる爲めに新設せられたものであつて、此の協會には總て國際事件に關する一切の出版物を蒐めた圖書室と、其れから一目の下に世界の現状を明にする處の地圖室と、又國際事狀について講義する講堂などが設備されて、時々有益なる講演が開かれると云ふことである。國民をして世界の現状を知らしむる方案としては、最も有益なる試みであると思ふ。かやうな諸點からして地理料に於ける世界地理教授を眺める時に於て、その任務の重且大なるを切に思ふものである。以下具體的に要求事項を示して見よう。

1 各國の國民性は外國の沿革なり産業なりを説く際に、其の國民性がその國の盛衰消長に如何に關係深く、又産業の發達生産物の趣向等に如何に關係深きかを考察せしめるがよい。

2 主要諸列國の國民性につき特に其の長所短所を比較對照して其の如何を批評せしめ、特に我が國民性に比較して他山の石たらしめねばならぬ。

3 各國民性の觀察研究は困難である。従つて人によつて多少其の見解を異にするものがあるから、多くの人々の認めて大體異論のない明瞭なものに止めて置くがよい。

4 外國地理教授に於て各國の國勢を知らしめると云ふことは重要な任務である。國勢は單なる個々の地理的事實の羅列によつては理解されない。故に其の國の特徴を捉へて研究することによつて該國の特質を窺はねばならぬ。

5 各國の國勢は常に我が國との國勢と比較對照して取扱ひ相互の世界的地位を知らしめるがよい。

6 地理教授は個々事實を知らしめると同時に大勢を理解せしめなければならぬ。故に個々事實を何時も大局より眺め、他との關係を忘れてはならない。部分は今體より眺め、全局は局部より見る様にせねばならぬ。

7 特に最近の時局に着眼し、變動しつゝある事變に注意してその大勢を知らしめるがよい。

#### 第六節 日常生活に必要な地理的知識の指導

地理科は本来教科の性質として、内容が自然方面より人文方面に亘つて居る。従つて地理科は廣く時勢の要求に應じて、國民生活なり、日常生活なりを實際に指導し得る機會と其の資料に富んで居る。然るに從來の地理教授は國家と云ふ立場に於いて國勢の概要を理解せしめるとか、又は特に愛國心を涵養して國家的義務の念を喚起すると云ふ様な點にのみ注意が集中して居た。

素よりかやうな着眼は地理科の本質なり、其の任務から見ても至當な態度ではあるが、又國民の日常生活の指導と云ふ點から見ても、比較的國際教育資料と其の取扱の機會に富んで居る教科であると言はねばならない。故に地理教授に於ては國民の日常生活に必要な知識とか、公民として必要な公民的知識——社會的識見などを附與し、以て國民の日常生活の充實と向上とに資して行くことが肝要である。加之かやうな着眼は本科教授の一生面であるし、又時代の一要求であると思ふ。

吾々が地理に於て横濱・神戸・長崎・日立・日光・所澤・箱根と地名を尋ね、東海道線・山陽線・南滿洲鐵道と鐵道を列べ、仙臺平・西陣織・友禪染・久留米絨・薩摩燒・九谷燒・瀬戸燒・備後表・堺の双物と物産を數へ擧げて居る。而して是等についてそれ／＼地理的に吟味を與へて行くことと云ふことは、素より都會なり、鐵道なり、物産などが國勢を形成する一要素として取扱つて居るには違ひないが、一概にさうばかり斷言は出來まい。例へば横濱で生絲を取引して居る商人にとつて、横濱の地理は自己の活動舞臺に關する知識である。神戸に住居する人にとつて、神戸其のものゝ地理は直接必要な知識である。又、日光、箱根に遊ぶ人にとつて、日光、箱根に關する地理的知識は極めて興味のある知識である。廣島から東京に行かうとする旅行者にとつて、山陽線、關西線、東海道線の連絡、距離、時間、運行等に關する知識は缺くべからざる常識である。仙臺平なり、久留米絨なり、九谷燒なり、備後表なりを需めようとする人にとつて、是等の産物・品質・用途等は又なくてはならぬ常識ではあるまいか。其の他吾人の身邊を取圍む個々の地理的事實なり、地理的方法なりについて見る時に於て、何れも國家的の要求と個人的の要求との二方面に意義あることを認めねばならぬ。

尙、吾々が日々取扱つて居る地理的事實中、單に國勢の理解一點張で行くと、大した價値のない教材でも、個人の常識を高め、吾人の生活を圓滑ならしめる上から見ると非常に價値あるものもある。又一見吾人の生活に何等の關係もなさうな知識で、而も社會的識見の基礎として缺くべからざる重要知識もあるのである。地理科はあらゆる方面の教科と關係をもつて居る。又一時間の教材から見ても多種多様な内容を有つて居るので、單に處世上の知識開發に資するばかりでなく、社會的識見を涵養することが出来る。故によし教則には日常生活に必要な知識を授けると云ふ意味のことが表示されて居らぬとしても、日常生活に關する知識を附與するとか、社會的識見を養ふことなどは、地理科の内容からして自然接觸することであるから、この考を以て地理教授を行ふことは極めて緊要なことで、而も國語・算術・理科・家事などと共に正に本科教授の一任務でなければならぬと考へる。

更に地理教授は國家組織とか、政治機關の設備とか、府縣郡市町村等の地方自治團體とか又は各國の國情なり國民生活の状態などを對象として取扱ふが故に、自ら公民的知識を附與する機會に富んで居る。殊に國家とか、自治團體とか云ふ様な政治的經濟的の社會を一單元

として取扱ふが故に、國民として必須なる公民的知識が明確に吹き込まれることになるのである。

要するに従來の地理教授は處世上常識を授けることに於て、迂濶であつたと云ふ事は色々な點からして認められる。極端に云へば數年學校で地理を學んだものと、全く地理を學ばぬ田夫野人との間に、殆ど大差がないと云ふ様なことが屢々ある。即ち學校の地理科では方位距離、面積と八釜彫く云ふが、然もそれが實際と交渉のない圖上の詮議に止まつて居るがために、社會世間の實情については何等理解の眼が開かれて居ない。所が氣象學を學ばない田夫が明日の天氣を豫測し、測地學を學ばない野人が面積や距離を巧に目測する。つまり學問は學問としての學問ではいけない。人生の上に活用され應用されるものでなくてはならぬ。今後の地理教授は一寸四方位の烏津製標本を唯一の產物鑑識材料として示したに止まつて、實際兒童の着けて居る羽織の地質が何併であるかも授けられぬ様なことでは困る。空漠たる地理事象の羅列に興味を以て居る地理教授では行詰りだ。又國勢の理解一點張が地理教授の生命ではない。愛國心の涵養のみが地理教授の任務でない。國民の國際生活指導に地理教授



の意義のあることを忘れてはならない。次にこの方面に關する具體的要求を擧げて見よう。

1 地理教授は教科の本來の性質上よりして處世上必要なる能力を與へ得る機會が多い。依て教授は兒童の生活指導に一段の注意を拂ひたい。

2 現時の世局に關し、人の談話により、又は新聞雜誌に散見する地名及其の他の地理的事項は其の都度特に明示して置くがよい。

3 産物教授に於ては其の品質、製法・用途・販路等の大略を示し、且兒童の身邊の庶物に關する理解を與ふる事に努めたい。

4 天界・氣界並に地球上に於ける諸種の自然現象中、國民の常識として知る必要のある事項は隨時之を教授し、以て兒童の識見を高め、常識の内容を豊富ならしめたい。

5 教授はたゞに事實を憶記理解せしむるに止まらず教授上實習を多く課し、處世上必要なる技術的修鍊を施し、特に評價、鑑識、測定描圖等の能力を得しめねばならぬ。

#### 第七節 國民精神の教養と國際精神の喚起

近來國民精神の陶冶に關する思想は、國際關係の接近並に國家組織の發達につれ漸次高潮し、且つ國民的教育思想の進歩に伴つて、次第に其の内容も擴充せられて來た。殊に今次の事變によつて層一層國民精神の涵養の必要なることが、強く國民の間に自覺されて來たのである。

抑々國民精神たるや、深く國體の特質に根ざし、永い間の國民の鍛鍊によつて漸次建設されて來たもので、一朝一夕の教化鍛鍊によつて出來上つたものではない。即ちこの精神は國家の盛衰消長と俱に存在し、而も國民の理想實現に獻身努力して來たもので、今日に於ては國民の血となり肉となつて國家的に活躍して居るものである。例へば我が國民的道德の特色とも云ふべき勤王の精神とか、忠君愛國の至情とか、教神尊祖の念等の如きもので、國體の質とか、歴史の成績とか、國民性の如何に深い根柢を有つて居るものである。加之、古來國家に事ある時は、直に起つて國威を發揚し、國家の面目を維持し、而もその度毎に鍛鍊せられて、今日の如き鞏固なる國民精神をなすに至つたものである。

かくて古來我が國民の間には嚴然として國民精神なるものが存在して居る。然るに時勢の

進運は、かやうな固有の國民の精神のみでは、到底今日の國家社會を維持發展せしめて行くことは覺束ないと呼ばれて居る。なんとすれば現時の國家社會なるものは、過去の時代のそれとは國民文化の程度なり國民生活の状態を異にし、のみならず急激なる變遷を遂げて居る。従つて時勢に應じ、今日の國家をして維持發展せしむるに足る國民精神が教養せられなければならない。換言すれば世界の競争場裡に立つて、國家の安全と國民生活の安定とを圖り、時勢に順應して國家——民族を發展せしめて行くには、固有の國民精神を益々發揮して行くことは固より緊要な事ではあるが、更に現時に於ける本邦の國勢なり、國勢の世界的地位なりを明にし、又國家社會の組織、國民生活の状態並に國憲國法等の如何を明にすることによつて、現代の國家社會が要求する所の着實真正なる國民精神を教養することが極めて肝要である。

更に進んで地理科はこの國民精神の教養に参加し、主として如何なる方面の心情を陶冶し且其の精神の基礎を建設するものであるかを簡潔に述べて見よう。本來地理科は教科の本質として、現在に於ける我が國土の狀況とか、國民生活の状態とか、現時の國運の盛衰等を明

にすると同時に、是等の理解を通うして時勢に應ずる國民の思想感情を陶冶せんとして居るものである。即ち現在に於ける國家社會の事情を理解することによつて、國家に對する責務を重んじ、更に國家の爲に獻身奉公せんとする精神の涵養に直接關係を有つて居るものである。詰り、地理科が國民精神の教養と交渉して居る點は、國勢大要の理解を通うして愛國心を涵養し時勢の要求に適合する所の有爲有能の國民を教養せんとする點に存するのである。

何故に地理科が特に時勢の要求に適合する國民精神の作興に最も有力であるかと云ふに、地理科の内容たる國勢そのものは、總て國家活動の現勢を示すものである。従つて之を通うじて教養される國民精神は時勢に應じたものであらねばならぬ。例へば我が國現時の國土の面積とか位置氣候天産物などが明示され、諸海外國のそれと比較される時は、自ら國土に對する愛着の念が喚起されるであらうし、又國家の政治とか外交・兵備・財政などの一斑が明示されることによつて、國家に對する義勇奉公の念が鼓吹されることであらう。又産業とか交通、貿易などの發達狀況を見ては、國民的責務の感が喚起されることであらう。

要するに地理科が國民的精神の教養上最も價值のある所は、現下の國勢に關する事實を目

前に示して、國民の覺悟と自覺とを促し、以て着實にして生氣ある國民的精神を養成する點にある。殊に日進月歩の實力に關する事實を知らしめることによつて、時勢に適應する國民精神の作興を圖り得るのは本科獨得の使命であると信ずる。されど地理科によつて教養されて行くものは、時勢的國民精神の一方面に過ぎない。歴史・修身・國語其の他の教科と相俟つて、圓滿にして堅實なる國民精神が修練されて行くのである。

時勢に應ずる國民精神の涵養が以上の如く重視されて居るが、更に時局の開展は國際精神の發揮を要求して居る。世界大戰に於て吾人の學んだ最も大なる教訓の一つは獨逸其のものである。獨逸が四境の聯合軍を相手にあれ程まで健闘を續けたと云ふことは、如何に其の國民教育が徹底して居たかと云ふことを思ふと同時に、最後に於ける其の悲慘なる潰壞も亦、その極端なる國家主義が禍したものであるまいかと思はれる。即ち獨逸が強大を致した所も、しかして又悲運を招いた原因も、一に其の侵略的・軍國的・非人道的な國家主義思想が齎した自業自得の運命であると思惟される。

吾々は國家主義乃至は國民精神そのものを全然否定するものでは勿論ない。何人も自國の

國力充實に参加して、國家の維持發展に努力せんことを等しく希望せぬものはあるまい。その愛國的眞情に於て何國人も同様であらうと思ふが、其の主義——精神の内容に於て、あまりに個人主義、軍國主義、鎖國主義、侵略主義に走る様な思想には吾人は敢然として反對せねばならぬ。

這般の巴里講和會議に於ける國際聯盟の提議たるや、素より獨逸の極端なる軍國主義的領土膨脹策の危險に懲り、將來かくの如き事變を繰返さぬ様に、十分警戒し、且制限を加へると云ふ様な意味に於て、武力的戰爭の跡始末する一的手段ではあつたらうが、一面國際的、平和的・人道的・民族的・民本的な世界思潮を基調としたものであることが、明に窺はれる。

からて輓近に於ける國際的關係の繁多に赴くに從ひ、教育上に於ても國際主義をとり、人道的精神の鼓吹を圖らんとする思想は、一方に於ける國家主義と相並んで進歩發達して居る殊に今回の大戰に悲慘を嘗めた獨逸は、從來の軍國主義・國家的利己主義・專制主義を排して自由主義・國際主義・民主主義を高唱し、「教育は個人をして自國の爲め並に世界人類の爲めに最善の奉仕をなし得る素養を與へねばならぬ。」と論じて居る。英米の諸國に於ても、この國

際主義の教育は理論上實際上に盛に行はれて居る。又ジュネーブの國際聯盟事務局に對して我が國から提議した國際教育會議の開催の趣旨も、明に教育上の國際主義を標榜したものに外ならない。

國際聯盟の基礎は未だ鞏固でない。國際教育會議も亦未だ設置されるに至らない。けれども時勢の要求はこの方向に向つて進みつつあるから、遠らず其の時連に際會するであらう。素より國際聯盟の不成功、國際教育提議の不成立は、如何にその理想の遼遠なるかを思はざるを得ないが、併し吾人はそれが爲めに國際道徳の進歩、國際的關係の平和解決に對して絶望するには及ばない。現實の基礎から一步步築き上げて行くことの必要を感じるのみである。吾人の眼が天を望み得る限り、吾人の理想に盲目たるべきではない。併し吾人の足が地に在る限り、地を離れて理想に進まんとするは危険である。危険に陥ることなくして一步步理想に接近すべきである。

國民教育を閉却した、極端なる國際教育でなく國民精神の上に國際精神が養はるべきものである。動もすれば現今の國際主義には個人主義のものが多し。吾々は國家主義の國際的理

想にして始めて實現し得べきもので、國家的生活のない昔ならばいざ知らず、今日の時勢に於て國家的基礎の上に國際的理想を樹立すべきものであると信ずる。ケルシエンヌタイナは「公民の義務を忘れて人類につくす人は、婦人運動解放のために子供と家政とを無視する婦人と毫も選ぶところがない。」と云つて居る。味ふべき言ではあるまいか。

教育は自國民の生活に初まつて國家的基礎の上に展開せねばならない。同時に教育は世界諸國民の幸福より平和的協調を看過してはならない。教育は現に自國の爲めの教育のみを狙つて居るが、併しそれ以上に各人は自國民と他國民との關係及び近代の國勢なり國民性なりを理解することを心掛ねはならぬ。かくて國家は互に排外的偏見を國民の思想より驅逐し、それに代ふるに堅實なる國家的思想の上に立つた國際精神の涵養に務め、聽て政治的・經濟的・文化的各方面の世界的活動に参加し得る様な國民を教育すべきである。

地理科は前述の如く地球上に於ける人類生活の状態を明し、列國の國勢、國民性並に列國間の國際關係等を對象とするものであるが故に、世界的の識見を涵養して、國民の偏見を驅逐することが出来る。同時に國際的諸關係や民族的關係等を理解せしむることによつて、世

界同胞に對する人類的心情を陶冶することが出来る。地理料は一面に於て眞摯な國民精神の涵養を任務として居ると共に着實な國際精神の喚起を使命として居るものである。以上の諸點に對する要求を具體的に示せば次の様である。

- 1 我が國勢（國土、文化、政治、教育、軍備、住民、産業、面積、財産）を明にして、諸外國と比較して堅實なる愛國心を高めねばならぬ。
- 2 我が國土の美なる所を知らしめ、愛郷の念の養成に努めねばならぬ。
- 3 新領土及び我が國の勢力範圍に屬する地方の地理を授くるに當り、其の實情を明かに、其の地の住民に對する心得を理會せしめるがよい。
- 4 外國地理を授くるに當つては軍備、財政、産業は、これを我が國と比較せしめその沿革を重視し國民性及文化の特色を理會せしめるに努めねばならぬ。
- 5 列強國の植民政策及び極民の現状を知らしめ、以て國民活動に對する覺悟を與へねばならぬ。
- 6 名所舊蹟を尊重保有するの念を養ふがよい。

- 7 郷土の取扱を重んじ、郷土との關係密接なる地方の地理に留意して授けねばならぬ。
- 8 各國の國情及び國民性を明かにして、世界人類に對する理解を與へる必要がある。
- 9 世界地理を説く場合に特に列國間の國際的關係に留意し、列國は互に平和的解決を要求して居ることに着眼せしめるがよい。

|            |                          |    |
|------------|--------------------------|----|
| <b>第三章</b> | <b>現今地理教授の目的観</b>        | 七  |
| <b>第一節</b> | <b>教則の精神から見た地理教授の目的</b>  | 七  |
| 一、         | 地理科の立場と其の教則              | 七  |
| 二、         | 現行教則の根本精神                | 八  |
| <b>第二節</b> | <b>地理學の本質から見た地理教授の目的</b> | 八  |
| 一、         | 地理學發達の概観                 | 八  |
| 二、         | 現今地理學の本質                 | 九  |
| 三、         | 教材としての地理                 | 九  |
| <b>第三節</b> | <b>時勢の要求から見た地理教授の目的</b>  | 一〇 |
| 一、         | 教則の時勢的解釋                 | 一〇 |
| 二、         | 現今地理教授の使命                | 一〇 |

## 第二章 現今地理教授の目的觀

### 第一節 教則の精神から見た地理教授の目的

一、地理科の立場と其の教則 社會文化の程度の低くかつた時代に於ける各國の國民は、各々其の郷土を以て世界とし、狹隘なる天地に疆域を劃して、他國民を夷狄視し、他民族の文化を無視して居たのである。然るに人智の進歩は交通の發達を促し、世界の交通は益々頻繁に赴き、經濟關係は漸く接近し、國際關係は次第に複雑を加へて來た今日、如何なる土地——國家の國民と雖も、全く他民族の文化を度外視し、又世界の大事に無關心たることが出來ぬ様になつた。

従つて何れの國家——國民も、それ／＼國家の維持發展、國民文化の向上發展の爲めには自國の國勢如何を理會し、自國民の特質を審にし、聽ては各國並に各民族の事情を悉知して吾々國民の爲すべき道を辨へることが極めて重大なる當面の問題でなければならぬことにな

つて來たのである。茲に於てか主としてかやうな方面の事實を研究の對象とする地理教育は重視され、地理的識見の涵養は、現時に於ける文化國民の最も緊要とする所で、殊に政治的、經濟的、文化的諸關係の密接な國際場裡に生活——活動する國民にとつて欠くべからざる教育であると云ふことが鼓吹されるに至つた。

地理科は實にこれ等の要求に應ずべき内容を有するもので、國民教育上重要な地位を占めて居るのである。殊に最近國民に地理的思想を培養することの急務なることが各方面から認められ、従つて地理科の教育的價值も頗る高められて來たのである。以下かやうな立場にある地理科は如何なる精神の教則を有つて居るかを吟味して見よう。

現行教則は明治三十三年の八月に頒布せられたものである。當時は明治二十年以來保守的、反動の大勢に驅られて、我が思想界に國家主義的思想が勃發し、更に二十七八年の日清戰爭の勝利は、茲に又一段の反撥力を加へ、國家主義的思想が益々隆昌に赴き、愈吾が國民が國民的自覺の時代に入つた初頭であつた。以來、星霜を閲すること二十有餘年、其の間時勢の上に、思想の上に幾多の變遷を來して居る。然るに教則のみは依然として終始一貫、地理教

授の據るべき點を明示し、否寧ろそれを固守して今日に及んで居ると云ふが妥當であらう。

一體、我が國の教則は其の要旨を示すに極めて抱合的抽象的である。かるが故に時勢が如何に進展しようか、時代がどんなに推移しようか、それにはお構ひなく、依然として生命を持續して居るのである。従つて好意的に牽強附會な時勢的解釋を試みることは出来るであらうが、時勢に應じ日に日に發展して止まぬ現今地理教授の目的を表示するとしては、甚だ曖昧なるものと云はねはならぬ。現行地理科の教則が果して今日の時勢に適應して居るかどうかは論述の進むにつれて理解を請ふことにして、先づ教則第六條について見るに、大略次の四項に分つことが出来る。

(1) 地球表面に關する知識の授與

(2) 人類生活狀態に關する知識の授與

(3) 本邦國勢大要の理解

(4) 愛國心の養成

流石は巧妙に出來て居る。而も如何様にも解釋を與へることの出来る餘地を有つて居る。



而してこれ等の四項は決して各々異なる目的を以て支離滅裂なる要求を有つて居るものでは勿論ない。地理科本来の目的に向つて互に聯結し、且統一點を有つて居る様に思はれる。

惟ふに教則の示す處は、徒に地理的事實を羅列し、個々の地理的事象の機械的暗記とか、理解せざる地理的理法の注入を強要して居るものでは勿論ない。自然人文に亘る地理的事象を通し、先づ主として國勢の大要を理解せしめ、以て國民としての自覺、國民的責務を感じしめ、進んで國民をして國民的活動に入らしめようとするものである。即ち畢竟目的とする所は國勢の大要を理解せしめ、之を通して國民の上に着實真正なる愛國心を養成せんと云ふに存するのである。吾人は更に進んで教則の根本精神が、この國勢大要の理解と愛國心の養成とにあるかを詮議して見ることにする。

二、現行教則の根本精神 教則第六條の要旨を分解して見ると、第一は地球表面に關する智識の一斑を授ける事、第二人類生活の状態に關する智識の一斑を得せしめる事、第三には本邦の國勢を理解せしめる事、第四には愛國心の養成に資する事の四項からなつて居る。而して前三項は本科教授の實質的方面に屬し、後の一項は形式的方面と見る事が出来る。しか

しながらこの教則の精神を熟讀玩味して見るにこれ等四項目の内容なり二方面の目的なりと云ふものは、全然別途の教材、別個の方法によつて個々別々に教授せられるものでなく、何れも密接不離前後主副の關係に於て、地理科の全目的を巧に表現して居ると思ふ。以下教則の各項目を分解綜合して其の然る所以の理を明かにし、同時に教則の根本精神から見た地理教授の任務を訪ねて見よう。

(一)地球表面に關する智識と人類生活の状態に關する智識との關係 地球表面に關する智識とは今更言ふまでもなく、地球の形狀、地球を包圍する大氣の現象、地球表面に於ける水陸の分布、山川の状態並に地球上に住する生物の分布等を意味するもので、即ち地球其のものを研究の對象とする自然地理の内容である。さてこの自然地理の内容をなす地球表面に關する智識は、地球を人類生活の場所と見、人類生活と關係つけて見ることによつて其の價値が認められるのである。言ひ換へれば人類の生活状態を了解せしめる爲めの必要上、人類生活の舞臺として地球表面の如何を研究考察するもので、地球表面に關する智識は、取りも直さず人類の生活状態を理解する場合の基礎的資料をなすものである。

故に地理の研究は、先づこの地球表面に關する確實な智識を基礎とし、吾々人類がこの千變萬化窮りのない地球表面の各地に如何に散在して、自然の理法に如何に支配され、自然力を如何に利用して居るか、將又環境に如何に順應し、如何なる生活を營んで居るかを知らしめることが眼目でなければならぬ。それが爲めには地と人——自然と人生即ち地球表面に關する事象と人類生活状態に關する事象との相互關係を攻究せねばならぬのである。

更に進んで吾々人類は、この宏大無邊な地球を生活の舞臺として、或は交通運輸の便を圖り、或は天産物を利用して生活の道を開き、或は都會を建設して文化生活を營み、或は國家組織のもとに世界の各民族は政治的に經濟的に文化的に相頼り相助けて互に生活して居るといふことが理會されて行くのである。かく自然と人生との關係を説くことによりて、自ら世界の宏大なることや、人類の生活は常に自然と密接な關係を有し、而もそれ〴〵有機的關係を保つて居るといふ様なことも理會せられ、總ては不知不識の間に理會的世界觀なり、理會的生活觀なりが培養されて行くのである。

かやうな見解を以て「地理は地球の表面及人類生活の狀態に關する知識の一斑を得しめ」

なる項を眺める時に於て、地球表面に關する事象と人類生活の狀態に關する事象とは密接不離の關係になるもので、又、兩者を併せ説くことによつて地理的に意義をなすものであることが了會される。要するに地球表面に關する事象は、人類生活の狀態を知らしめる必要から當然吟味せねばならぬ對象であるし、又、兩者を合せ説くと云ふことは、地人の關係を討究して所謂地理的識見を涵養し、人類生活の實相を闡明せんとする努力に外ならない。

(2)人類生活の狀態に關する知識と地勢大要の理解との關係 以上述べた様に地球表面に關する知識は、人類生活の狀態と關係づけて見ることによつて價值が認められる。而して人類生活の狀態に關する知識や地人關係の考察によつて養はれた地理的識見は、國民生活及至實際生活と結びつけその生活狀態を解明することによつて、その價值が更に實際化されて行くのである。

さて教則に於て「本邦國勢の大要を理解せしめる」といふ項は、少くも時代の要求に鑑み、教則に時勢的理解を與ふる論者の、異口同音に重要視して居る所である。果してこの本邦地勢の大要の理解と云ふことが、現今地理教授の中心主目的をなすものであるかは後に譲つて、

先づ人類生活に關する知識と地勢の理解との間に如何なる關係が結つけられて居るかを訪ねて見よう。

前述べた様に人類生活の状態に關する知識とは、人類はこの地球上に如何に分布し、如何に自然の影響に順應し、如何に自然の力を左右しつゝ社會生活——文化生活を營んで居るかの地理的識見を意味するものである。一步進めて考へるならば、人類生活——國家生活の真相を理會し、吾々國民の生活の向上充實に資せんとする地理的識見ではあるまいか。更に其の内容を吟味して見る、(1)産業・交通・貿易等の如き人類の經濟的活動の状態とか、(2)政治・外交・兵備・財産等の如き人類の政治的活動とか、(3)宗教・學術・藝術・道德等の如き人類の文化的活動等の社會的諸現象を指するので、國民生活の内容をなす要素と大差がない。

次に國勢大要の理解、云ふ場合の地勢とは、如何なる内容を包含するのであるかと云ふことを吟味して見るに、先づ之れを最も簡潔に述べるならば、國家の現勢を指すもので、即ち一國家内に於ける地理的諸方面の價值如何國土の廣表・位置の關係・地勢の状態・氣候の良否・天産物の有無・人口の消長と、國民活動の如何(政治的の發展・經濟的の活動・文化的の進運)

並に國家の歴史的關係如何(國體の特質・國運の消長・國民性の傾向)等を意味するものである。尙、之れを物質的方面の國力充實如何と、精神的方面の國運發展如何とを其の内容と見ることが出来る。故に本邦國勢の大要を理解せしめねばならぬと云ふことは、地球上に於ける我が國の現勢を理解せしめると云ふ意味である。更に繰返して云ふならば、世界列國間に介在して居る我が國土の地理的諸方面の價值と國民活動の現情並に我が國の歴史的發展如何を理解せしめよと云ふことである。

かやうに其の内容を詮議して見ると、人類生活の状態に關する知識を理解せしめると云ふことと、國勢の大要を理解せしめと云ふことは、略々其の内容を等しくするものである。唯茲に見逃すべからざる明白の差違は、國家を單位として人類生活の状態を見ると否とによるので、其の範圍、内容の差異も亦之れに基くのである。故に本邦國勢の大要を明にすると云ふことは、大日本帝國と云ふ立場から地球上に於ける本邦の國土並に世界に於ける日本民族の生活活動の状態如何を明にすると云ふことである。

茲に於て兩者は極めて密接なる關係を有つて居ることが明に認められる。人類生活の状態

に關する理解が深ければ深い程、國民生活の状態を了解する程度が深められると、國勢そのものを理解する眼も高められて行く。なんとすれば本邦の國土並に國民活動の状態は、世界人類の生活活動と合せ見ることによつて一層其の真相が明確となる、其の世界的——人類的の地位が明示されるからである。

要するに地理教授に於て人類生活活動の状態を闡明にせんとするに外ならない。之れを國民教育と云ふ立場から眺めるならば、國民生活の状態を理解せしめるとか、本邦地勢の世界的地位を知らしめると云ふことは、地理教授に於ける主要任務でなければならぬと見られぬこともない。

(3) 本邦國勢大要の理解と愛國心の養成との關係 以上敘述して來た地球表面に關する知識の授與、人類生活の状態に關する識見の涵養並に本邦國勢の理解と云ふ様な方面は地理教授の實質的目的で、次に述べようとする愛國心の養成と云ふことは地理教授に於ける形式的目的の主なる一方面であらう。地理科は教科の本質として、終始事實を對象として、事實の理解を當面の目的として居る。固より愛國の念強く、愛國の熱情に驅られて我が國勢の理解

の緊要なることを特に自覺することが勿論ない譯ではないが、地理科の如き教科に於ては先づ事實を正確に理解せしめ、而して精神を鍊磨すると云ふことが妥當と考へる。即ち地理教授に於ては人地の關係より地理的法則なり地理的の歸向なりを確實に握らしめ、進んで本邦國勢の大要を領得せしめやがて愛國心の鼓吹に資すると云ふことが當然の道行きである。

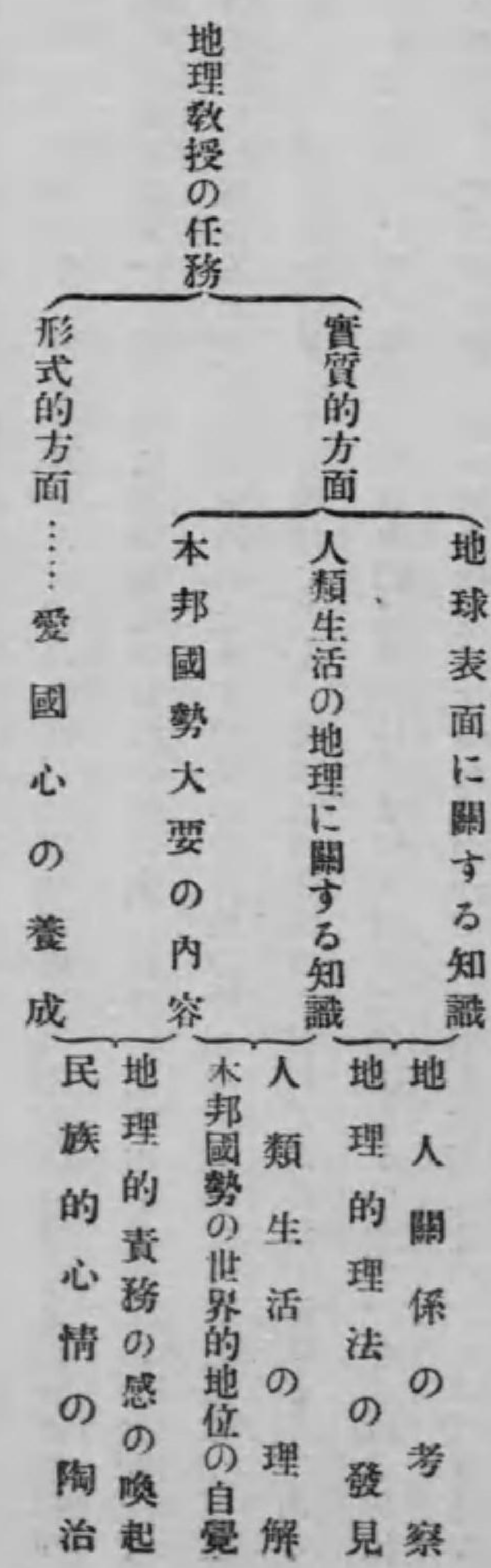
國勢の大要を獲得せしめると云ふことは、前述の外く地理教授上の重要な任務で、歴史科に於ける國體の大要の理解に相當するものである。眞に國勢の大要を理解し得たならば、言はず語らずの裏に國民的責務の重且大なるを自覺され、而して堅實なる愛國心のもとに統一ある國民的活動をなすに至るものであると思惟される。さればと云つて吾人は觀念論を其のまゝ取り入れて、總てを主智的に見ようとするものではないが、唯、聖哲タゴールが「理解は愛の別名なり。」と云はれたあの眞理を信するものである。國體の眞の理解が體て堅實なる國民志操を涵養するが如く、國勢の理解も亦愛國心の養成に資することになると考へても無理ではあるまい。されど國勢の理解は畢竟愛國心の養成の爲めのみとは考へられない。他に幾多の教育的價值を有つて居る。而して愛國心の養成は地理教授のみによつて養はれるも

のでなく、又敢へて地理科のみが獨占すべきものでもない。國語でも、理科でも、體操でも總ての教育教授を通して涵養さるべきものであると思ふ。

しかしながら比較的着實に而も眞正なる愛國心の養成に資することの出来る教科はなんと云つても地理科であらう。なんとすれば堅實な地理的識見によつて自他の國勢が明確に理解せられて行く時は、徒らに自國のみを尊重して、他國を夷狄視する様な偏見が取り除かれるであらうし、又わが國勢の世界的地位が事實によつて目前に示される時は、懦夫も國民的責務の重大なることを感ずるであらう。更に廣く人類生活の状態なり、國際的關係の現状なりを説くことによつて高尚な人類的心情が陶冶されて、漸次着實なる愛國心が養はれ、これと同時に理會的國家觀なるものも一步一步築かれて行くのである。

之を要するに教則其のものは極めて總括的抽象的であるが、其の根本精神は教則の各内容を相關的に見ることによつて窺はれる。即ち地球表面に関する自然方面の知識は、人類生活の状態を理解する基礎的のもので、この兩者の關係を吟味することにより自然と人文との間に存する地理的法則が明にせられる。又人類生活の状態に関する内容と、本邦國勢の内容と

を比較對象しつゝ、教授することによつて、國民生活の眞相なり、國勢の世界的地位なりが理解せられることになる。又愛國心の養成と國勢の理解とを關係づけて見ることによつて、地理的責務の感なり、民族的心情なりを喚起して行かねばならぬことになる。結局、教則を通して窺はれる地理教授の任務は以上の諸點で之を表現して見ると大體次の様である。



第二節 地理學の本質から見た地理教授の目的

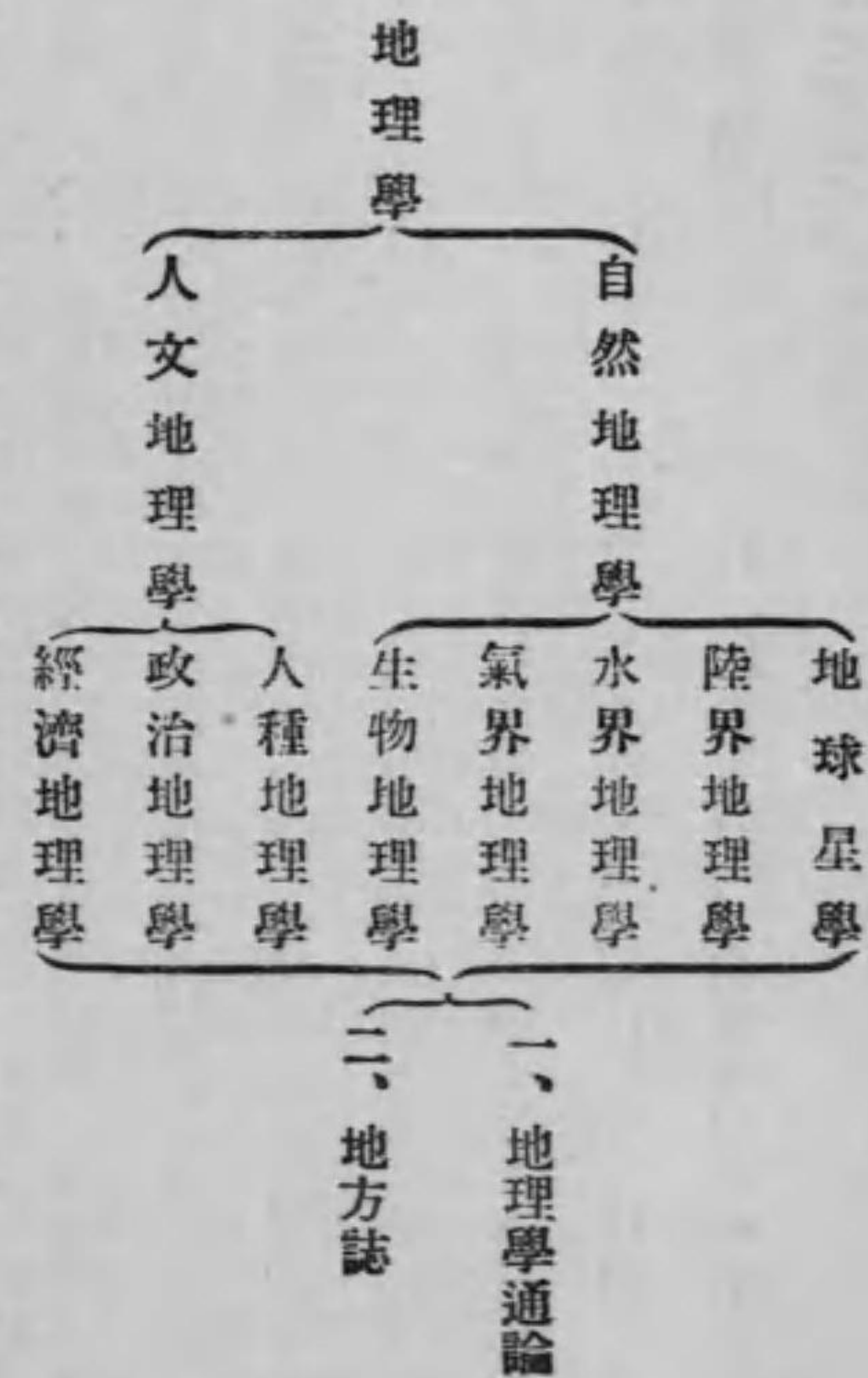
一、地理學發達の概観 地理學は諸學の中で起源からいへば最も古い學問の一つである。然

しそれが一科學として成立つたのは比較的新しいことで、其の努力は先づ第十八世紀の後半期から第十九世紀の後半期に亘つて居ると考へる。この間に於て地理學は一は質の方面に、一は量の方面に於て著しい發達をしたのである。

第一、質的方面に於て發達したと言ふのは、元來地理學は其の言葉 (Geography) が表はす稱に「地を誌す」の義で單に地球表面の諸現象を記すに過ぎないものであつたが、今日に於ては單なる事實の記述のみに止らず、其の原因及び作用をも説明することになつて居る。例へば山岳を對象とする場合に於て、從來は山の高さは幾何であるか、形はどうであるかと云ふ様に、單に有りのまゝを記述するに止まつて居たに過ぎなかつたが、今日はこの山は如何にして出來たか、即ち褶曲作用によつたものか、又は噴出作用によつたものであるかと云ふことを研究し説明することになり、また更にこの山は周圍の氣候に如何なる影響を與へて居るか、附近の人類生活に如何なる影響を及ぼして居るか、又其の地方の産業交通に如何なる關係を有つて居るかと言ふことまでも研究説明することになつて居る。故に初め單に地球表面の現象を記述するといふ意味しか有たない地理學 (Geography) と云ふ言葉は、言葉

そのものから云ふと穩當でないことになつた。そこで獨逸ではカールリツテル (一七七九—一八五九) 以來 Geography の代りに地球に關する知識と云ふ意味の「エルトクンデー」と云ふ言葉を用ふる學者もあると云ふことである。

第二、量的方面の發達を見るに、この方面に於て地理學は對象的に、又は空間的に發達したのである。(一) 對象的に發達したと云ふのは幾多の分科に別れて研究することになつたと云ふことで、即ち地理學は先づ廣義の自然地理學と廣義の人文地理學の二つに分れたことである。かくて自然地理學は更に數理地理學・狹義の自然地理學・生物地理學に分れ、又廣義の人文地理學は狹義の人文地理學即ち人類地理學・經濟地理學・政治地理學などに分れたのである。(二) 空間的に發達したと云ふのは地理通論と地方誌に分れて來たことを意味するものである。かやうに地理學の發達したのは前述の如く第十八世紀の後半期から第十九世紀の後半期にかけて發達したもので、十九世紀後半期に至つては猶十分とは云へないが、學問として立派な體系を備ふる様になつたのである。尙參考の山崎直方博士の現今地理學の分類をせば次の如くである。



二、現今地理學の本質 地理學が自然科學として愈々其の價値を認められ獨立の體系を備ふやうになつたのは十九世紀の後半で、當時獨逸に輩出した地理學の泰斗アレキサンデル・フオン・フンボルト（一七六九——一八五九）やカール・リツテルなどの努力によることが多大である。其の後十九世紀末葉には自然地理學者として獨逸にリヒトフオーヘン出でて自然科學的の創造を試み、次いで北米合衆國にデーヴキス、澳國にベンクなど先覺者が出て、遂に

今日の如き發達をなしたのである。而してカール・リツテルは人文地理に重きを置き、ベックは自然地理を重視した。この二大思想は常に對立して今日に及んで來たのである。

就中地理學の建設に最も鋭い創造を加へたものは彼の有名なカール・リツテルであらう。從來地球表面に於ける諸現象の記載に過ぎなかつた地理學は、氏の出づるに及んで茲に始めて眞に意義のある地理學なるものが建設されたのである。即ち氏は記載のみを以て能事として居つた地理學に對し、其の炯眼は更に深く輝いて、未だ曾て發見されなかつた地理學の本質を握り、現今地理學の基礎を築いたのである。今日の地理學とてもリツテスの思想以上に餘り出て居るまい以下先づリツテルの思想について窺つて見よう。

(1)リツテルの思想 さて吾人が呼んで居る地理學の内容を試みに分解して見るならば、天文學や物理學や化學や動物植物學や礦物學や乃至は社會學や經濟學や其の他諸般の知識となるであらう。従つてかやうな見方を以てするならば地理は是等諸般の知識を其の儘網羅蒐集したものであると云ふことになる。果して地理學はかやうな獨立した生命のない八百屋學であらうか。否決してさうではない。氏は夙にこの點に着眼し、この問題に根本的解決を試

み、獨得な立場から地理學を建設したのである。

而して地理學は一個の體系を備へた獨立の科學で、其の本質は種々の地理的事實を有機的に統合し因果の法則によつて結合した一全體と見、更に進んで地理獨得の見地から其の理法を明にせんとする點にあると云つて居る。例へば世界に於ける植物の分布について討ねて見るならば、植物の分布を水陸の状態（水の性質・水底の深淺・水底の地質及地勢・風土）氣温の差異（水平的分布・垂直的分布）乾温の状態（乾燥地・濕潤地）等の各方面に於ける諸現象を有機的に結合して其の關係を吟味し、更に地球上の各地に於ける植物分布の状態を通過して植物は如何なる地點によく繁茂し、如何なる場所に種類が多いか、少ないかと云ふ様な地理學の理法を明かにする様なものである。

かやうに個々特殊の諸現象を觀察し之れをそれ／＼有機的に統合し、其の上に地理的の理法を見出すと云ふ所に地理學の學たる本質があるのである。之を従來の記載をのみこれ事として居つた地理學に較べると、彼は單に直觀のみに訴へたものであるが、是れは直觀に加ふるに思考を以てしたと云ふ點に近世地理學特有の本質が發揮されて居る。かくてリツテルは

地文地理を地誌の基本とし、又自然と歴史との關係、地球と人類との關係の研究を地理問題とし、更に人類の運命に自然の交渉あることを研究した。而して氏の研究は比較地理學として大成されて居る。

(2) 比較地理學の實體 更に地理學の本質を討ねる爲めに、リツテルの代表的研究とも稱すべき所謂比較地理學の實體を簡單に叙述して見ることにする。地球の各部は大小があるけれども、地理に於ては之を九重の關係に従つて取扱ふのである。即ち次の如くである。

- |           |           |           |           |        |
|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|
| (1) 地理的位置 | (2) 水平的肢節 | (3) 地質的構造 | (4) 垂直的肢節 | (5) 水系 |
| (6) 氣候    | (7) 植物    | (8) 動物    | (9) 人類住居  |        |

是等の地理的事項は孤立分離して取扱はれてならない、總て其の相互の影響・因果の關係に於て取扱ふべきものである。かくて地理の取扱は或地方の水系に及ぼす土地の影響、氣候に及ぼす地理的位置・地帶構造及水系の影響、植物及動物に及ぼす土地・水系・氣候の影響物質的及精神的の性質が人類の産業に及ぼす影響を研究し、更に自然に及ぼす人類の影響如何を研究すべきであると云つて居る。



かくの如くして多くの土地について研究し、更に各地の地理的事項の關係を比較して行く時は、次第に地理的事項相互の影響について一般的の法則を發見することが出来る。例へばアルプ山系の北側を流れる諸水は南側に發源する諸水とは異なる水系に集合することが分る。瑞西とバワリヤ高原の氣温及風等の氣界の關係はロンバルジニヤ平原のものとは異なる。アルプ山系の北方に於ては秋季に落葉を見るけれども伊太利に於ては常綠樹の帯があり、又獨逸のポー河及びチベル河流域との間の人類行爲の種類に異なるものがある。山系の北方には麥酒と牛酪を産出するが、南方には葡萄酒を産し、又油と果實を産出する。さてかやうな同じ關係はピレネーの山系南北兩側に於ても發見し、ヒマラヤ山系の兩側に於ても亦見ることに出来る現象である。かく多くの山系の影響を比較研究することによつて、水系・氣候・植物・人類等に區別を起すものであるとの知識（地理的理法）を得るに至るのである。此の如き一般的の地理的眞理はかやうな外延的又は内包的の比較取扱を試みることによつて發見することが出来るると云つて居る。

其の後に於ける研究者はリツテルの學派は單に外延的な單に比較を重んじ過ぎ、遂にそれ

を目的と見做すに至つたと指摘はして居るが、リツテルの學派は今日地理學者の多くが是認する地理的法則の發見を其の研究の目的として、其の建設の爲めに努力されたのである。かくて地理學の價値は彼等學派によつて一層高められ、地理學の生命は一段と深められたといつても過言であるまい。

(3) 地理學の使命 要するに現今に於ける地理學なるものは、カールリツテル一派の學徒の研究によつて根本的に基礎づけられて發達したもので、而も「地理學は人類の生活舞臺としての地球を研究の對象とする學問である。」と云ふ見解は、各國各地理學者ともに略々一致して居る概念である。而して地理學は人類と關係的に地球を研究する學問であつて、例へば地文事象の一方面を科學的に説明する場合でも、終局の目的は人生との關係と云ふ點にあるのである。故に地理は記載的・羅列的の敘述を去つて有機的・系統的に、この地人相關の理を説明すると云ふことにならねばならぬ。茲に於てか地理學使命とする所は、幾千年の歴史を有する人類がこの地球上に生活し、如何に自然に親しみ、自然の力——地理的理法に支配され、又その間如何に自然と關係し、自然を克服して、人類文化を創造して來たか。否創造し

つゝあるか。即ちこの自然と人生との諸關係の闡明にあるのである。更に進んで人類は將來如何に自然と人生との間に結合されてある因果の關係を統御することによつてよりよき生活——人類文化の向上を圖り得るかの價値を創造することが、現今地理學の目指して居る目的であると考へる。

三、教材としての地理 地球は實に吾々人類生存の一大舞臺である。人類はこの地球上に於て自然の影響を受け、又よく統御して之を利用し、人類も亦相互に關係し合ふて生活を營んで居る。かやうに地球上に於ける自然と人生とは密接不離なる關係を有つて結びつけられて居るから、吾々人類の物質的・精神的生活の大半はこの間に營まれるて居ると見ねばならぬ。この人類生活の舞臺たる地球を對象として研究組織したものが即ち地理學であるが故に吾々は實際生活上この地理學を學んで地理的識見を高めねばならない。地理的識見の涵養は人類の地球上に於ける文化の向上發展を意味する努力である。學校教育に於て地理を教授する所以も亦此に存して居るのである。

さて茲に問題となることは、科學としての地理と教科としての地理とは、如何なる差異を

有つて居るかと云ふことである。この點については色々論議されて居ることであるが、其の本質に於ては同一でなければならぬと信じてたい。なんとすれば純粹地理學と小學校の地理科とは固より其の内容の範圍程度を異にし、従つて其の任務に多少の差異の生ずることは免れないことであるが、地球を人類生活の舞臺と見、地球上に於ける自然と人生との關係を考察し、かくして得た地理的理法を、人類文化の向上昇進までに導かんとする該科の本質に於て聊かの相違、矛盾もないものと思へる。素より小學校の地理科は應用地理學で、地理學の教育的價値を國民教育に取入れたもので、地理學の全部ではない。このことについては「教則の根本精神」と「地理學の本質」との項に於て述べてあるから、これを對照せられるならば略々其の差異が明になることであらう。

更に進んで詳述するならば、大學に於ける地理學の研究は純然たる科學的本務を有つて居る。即ち他に何等の顧慮する處がなく、地球其のものを其の儘學究的に研究するものであるから、地球の各部分をば一樣の興味を以て迎ふべきものである。例へば兩極無人の境も中部歐羅巴を攻究すると同様に取扱ひ、又自然地理も人文地理も其の間に軒輊がなく、同一の

研究對象同意義の両面と見て取扱ふ態度である。即ち其の何等の顧慮する處なくと云ふ分界を以て純粹地理學の立場と解釋されて居る。

一方國民教育に於ける教科としての地理科は、教則に明示されて居る様に國家とか國民生活とか云ふ様な條件を顧慮して教授せねばならぬことになつて居る。従つて教材の選擇なり取扱の精神なり、力の入れ所なりに於てそれ／＼多少の相異が生ずる譯である。例へば地理の教材は地理學の各分科に互つて選擇しなければならぬけれども天文地理學・數理地理學の如き高尚な部門は容易に觀察し得る範圍に止めるとか、外國地理に於ては本邦と密接な關係のある土地を詳述するとか、又は本邦國勢の世界的地位を知るに直接必要な方面を稍々仔細に比較對照するとか、特に愛國心の養成に資することの出来る様な事實を熱心に説くと云ふ様なことになるのである。即ち教育目的なり、時代の要求なり、土地の狀況なり、兒童の發達程度等の諸條件を顧慮すると云ふ分界を以て教科としての地理科の立場と解釋されて居る。

要するにかやうな差異は國民教育に於ける地理科の地位及びそれに伴ふ教材の選擇、地理

的事實の敷衍附加の程度及び教材の方法化等から來た當然な態度が産んだもので、地理學——地理科の本質的相異——根本的差異ではない。なんとすれば人類の生活狀態と云ふものを理解しようとするならば、先づ地と人との相互關係を考察して、其の間に存する地理的法則を握らなければならない。而して特に國民教育の立場から國民生活の真相なり、國勢の世界的地位なりを明にし、且愛國心を養成しようとするならば教科としての地理科の立場に於て教材を選擇し教材を取扱つて行かねばならぬと云ふことになる。

どうしても地理教授の根柢は、地人關係の體得に置かねばならない。地人關係の理解に基かない地理的觀念は、根のない植物に等しく伸びない、消化器を損うた動物の如く太らない地理教授に於て常に目標として居る地理的識見なるものは、決して記載的な地名や産物名の羅列とか地理的事象の皮相的な考察からは生れて來ない。用意周到な地人關係の有機的考察とか、各地に於ける地理的現象の比較研究を通過して理解し得た地理的法則や其の歸向の體得に外ならないと考へる。正當な國勢の理解も、眞摯な世界的地位の自覺も、將又、堅固な愛國心の養成も、皆この着實な理解——識見のもとに發見し又喚起されるのではあるまいか

教科としての地理科も、所詮この地人関係の理解——地理的識見の涵養を當面の目的として居ると云つて過言があるまい。

ここまで論じて来たならば、地理學の本質と教科としての地理科の本領との關係が、略々明になつたことであらう。従つて地理的教授が目的とせねばならぬ所は何處にあるかと云ふことも凡そ見當がついたことであると思ふ。

### 第三節 時勢の要求から見た地理教授の目的

一、教則の時勢的解釋 時勢の進運に伴ひ、曠古の事變たる戰亂の教訓に鑑み、地理教授上改善を要すべき問題は極めて多い。就中、我が國現下の國勢に顧み、本邦の世界的地位を明にして、國民的責務の重且大なる所以を自覺せしめ、堅固なる愛國心の下に、統一ある國民的活動を喚起促進することは、蓋し緊要の事と考へる。而して眞に本邦現時の國勢を理解せしめ、正當眞摯なる愛國の志念を涵養するは、地理科本來の任務とする所である。特に時勢の要求は一層その任務を鮮明にし、國民教育上地理科の價値は方に高められて來た。茲に

於てか吾人は時勢の要求に應ずる教授の精神を樹立し、本科教授上從來の弊實を脱し、本科教授の本質に肉迫し、之が改善更新の道を講じ、以て本科教授の實績を擧げること努力せねばならぬと思ふ。

さて地理教授の目的は前節に於て述べた様に教則第六條の示す所で、地球表面に關する智識、人類生活の狀態に關する知識の授與及び本邦國勢の理解を實質上の目的とし、形式上の目的としては愛國心の養成に資せんとするにある。由來、教則は包括的のもので、其の細目を示さないから、兒童心意の發達に顧み、土地の狀況に伴ひ、又、時勢の進運國家社會の要求に應じて之を考究する時は、幾多の缺陷と不備とが見出される。けれども茲には大綱を示したものととして、暫く現行教則の精神を是認し、この精神を骨子として、更に地理教授の目的の擴充と、その更新を企圖して見よう。言ふまでもなく教則の適用と解釋とについては、教則の制定當時と今日の時勢とは大にその趣を異にし、國家社會の要求にも亦大なる差異があるので、其の間幾多の時勢的解釋を俟たねばならぬ點がある。

顧るに前章に於て述べた様に、地理教授に對する時勢の要求は定に多い。けれども是等の

### 第三章 現今地理教授の目的觀

要求は、大體之を三方面に分けて見ることが出来る。即ち第一は國家的精神の樹立から見る態度で、第二は日常生活の指導から見る態度で第三は國際精神の涵養から見た態度である。

第一の要求する所は地理教授に於ては本邦國勢の理解を正確ならしめ、且、本邦の世界的地位を十分に自覺せしめ、以て時勢が要求する國民的精神の涵養を圖つて層一層時勢に適應する國民を教養せんとするにある。第二は處世上必要な識見を高め、日常須知の知識技能を豊裕にし、以て社會的、國家的生活を圓滑ならしめんとするにある。第三は特に世界的識見を涵養し、進んで國際精神を培養せんとするにある。而して特に教授上目下努力せねばならぬのは、我が國勢の理解によつて國民的責務を感得せしめ、世界的地位の自覺によつて一層愛國の志念を喚起して、國家的世界的の見識を有し、而も發展的、進取的の氣象に富む國民を養成せんとする前者の要求でなければならぬと叫ばれて居る。教則第六條の地理教授の要旨を時勢の上より眺める時に於て、この國勢の理解と愛國心の涵養とを重んずる態度は最も妥當で、而も時勢の要求に應ずる重要な要旨であると信ずる。

即ち前述の如く教則に示す地球表面に關する知識の授與は、人類生活の場所としての研究

で、地球表面を説く要は人類生活の状態を了解せしめる必要に基くものと見ることが出来る。次に人類生活の状態とは、人類の政治的・經濟的・文化的活動に外ならない。而も其の内容は何れも國勢形成の要素であるが故に、人類の生活状態を知らしめることは、國勢を理解せしめる爲の當然の要求事項であると言はねばならない。愛國心の養成は國勢の理解によつて自然喚起されるもので、眞に我が國に對する愛着の念を培養せんとするには我が國の國勢を理解せしめ、世界的地位を明瞭にする事を以て先決問題としなければならない。この點に於て終始一貫、地理教授の目的に關して聊の相異矛盾もない。唯、時勢が要求する國勢の理解には時勢的要求の内容が包括されて居るのみである。

この國勢の理解と國民精神の涵養とを重視することは、方に現下の時勢に應ずる必然の要求で、地理教授に對する諸他の要求や問題は、多くこの精神から派生し、又之に包括されるべきものが多い。前章に於て論究した様に、今後の地理教授に於て特に顧慮して其の徹底を圖らねばならぬと高潮されて居る諸點は大體次の様な方面の内容である。

- (1) 本邦國語を一層明確に理會せしめること
- (2) 本邦國勢の世界的地位を自覺せしめる

こと

(3) 國產獎勵の必要なる所以を知らしめること。  
と。

(5) 海外發展の緊要なる所以を知しめること (6) 植民及移民思想の培養に着目すること

(7) 各國々勢及國民性を理解せしめること (8) 最近に於ける國際關係を闡明にすること

(9) 日常生活に必要な地理的知識を授ける (10) 堅固なる國民精神の涵養に一層努むべきこと

(11) 公正なる國際的精神の發揮に留意すること

以上地理科に對する諸要求の大半は國家的要求に基くもので、即ち教則が明示して居る國勢の理解、愛國心養成等の時勢的内容をなすものである。言換へると是等の要求は教則の時勢的意義をなすもので、而も現今地理教授の内容をなすものである。

尙「日常生活に必要な地理的知識の授けること」と云ふ様な要求や、其他個人的要求

を意味する構な事項は、前者と其の立場を異にして居る。即ち前章に於て述べて置いた様に地理學の本質なり、地理科の内容から見る時に於て、決して國勢一點張にのみ眺むべきものではない。例へば自然と人文との關係を討ねて知る地理的方法とか、又は實生活に必要な地理的常識とか、公民的知識と云ふ様なものは、國家的要求に應ずるものであると云ふ前に個人的要求に満足と云ふものと云はねばならぬ。

勿論地理科の教則には日常生活に必須な知識を授けよ。とは掲げて居ないが、前述の如く地理科本來の性質及その内容から見ても、又時勢の要求からしても、地理科がかかる任務の一方面に應ずることが極めて妥當であると思ふ。「地理科が生活に對して居ない。」とか、「實生活に役立たない。」とか、「なんの爲めに地理を學ぶか意義が分らない。」などと云ふ様な非難の聲は固より地理科に對して當を得た批評ではないが地理科が單に最高目的とも云ふべき國勢の理解、國民精神の涵養のみに捉はれて、其の副目的とも云ふべき日常生活に關する地理的知識とか社會的識見の養成などを等閑して居る反動ではあるまいか。吾々が自己の得た地理的知識が如何なる點に活用され、又如何なる力となつて居るかと反省する時に於て、思ひ半

ばに過ぎるものがあるであらう。吾々地理教授などはどこまでも國勢の理解、地理精神の涵養を最高目標として、地理を教授せねばならぬことは明白なることであるが、更に之に隨伴して國民の日常生活を指導すべきことを忘れてはならない。

尙、今後の地理教授も亦現行教則が明示する根本精神に基き、以上の二方面に向つて教授すべきは勿論であるが、地理科の本質や時勢の要求に顧み、特に世界的識見の涵養と國際精神の教授とを圖つて、飽までも世界の時勢に順應した教育を施すことが目下の急務であると考へる。殊に現今の地理教授は教科本來の性質からしてこの點に着眼して、かかる用意を以て教育することが極めて妥當と信するから、更に項を改めて詳述して見よう。

二、現今地理教授の使命 交通機關の發達は著しく地球上の距離を短縮した。距離の接近は國民の活動舞臺を擴めた。かくて國民活動範圍の擴張は吾人に國家的、世界的の識見を要求し、吾々國民の識見——見聞は爲に大に擴大された。又最近に於ける國際的關係の接近は列國間の關係を緊張せしめ、緊密なる國際的關係は、國民として特に世界各國の國情なり、國民性に注意せしめた。この鋭い注意は、總て世界的識見の必要を迫つて來た。殊に這般遭

遇した曠古の大事變の如きは、最も強く國民を刺戟し、注意を全世界に擴大し、吾人の耳目を世界各國の隅から隅へと引きつけた。

顧みるに交通が不備で、而も永い間國を鎖ざして居つた當時の國民は、一步も鄉關を出る様なこともなく、郷土に生れて郷土に働き、郷土を世界と思つて郷土に終るものさへ多くあつたに違がない。従つて他郷の國民を解さなくも、又國家——世界の事情に没交渉でも、直接、國民の生活にこれと云ふ程の問題もなかつたことであらう。然るに今日の文明國民にはかやうな無智而も呑氣な生活は殆ど出來ない。今や吾人の生活は鎖國時代の國民とは、全然其の境遇を異にして居る。總ての生活は社會——國家——世界の各國、各事象と結びつけられて居る。かく國民生活は益々擴張され、國民の實際生活に於ける地理的知識の必要は、日に日に増大して止まない。幼い小學兒童の耳目でさへも、實に驚くばかりに擴大されて居るではないか。

事實横濱・神戸は自分の郷土の門口の様に、樺太・臺灣・朝鮮の如きは陸續きの様に近く思ひ、滿洲・西比利亞は我が物顔に語つて居るではないか。五大強國は愚か獨逸・白耳義・和蘭・

露西亞などの國名は三尺の童子も、なほ口にして居ると言ひたい。倫敦・巴里・華盛頓・紐育の名は地方の都邑よりも記憶が明瞭であるまいか、又米國と我が國との間に如何なる國際問題があるか、日本と支那とはどんな國際關係になつて居るか、英國は日本とどんな間柄の國であるかと云ふ様なことは、正式に地理を學ばない兒童でも、略々了解して居る様な有様ではないか。之れが即ち時勢の反映であり、この傾向こそは實に時代の要求であるまいか、

茲に於てか地理教育は新しい意義を以て頓に重視され、世界的識見の涵養と、國際精神の教養とは現時に於ける文化國民の最も緊要とする所となり、殊に政治的・經濟的・文化諸關係の密接な國際場裡に立つて國家生活を營む國民の、本に尊重せねばならぬ修養であると云ふことに着眼されて來た。かくて地理教授上特に世界地理教授の地位が高められ、之を通して世界的識見の涵養と、國際精神の喚起に努めねばならぬと主張されるに至つた。

さて前項に於て述べた様に小學校に於ける地理科の目的は、自勢の國民を理解せしめ、之を通して國民の國家に對する自覺を喚起し、眞摯なる國民的活動に導くといふ點にある。従つてかやうな立場に於て國民的識見の涵養と、國民精神の教養とを使命として居る我が國の

地理教授は、日本地理を中心として教授すべきは當然であると言はねばならない。然るに現時に於ける國民の生活及び活動や國際的關係なるものは屢々述べて來た様に、總てが世界的國際的關係になつて居る。故に我が國の國勢なり、國民生活なり、大和民族の使命なりを明確に理解せしめようと努めるならば、必ずや、廣く世界全局を大觀し、世界列國との國際關係や世界各民族の活動狀態などと併せ見ねばならぬ。かくして現今地理教授の中心目的とも云ふべき國勢の理解なり、直正なる愛國心の養成なりが一層徹底的に達成せしめることが出来る。加之、この世界地理を教授することによつて、時代が要求する所の世界的識見なり國際精神なりを涵養することが出来るのである。

かやうな使命を有つて居る世界地理は、由來地理教授上如何なる立場にあつたかを討ねて見るに、地理科の中心目的たる本邦國勢の理解は、單に本邦國土の地理のみでは、其の國勢の眞相を知ることが出来ない。諸他の邦國と併せ見て始めて、其の眞相より世界的地位の正當なる理解が出来るのであるとの意味に於て世界地理が取扱はれて居たのである。

言換すれば名稱は外國——世界地理でも、その取扱ふ精神は本邦地理教授の任務と何等異



なる所はない。等しく本邦國勢の理解、愛國心の喚起にあると考へられ、詰り本邦地理教授は内部より國勢そのものを明にせんとするもので、世界地理教授は外部より本邦國勢の如何を明示せんとするものであると解せられて居た。この見解については、今日とても聊かの異論もない筈である。

然るに時勢の要求は更に世界地理教授の任務を重視して居る。屢々述べて來た様に、時勢地理教授に對して國民の偏見固陋な思想を排斥し、該博にして進歩的な世界的識見の涵養を期待して居る。偏見固陋な思想に甘じ、而も變遷して止まぬ世界事情に對して一寸先も見ない様な國民では、將來世界の國際場裡に立つて堅實な國家生活も、進歩的な文化生活をも營むことが出来ねば、又進んで海外發展を企て民族の發展の活路をも見出し得ないと云ふ様な境遇を招くに至るであらう。現今地理教授一使命は實に之が救済と開發とにある。就中世界地理教授はこれ等の要求に應じこれが教養の機會と内容とを有つて居る。

又、前章に於て述べた様に、世界地理教授は地球上に於ける人類活動の狀態や、列國の國勢や各國民の國民性、並に列國間の國際關係等を對象とするものである。故に世界地理を説

くことによつて、世界の大勢、國家國民の活動、國際間の政治的文化的經濟的關係等に觸れしめ、所謂世界的識見を涵養して、國民の偏見を驅逐し、進取的發展的の氣宇を培養することが出来る。同時に各國民生活の狀態や民族的諸關係等を理解せしめることによつて、各國に對する同情愛敬の念を深め、世界の民族に對する人類的の心情を陶冶することが出来ると信ずる。

今や時勢は世界列國の共存の事實を認め、列國共通の事件にはこれが二の直接關係國のみの單獨行動を排して、或るべく列國共同して之を解決し、列國共存の理を明にせんとする國際化の傾向を見るに至つた。従つて世界各國は既にこの點に着眼して、國際精神の涵養に努力して居ると云ふことである。固より教育そのものがこの教養に努力すべきであるが、地理歴史は教科の性質上、特にここに留意する必要がある。就中地理科は一面に於て從來の如く眞摯なる國民精神の涵養を重要任務として居るものであるが、更に進んで着眼なる國際精神の教養に努力することが目下の急務であると思ふ。

第三章 現今地理教授の目的を以上諸方面から考察して見るに、現今地理教授が目的と

する所は、由來本科教授の主目的として論究されて來た本邦國勢の理解、本邦國勢の世界的地位の自覺並に國民精神の涵養等を、更に徹底的に達成せしめることに努力すると同時に、日常生活の指導、世界的譚見の養成並に國際精神の教養等をも本科教授の重要目的と見て、之が貫徹に努むるにありと云ふことに歸着すると考へる。

かくて地理的知識が吾々國民生活の上に必要なることが、日に日に高められつゝある今日之が實際地理教授の如何を顧るに、遺憾ながら現今地理教授の目的に添へ、而も之が貫徹を期待し得る様な教授が行はれて居ない。甚だしきは本科教授の目的さへも更に自覺して居ないではあるまいか。従つて教材の研究は其の主眼を違し、其の教授には獨斷と誤謬が多く、而も教材の取扱は断片的で、有機的に考察されて居ない。概して其の説き方は遊覽的に流れて學究的でない。又教育的に考られて居ない。徒らに教材を懇張つて機械的・形式的に走つて實際的に取扱はれて居ない。故に生活に即した取扱をなす餘裕を有たないのである。

更に附圖の不完全は固より地理教授書の内容と其の記述とは、共に千遍一律無味乾燥で見

童の感興を惹かぬばかりでなく、児童がこれを讀解することさへ困難である。のみならず、學校當事者は勿論、地理教授さへも地理教授に對する十分な理解を有つて居らない。従つて地理教授に關する設備が未だ甚しく等閑視されて充實して居ない。理科教授と其の研究對象の性質に於て、どこに差異、逕庭があるであらうか。

かやうな教材——着眼——取扱——設備のもとに、生々たる地理教授は固より、時勢が要求する様な潑刺たる地理的、識見は生れて來まい。時勢はかくまで地理教授の地位を高め、地理的識見の涵養を大いに期待して居るに拘らず、地理教授の實際的方面は、なほ依然として不振、不徹底の状態にあるは、寔に遺憾千萬である。

要は目的の論究と、教材の調査と、教法の修練と、設備の充實との四方面は常に教育教授と共に相俟つべきもので、而も互に相俟つことによつて其の實績をあげ得るものであると云ふこの平凡な歸嚮を汲んで出來るだけ本質に觸れた眞劍な研究を望んで止まぬものである。

第四章 地理教授に於ける自然と文化……………二九

第一節 位置の關係と文化生活……………二九

第二節 地勢の狀態と文化生活……………二九

第三節 氣候の影響と文化生活……………三〇

第四節 産業の變遷と文化生活……………三二

第五節 交通の發達と文化生活……………三五

第六節 都市の勃興と文化生活……………三六

第七節 民族の特質と文化生活……………三九

## 第四章 地理教授に於ける自然と文化

### 第一節 位置の關係と文化生活

(一)

黒船の來舶を以て知られた下田・浦賀が其の後發達しないで、何故に横濱が本邦隨一の貿易港たる地位を占めるに至つたのであらうか。徳川時代唯一の門戸であつた長崎が、船舶の出入貿易額に於て今や門司に凌駕され、殷賑な函館よりも小樽の貿易が遙に盛大になつたのは何に起因するであらうか。大阪・神戸は共に榮元・敦賀・會寧・大連・澎湖島などの地點が今日重要視されて居る所以はなんであらうか。

希臘の文化が羅馬に移り、羅馬の文化が中歐に榮元、波蘭が嘗て分割の憂目に遇ひ、バルカン半島の地が屢々民族葛藤の舞台となり、端西・ルクセンブルグ等が、永世局外中立國として列強國の間に介在せねばならぬと云ふ様な運命は主として何によつて來るか。コンスタ

第四章 地理教授に於ける自然と文化

ンチノブル・フューメ・ダンチヒ・ジブラルタル・マルタ・スエズ等の地が今日重要地點として着目されて居るのは、位置の關係が主でなくつて何んであらうか。獨逸が嘗てかかる世界政策をとり、今日の悲運に立ち至つた経緯や、西歐の西班牙、葡萄牙の文化が遲々として進歩せぬことや、濠洲が孤立的文明を有つて居ることや、日英帝國が東西相對立して世界の二大中心勢力を占めるに至つたと云ふ様なことは、主として位置的關係が齎した運命でなくてはなんであらうか。吾人はかゝる地球上の與へられた地點に立つて、國家生活を營み文化を建設して行かねければならぬ。否營みつゝあるのである。

(II)

さて門司は九州の東北隅に位して居るが、恐く地理的位置に於て九州の中心を占めて居ると云つてよからう。此の地點は交通上に於ては鹿児島線・長崎線・豊州線等の鐵道起點に當り、又内地沿海航路を始め、歐洲・北米・南米・上海・北支・大連等諸航路の寄港地である。のみならず、下關と相對して本州・九州の連絡地點に位し、北九州の産業地域を後方に近く控へ、其の位置優に九州の門戸であり、吐口であり、集散地である。かやうな幾多の地理的位

置關係が主として門司の今日を致したものと考へる。吾々はこの門司の位置を離れて、茲に門司の發達を考へることが出来ない。門司の特徴は、この位置的關係によつて大半構成され、門司の門司たる所以はこの地理的位置によつて運命づけられて居ると云つても敢て過言であるまい。

其の他横濱・神戸・長崎・敦賀・函館・小樽・大連等の如き貿易港であらうが、名古屋・広島・金澤・仙臺・札幌・臺北等の如き地方中心の都市にしようが、又、箱根・別府・船橋・所澤・會寧・澎湖島・吳等の如き特殊的施設のある土地であらうが、皆この位置的關係に支配されてその文化開發の状態を異にして居る。

次に一地方に就いて見るならば、かの本州の屋根と稱せられる中部地方は、東は文化の特に進歩した關東地方、西は歴史的に文化の發達して來た近畿地方との中間に位し、而も長き本州島の中部を占め、南と北は太平洋と日本海とによつて挟まれて居る。かゝる位置にあると云ふことが、聽て中部地方の文化に一大特色を持たしむるに至つたものと考へる。かの比較的至使な東海道線は、かかる位置の地方に發達したもので、昔、往來の頻繁であつた東海

道五十三次の驛路は、當時の江戸と京阪とを結びつけた重要な交通である。今の北陸線、中央線や、昔の北陸道、中仙道も亦然りである。

尙、樺氷峠にアプト式鐵道を採用して連絡した信越線は、太平洋方面より日本海方面に横斷を企てたものである。又過去に於ける琵琶湖開鑿運河の企圖は、かやうな位置に横ける本島を切斷して、兩海洋を連絡せんとしたものである。更に關東風と關西氣分の錯綜して居る産業經濟の狀態や、人情・風俗等には自ら位置的關係がそれ／＼現はれて居る。

臺灣が内地より遠く、南支那に近く、且、熱帶圈に半ば入つて居ると云ふことが、臺灣の交通・貿易・産業乃至は政治、軍事等の上の一つの特徴を有する所以である。朝鮮が亞細亞の大陸より日本列島の横腹に向つて突進して居る其の位置は、古來本邦の國防と外交とを脅したものであると思惟される。

(三)

更に之を世界地理について見るならば、バルカン半島が歐洲政界の噴火口と呼ばれ、外交の伏魔殿と稱せられ、屢々所謂バルカン問題を惹起したのは、全くバルカンの歐洲に於ける

位置が然らしめたと云はれて居る。このバルカンの地が人種の分布に於ても、示教の分布に於ても錯綜を極めて居ることや、この地方が曾て屢々列國野心の巷として歐亞の死十文字と稱せられたのも、主としてバルカンの位置が問題を構成したと見てよからう。殊にこの地を掌握するものは、歐亞を支配するものであるとまで揚言せられた君府の如きは、却つて其の無二の好位置であつたことが、屢々各國政争の巷と化し、興亡の歴史を繰り返して居るのである。

之に反して英吉利が、嘗て長い間光輝ある獨立を保ち、今日益々世界の商工業國として宇内に雄飛せる所以のものは、英吉利其のもの世界に於ける位置關係が雄辯に語つて居る通りである。殊に英國が陸半球の略々中心に位し、近く歐洲大陸の文化に接し、大西洋を距てて南北亞米利加大陸の原産地に對し、阿弗利加大陸と共に己が植民地を控へて居る。かやうな位置に英吉利本國の存在することが、よく狭小なる英本國をして廣大なる版圖を維持し、而も優勢なる現國勢をなすに至らしめた有力なる條件ではあるまいか。

獨逸が列強國の間に位置し、而も民族の發展を圖らんとして、柏林バクダート鐵道の經營

に努めたとか、経済的方面に向つて特に世界政策を企てたなどと云ふことは、全く獨逸の位置國境なるものが、かくあらしめたと言ふことが出来よう。又、白耳義・和蘭・瑞西・丁抹を始め新興國たるチエツコスロバキヤ・波蘭等の如き緩衝國の境遇や國情などは、この位置關係に左右されて居ることが明かである。かくの如く國土の位置關係は、其の國の國是・國運の盛衰並に國民文化を偉大な勢力を以て支配して居る。國民はこの間に立つて國土の維持安寧を圖り國民の理想を實現せんとそれら努力して居るのである。

最近國際的問題となつたヤツプ島問題は何を争ふものであらうか、固より太平洋上に於ける海底電線の中繼所として、重要な價值を有する島嶼なるが故に、互に問題としたことであらうが、之を煎じ詰めるならば、結局、位置の問題に逢着することではあるまいか。

フューメ及びタンチヒ問題然りである。伊太利はアドリヤ海に於けるフューメの位置に着眼し、伊太利は今回の戦勝に乘じ、人口多數を口實として、此處に經濟的利權を扶殖し、アドリヤ海に勢力を獨占せんとしたのである。フューメの位置たるや、單なるアドリヤ海の一良港ではない。ユーゴスラビヤ・埃地利・洪牙利・チエツコスロバキヤ等の諸國の出口であ

り、アドリヤ海方面唯一の人口である。従つてフューメの位置其のものは、數箇國の經濟狀態を左右するものであると見られて居る。

タンチヒ自由市はバルト海方面に於ける一大貿易港で、獨逸にとつても、波蘭にとつても極めて重要な位置を占めて居る。かやうな位置關係よりして、今回は之を國際聯盟管理の下に置いて、獨立一自由市となし、一は波蘭の自由海口とし、一は獨逸の東漸を防がんとするに出でたものであると聞き及んで居るかやうな注意を以て、改造せられた各方面の地理を眺めて見る時に於て、吾人は地球上に於ける位置とか、國家相互の位置關係なるものは、實に重大なる意義を有つて居るものと云ふことに氣が着くのである。

(四)

固より余とても、位置のみがかかる重大なる意義を以て、總ての地理的事家を構成し、又其の地理的問題に解決を與へて居るとは思はないが、少くも位置其のものが、其の主要なる條件をなすものであると信ずる。曾て英吉利が海上權を獲得して大に海外に雄飛した時に於て、早くも世界の交通貿易に着眼し、ジブラルタル・マルタ島・スエズ運河・アデン・セイロン

島・シンガポール・香港と云ふ様に、地球上に於ける東西交通の要地を或は領有し、或は優越権を得るなど、着々功を奏して、現時に於ける世界交通貿易上の一大基礎を固めたのである之れ即ち英吉利が地球上に於ける位置の價値に着眼したのでなくつてなんであらうか。其他過去に於ける獨逸の青島・バクダート・露西亞の君府・大連旅順・米國の希哇・グアム・パナマ等の經營は、皆この思考に出たものであるまいかと推測される。

要するに以上述べた様に地球上に於ける位置關係は、其の地點の運命を強く支配して居る同時に人類はこの地表に於ける地理的位置を巧に活用して土地を開き、又其の地點を活動の中心として廣く世界の各地に發展を試みて居る。由來總てに地の利を説かれたことが多い。地の利は人の和に如かずとは云ふものの、其の人類生活に及ぼす勢力の偉大なることは決して人の和——人力に劣らないものがある。故に吾々人間は常に位置關係に左右されつゝ生活して居ることを知つて、更にこの位置關係を支配しつゝ、よりよき生活を營むべきことを忘れてはならぬ。

最後に位置の價値を吾人は十分認めると共に、次の如き理解と識見とを有つて欲しい。凡

て土地の創造的價値は人間活動の背景によつて定まる。アラスカの一坪の土地も、紐育の一坪の土地も北海道新開地の一坪も、土地としての物質的素質に變りはないが、土地として存在する意味に於て天地の差がある。これ土地は無限の力を蔵して居て、人間の力に依つて創造し啓發し開展することが出来る。開展すること愈々大なれば愈々其の土地の地理的價値が大となるのである。人間の進歩は地球の地價を無限に高め、土地の開發は位置の價値を限なく向上せしめて居る。而して早く地價の高まつた國は文化國で、人類活動の透徹することの著しい土地が野蠻味地である。故に一面、世界に於ける位置の價値は、人間の活動如何によつて變動することを思はねばならぬ。

## 第二節 地勢の状態と文化生活

### (一)

埃及の文明はナイル河の賜で、バビロニアの文明はチグリス、ユーフラテス兩河畔に發生し、印度の開化はインダス、ガンジスの兩河に沿うて起り、支那の文化は黄河の流域に發達



した。又歐洲文化の搖籃と云はれる希臘は海岸線の長いギリシヤ半島に發達し、羅馬の文明は地中海の真中に突出たイタリヤ半島に榮え、四面環海の英國が今日海上の覇を稱するが如きは、皆地勢地形を背景とする人類文化の開展ではあるまいか。

阿弗利加が近世に至るまで暗黒大陸と呼ばれ、野蠻蒙昧な人種の巢窟となつて居たことや西蔵が世界の秘密國と稱せられて居ることなどは、地勢の影響が主でなくてなんであらうか又南米文化に東西兩面の區別あり、日本の氣候に表裏があり、中國の風土に山陰、山陽の二面を生じ、九州に南北兩面の氣分があるのは、之れ亦地勢の然らしむる所ではあるまいか。吾々は地勢即ち山脈・河川・平野・湖沼・港灣・岬等の諸現象の間に生れ、不斷是等の自然に左右され、且之を利用しつゝ、生活を營んで居る。従つてこの地勢に關する諸現象は、吾々人類の最も興味のある生活當面の對象でなければならぬ。

地勢が交通の發達に關係する事實は極めて明白なることである。即ち山の多い地方は概して交通が不便なるに反し平野地方は交通が縦横に四通八達する便あるを以て、交通網をなす地方が少くない。例へば世界の秘密國と云はれる西蔵は、南境に世界第一の高峻ヒマラヤ山

脈が屹立し、北境には崑崙山脈が連亘して居るので、域内は大障壁に圍まれた世界隨一の高原（平高度四千米）をなして居る。従つて交通の不便さは實に想像外のものがあると云ふことである。西蔵ではないが我が飛彈高地も亦然りである。人類の文明はかやうな土地に對しても漸次縦横に鐵道を貫通して該地を開發しようとして居る。苟も人類が是等の自然を征服し萬難を排して交通の便を圖らんが爲めには、多大な人力と犠牲とを拂はねばならぬ。アルプ山脈横斷鐵道とか、阿弗利加縱貫鐵道とか、我が笹子墜道とか、確氷峠のアプト式鐵道の如きは其の好例である。

ここに交通と地勢に關する面白い好一對の事實がある。それは珍らしい程曲つた鐵道と、不思議な程眞直ぐな鐵道のあることである。前者は南米ベネズエラ國の首府カラカスと、其の外港ラグアイラとの間に架けられた鐵道で、首府は外港から眞南へ約六哩、海拔三千七百五尺の地點にある。そこで勾配が餘り急で、眞直に鐵道を架けることが出来ないで、うねくくと曲り曲つた鐵道が敷いてある。其の延長二十三哩に達し、徒歩で近道に行く時間よりも、汽車に乗つて行く方が多くかかると云ふ奇蹟的な事實である。

又、後者は露西亞のモスコと舊却ベトログラード間の鐵道である。其の長さ四百哩、世界で一番眞直な鐵道である。その敷設の由來を聽くに、最初技師が鐵道を設計する時、なるべく中間の都市を連ねやうと思つて、地圖上に汽車の通る道を詳細記入して時の皇帝ニコラスの所へ差出すと、皇帝は右手に定規をとり、左手に鉛筆を持つて二點間に一直線を引いて「この通りにやれ、少しも變へてはならぬ。」と厳しく言ひつけた。それで地圖で見る様な眞直な鐵道が出来たと云ふことである。共にこの事實は一面に於て其の地の地勢と、交通との關係を物語つて居る正反對の事實である。

(11)

楊子江は黄河と共に支那本部の重要な交通系である。江は減水の時でも海洋を航行吃水十二三呎以下の汽船は、優に河口より二百八十里上流の漢口に溯り、吃水七呎以下の汽船は、四百五十里上流の宜昌まで自由に上下することが出来るのみならず、この河系中には漢江とか洞庭湖・湘江の如きものがあつて水運の便に富んで居る。恰もこの楊子江は我が瀬戸内海の如く海が内地に深く灣入りて居る様な感じのする水系で、この沿岸の平野は支那の寶庫と

稱せられ、人口も稠密な所であるから、其の利用は極めて盛である。其の他印度のカンジュ河・歐洲のダニュープ河・ライン河・北米のミシシッピー河等の大河を始め、我が國の利根川・信濃川・北上川・淀川等は皆交通に利便を與へるものが多い。水流の緩急・方向及び水量の如何によつては交通にさしたる利便を與へないものもある。西北利亞平原を北流する三大河とか、阿弗利加の地形を流れる諸急湍の如きはそれである。

河流はかく交通の上吾々の生活に太なる貢獻を與へて居る。その勾配が二百分の一以下であれば、吾來は運輸交通の上に恩恵を受けることが出来る。その深さが約三十呎、河幅が二百呎前後あれば、直接海洋と連絡する便がある。河川の價值が其の長さに比例するとは一概に云へないが、長大であるほど吾人に與へる恩澤も亦大である。

河流の作用は高地を侵蝕して、之を低地に推積して高低の差を減するから、河川の流れる所には大抵道路が通じて居る。山脈縱横走して交通を妨げる大なる土地も、河水が溪谷を造つて流れて居れば、その溪谷は常に山を越す道路即ち峠をなして居る。山脈を横斷する鐵道も溪谷に沿うて敷設されることが普通である。

更に河流は灌溉上吾人に大なる恩恵を與へて居る。我が國の如く水田に富む國土は一層この河川の恩恵に浴することが大である。吾が國が古來瑞穂の國として世界有数の米産國たる所以は、全く之が爲めである。見よ。ナイル河の下流域に屬する埃及地が、一年中一滴の降雨を見ないにも拘らず、ナイル河の貫流するために如何に地味が膏腴で、農産物の豊なること、實に驚くばかりである。

河流は又水力利用上吾人の生活に貢献することが實に太である。絶景奇勝をなす奔流急瀾は文人墨客の詩興を恣にするに止まらず、その無限の自然力を吾人に供給して、現代の文化生活を彩つて居る。かくて今や河流は水量の豊富なると共に其の落差に注意され、その水力は將に火力の傾分を侵略しつつあるのである。世界に於て水力電氣の最も發達せるは瑞典、諾威・伊太利で、共に地勢が然らしめて居る。殊に瑞西では鐵・石炭の産が皆無とも云ふべきに、アルプの氷雪に滔々として盡くる所なく、而も各所に散在する湖水は天然の貯水池となつて水力の源をなし、世界の一大水電國として工業の盛大驚くべきものがある。顧るに我が國は地形上水力に富んで居る。故に水電國として世界に雄飛の出来る可能性を十二分に有

つてゐる。

(三)

地勢の如何は又産業産物に密接な關係を有つてゐる。概して山岳の地方では林業・鑛業が行はれ、高原地方では牧畜業が發達する。若しこれ等の地方で農業が行はれることがあつても、それは小農組織に過ぎない。然るに平原地方では産業も多種多様で、商工業盛大に行はれ、農業は山地に反して大農組織となる。産物は米・麥・豆・野菜類等を始め、各種の工業原料品を産出することが多い。海岸地方は漁業が行はれ水産製造業も之に伴うて發達して居るかく地勢の相異によつて産業産物にも特有のもののあることは最も見易い事實である。

瑞西は歐洲高臺の殆ど中心をなし歐洲第一の山國である。地勢はかくの如くなれば、水力を利用して盛に工業を営み、種々の精巧な工藝品を産出する。之れこの國は水力によつて工業を營んで居るけれども、地勢上莫大なる運賃を拂ひ、粗大なる製造品を出すことの不利なるを知つて、主として精巧にして輕小なる製品を作らんと工夫した結果に外ならないのである。吾人が瑞西の時計、寶石細工其他貴重製品の産出を思ふ時に於て、瑞西の地勢を思出

さすには居られない。

高原は主として牛・羊・山羊・馬・駱駝等の家畜的動物の占領する所で、又、之に随伴する遊牧民族の占據する所である。然るに此の高原たるや、元來、礫礫、不毛にして、家畜の生存に供すべき生産分量は、到底豊饒なる低原に比することが出来ない。従つて是等の飼養動物を養ひつゝ、常に轉々する牛羊に生活を需めて居る人間も、亦勢ひ牧草を追うて遍歴せなければならぬ。かくて遊牧生活は高原に於ける人民の最も適當なる生活様式となつて居る。尙、熱帯地方の生産活動なり、國民の文化生活は主としてこの高原に營まれて居る。墨西哥及南米諸國はこの好例である。

吾々人類の多くは平原に定住し、平原に衣食を需め、平原を活動舞臺として居る。即ち平原は人類の衣食に缺くべからざる穀類・蔬菜の産出する所、而も地上に於て生産力の最も豊富なる所である。故に人類生活に於て最も安全且確實なる基礎は、實に平原に於て得られるであらうし、又國家富強の真正なる淵源は平原に需めることが出来る。是れ平原が人類を集中して定着せしめ、以て人類生活の舞臺として激甚なる生存競争を現出して居る所以である

等しく平原と云つても其の地形の如何によつて産業状態を異にする。其の好例は南米の中央大平原であらう。この平原は地形によつて、北はオリノコ河の流域即ちリヤノス、其の南はアマゾン河の流域即ちセルバス、更に其の南ラブラタ河の流域即ちバンバス等の特色ある平原に分つことが出来る。リヤノス（原野）は草深く樹木少く、唯、所々に椰子樹疎生するに過ぎない。氣候炎熱にして降雨一年中一季節に止まり、其の際牧草繁茂し牛の飼養が行はれる。セルバス（林原）は樹木相競うて枝葉を擴げ、下部には灌木枝を縦横に延し、上部には椰子、マングローブ等高さ二百尺に及ぶものもあつて、實に「森の上の森林」の状態をなして居る。されど風土、交通等の關係上未だ開墾は固より、其の利源開發さへも僅に端緒を開いたに過ぎない。次にバンバス（平原）は一の草原で、雨季には牛羊の一大牧場となるも雨季には此等の牧草枯死して一面荒野と化すると云ふことである。けれども近時大に開拓せられ殊にラブラタ河下流に沿へる沃野には小麥を産すること多く、羊毛・肉類と共に西歐の一大供給となつて居る。従つてそれ／＼土民の生業を異にし、文化の趣を異にして居る吾々は狭き郷土に於ても矢張同様地勢の状態、自然の分布に支配されて居ることを覺らねが

ならぬ。

加奈陀の東岸のニューファンドランド附近は諾威や我が北海道の近海と共に世界三大漁場と並稱せられて居る。この近海は一帶に大陸棚が發達して淺海をなすが上に、寒流海岸に近く、又暖流と相會するが故に多くの漁民の群集を見るのである。殊に其の附近のノバスコチヤ半島邊は漁利が多い。其の主なる海産物は鱈・鯨等である。さて海岸であればどこでも水産物に富むとは云ひない。又寒流と暖流との相會する所必しも魚屋が多いとも斷言が出来ない。其の上淺海で大陸棚がよく發達し、魚類の餌となる浮游動物が多くなればならぬ又人間が繁殖保護の法をとつて、之れを保護する必要がある。海産物は無盡蔵であると云ふけれども、海上到る處で漁獲は出来ない。海岸、海底等それ〴〵地の利を得ねば漁利も亦少ないのである。

(四)

地勢は又民質や風俗に關係することが大である。古人の言に「地は性を移し居は俗を易ふ」と言つて居る様に、地勢の如何は其の民質に至大の影響を及ぼして居る。即ち平野に住むも

のは性質測達で、山國のものは因循である。しかし又一面に太平野のものは輕薄であるが、山國のものは概して正直で律義である。

凡そ各國の國民性は何れも國土の自然に支配を受けて居るもので、我が國の如き國勢を有する國では、嘗て封建時代に小藩群立の奇觀を呈し、英雄割據して各勢力を持し、互に相讓らなかつたのは、之れ皆地勢の然らしむる所である。四面海を繞らし、大陸と孤立せる我國國土は、よく國民的統一を助長し、外敵に當つて、其の國家の存立を擁護せし事歴史の既に示す所である。これは一面の長所であるが、反面の弊害として、我が國の如き地形・地勢を存する國民は、徒らに歴史の隋力に支配されて、進取の氣概に乏しく、世界的の見識を欠き所謂島國根性の所持者であると評されて居る。何れにせよ。其の國民性の形成に土地自然の形勢があつた力があることも事實である。

和蘭人の氣質と和蘭の自然との間は面白い關係が見出される。和蘭人は恰も常に水と戦はんが爲めに生れた様である。従つて國人は一般に勤勉・努力・忍耐心等に富み、其の氣風、尙古代海軍國たる名残を留めるものが多い。又土地卑濕で萬物が汚れ易いので、其の清潔を好

む辭、我が邦人に似たものがある。朝より夕に至るまで酒掃を是れ事とし、廁さへも客間の如くせねば已まない。ただ一般に猜疑心が深く、容易に人を信じない様な氣風がある。是れ習性であらう。水と戦はなければならぬことは、此の國人の永く免かれない運命で、恰も瑞西人が山と戦ふと相似て居る。國民の勤勉・努力・忍耐等が是等の自然に由つて養はれるとは不幸中の幸と言はねばならぬ。尙佛獨兩國の間に風俗習慣の甚しき差異あるは、之れ兩國地貌の相違に起因する所が多い。我が國に於て信州人なり近江人なりが一風變つた氣質を發揮して居るのは、矢張この自然から來た影響ではあるまいか。

其の他地勢が其の地方の民治、其の國家の政治に密接な關係を有つて居る。古代の希臘が地勢上二十二個の聯邦を組織して各邦それ〴〵適宜な政策をとつた爲め、後には同一種族であるにも拘らず、一山を越えれば恰も外國人を見る様な感があつたと云ふことである。又我が國に於て嘗て謙信と信玄との其の軍略、戰術を異にした有名な話がある。畢竟この相異は越後平野式と甲斐盆地式とのやり方の別で、地勢が然らしめたものといつてよい。是等の事實は今日の世界各國がとつて居る民政・軍事・産業教育等の上にも同一の關係を見出す事が

出来る。

尙、歴史上の考察よりすれば、由來冲積的平原は帝都の位置、英雄覇業の地として知られて居る。かの古代帝都が大和川の流域に限られた如き、頼朝覇業の地が關東平野に近接し、織田氏は濃美の平野に起り、秀吉は大阪平野によつて天下に號令し、家康は三百年の覇業を關東平野によつて創めたことなどは、蓋し偶然なる關係ではない。ここに何等の深い意義の存することと思ふものである。

(五)

要するに地勢の狀態が人類の生活に偉大なる關係を及ぼして居ると云ふことは極めて明白な事實である。吾々人類はこの自然の間に生活の基礎を築き、この自然力を飽くまでも利用して文化生活を營んで居る。同時に吾人はこの自然の障礙を除去すべく、自然の征服に多大の犠牲を拂つて奮闘して居る。かくて人類文化はいやが上にも自然の幽玄なる理を探つて、之を征服し開拓し、益々人類活動の範圍を擴大し、以て人類生活の幸福を増進せんとして止まない。高山岳の跋涉、極地の探検、未開地の踏査、海底の測定は固より結構である。高原

の開拓、不毛荒地の開墾、水力の調査、水源の涵養、河川湖沼の改修も亦共に世人の注意を拂つて、之が改善利用に努力して居ることである。

眞に地勢を征服し地形を利用せんとすれば、地勢そのものの實體に精通せねばならぬ。地勢の状態が明になればなる程、地勢と人類生活との關係が接近して来る。人力を注げば注ぐ程地勢が生活上に利用されて行く。かくて人類の活動舞臺が闡明になるにつれ、人類の活動は活潑となり、そこに燦然たる文化が發達するのである。由來、歐羅巴は地勢上他の大陸に比して、遙に優良な地勢を有つ居る。加之歐洲人はよく是等の自然を征服し、總ての地形を普く人生に利用して居るので、地勢其のものも極めて明瞭に紹介され、特色ある文化が各地各國に華いで居る。曰く希臘古代の文化を初め、獨逸の近代文化、羅馬の美術文藝、佛蘭西の美術工藝、瑞西電氣事業、和蘭の水運、英吉利の海運業、諾威の水産業、歐露の農牧業等は即ち之れである。而して是等の文化は主として皆特色あるこの地勢の上に基礎を置いて居ると言ふことが出来る。

地球上に於ける生存競争の優勝者は、先づ自然界に於ける地勢を征服し、これに關する知

識を豊富に持ち、この地勢を巧に自己の生活に利用するものでなければならぬ。

### 第三節 氣候の影響と文化生活

(一)

人類は他の諸生物と共に等しく氣候の産兒である。されど人類は他の生物と異つて、特有な叡知を具へて居るので、幾分か氣候を人爲的に變化し、又、時々刻々變化する氣候に順應する手段を知つて居る。而してその手段は文化の發達と共に攻究せられ、漸次、人力を以て氣候を支記せんとする傾向がある。防風林・防雪林の經營、防寒用服裝の工夫、家屋構造の進歩並に旋風機の發明、ストーブ・スチームの設備などはその最も近い例である。

現今の人文文化に於ては、未だ吾々人類の生活活動は、殆どこの氣候如何に左右されて居ると云つても過言ではあるまい。特に吾々が身體の健康に異狀を呈した時に於て、最も明に感知することである。醫學は近世に於て最も顯著な發達を遂げた科學の一つで、其の研究は微から細に入つて居ると云ふけれども、猶、この天然力が齎す病源に對する效力は未だ微弱で

あると云はねばならぬ。以て氣候の影響　如何に人生に重大なる関係があるかを窺ふことが出来る。

人生は常に直接氣候の變化に左右されるばかりでなく、氣候によつて發育、分布を異にする生物より、更に大なる影響を間接に受けて居る。即ち氣候は直接間接に二重の影響を人生に與へるので、自然現象中最も大なる勢力を有つて人生を左右して居る。かく氣候は人間の身體に影響を與へるばかりでなく、更に心意にまでも厳しく影響を及ぼして居る。又、個人々々に及ぼす影響は、個人の活動を制限し、個人の集團たる國家社會の文化に偉大なる影響を齎すことになるのである。

(11)

通常、氣候とは各地に於ける天氣即ち氣溫・氣壓・濕度・及晴曇・風雨等の平均の状態を指すのである。就中、氣溫は其の根本要素をなすもので、氣候の人生に對する主なる影響は、この氣溫であると云つても不可でない。氣溫は直接人類の生活を支持する上に所詮缺くべからざる自然的條件である。

米國のハンチントンの説によれば毎月の平均溫度が華氏三十八度（攝氏三度三分）以上六十度（十五度五分）乃至六十五度（十七度七分）以下で、年平均五十度内外（十度）の氣溫を理想的氣溫だと想定し居る。見よ、世界の等溫線分布國に於て、各溫泉等は如何なる地點を結びつけて居るであらうか。年平均攝氏十度の等溫線が地球上の如何なる地點を通過して居るであらうか。北半球に於て略々本州の東北部を東西に貫き、朝鮮半島の中央、支那の北部（滿洲・蒙古）、露領中央亞細亞及び中央歐羅巴を貫通し、英本國の中部、北亞米利加合衆國の北部を貫いて、略々一直線に太平洋を渡つて來るのである。南半球に於てにニューギラード及び濠洲の稍々南方の洋中を一直線に東西に延び、僅かに南亞米利加の南端に入つて曲折して居るのみである。

試みにこの十度の等溫度を中心として、南北攝氏零度乃至二十度の等溫線間にある邦國を訪ねて見よ。しからば現代に於ける文明國の多くは、總てこの氣溫帯に存在することを知らざらう。之れ疑もなく氣溫が人類の文化國家の開明開化に緊密なる関係のあることを雄辯に語つて居るものである。



之に反して熱帯寒帯の地には殆ど文明國が見當らない。熱帯地方に棲む南洋土人の如きは高温の爲めに身心に惰氣を感ずると同時に、住民の一般は天與の食物の飽滿し、氣温高きが故に衣服の必要を見ないから、生活上顧慮がない。従つて生きんが爲めの勞働を要さない。たゞ徒らに榕樹の葉蔭に、さては部落集會所に雜談し、或は墮眠を食するのみである。かく風土氣候の馴致し、安逸を貪つて勤勉を厭ふ結果、人智の程度は著く低く、自己の年齢さへ知らない。又十以上の計算に堪へるものが極めて少いと云ふことである。又北極に棲む、エスキモー族の如きは、一年の大部分が氷雪に鎖される程に氣温の低い地方に生息して居るので生きる爲めのもがきにその日を費し、知能の啓發に暇がない。従つてよりよき生活に向つて活動し、希望をもつ餘裕さへも殆ど有たないと云ふ様な生活狀態である。かやうな地に棲む人類が文化人になり得ないのも、燦然たる文化國を建設し得ないのも、蓋しこの氣温の然らしむる所ではあるまいか。

現今文化の最も開けて居る所を緯度で示すならば、北緯二十度乃至六十度の間で、而も北温帯に屬して居る。何故に温帯の土地に文化がよく發達して居るであらうか。温帯の地は熱

帯・寒帯に反して氣候概ね温和で、四季の變化著しく、動植物の生育も亦良好である。而も努力すればする程其の效果も大である。故に勤勉心、競争心などの意氣も旺盛となり、そこには人類活動の趣味も起り、文化進歩發達も現はれるのである。現代に於ける高尚な精神的文明も物質的文明も共に、この温帯地方に華いで居る。又、往古埃及、亞刺比亞、波斯、印度などの地に榮えた文明も、氣候と人類生活の進歩とにつれ、次第に温帯方面に進み、今や世界文明の中心は陸半球の北温帯の地に移つて居る。西洋文化、東洋文明の如きは即ちそれである。

尙、ハンチントン<sup>1)</sup>は理想的氣候の一要素として「日々の温度に變化あるを要する。」と云つて居る。日々の温度の變化は主として刺戟性のものである。氣温が一様で變化がなければ刺戟が少く、吾々の活動を盛ならしめることも亦少い。刺戟のない氣候は人間の怠惰にし、吾人の精神生活を平凡するものである。氣候と戦ひ、氣温に適應せんとする所に人智の進歩が伴ふのであると述べて居る。温帯地方に文明國が多く發達して、燦然たる精神的物質的文化の出現して居るのも、蓋し如上の理由に基くことの多大なることを思ふ。

氣候は動植物の分布を限し、定産業の發達を左右する偉大な力を有つて居る。生物は氣候水陸の分布、地勢、地質等によつて、其の種類を異にし、其の蕃殖、生育等の状態をも大に趣きを異にするものである。就中、氣候の影響こそは最大なる支配力を有つて居る。

海洋、山嶺の如きは、一見、植物の如き固定生物の傳播を妨ぐる様であるけれども、未だ氣候の不順、不適に於けるが如く甚だしくはない。植物の種子、胞子は風に送られ、海流に流され、又は人類、鳥類其の他の動物によつて運ばれて、遠隔の地に至り、氣候の許す限りは到る處に分布し其處に養育するのである。動物も亦氣候及び食物の性質によつて制限せられ、或ば一定の地域に棲息するものがあり、或は候鳥の如く氣候と食物とを追うて移住するものもある。殆どかの動植物の分布氣候に制限され、運命づけられて居ると言つても過言であるまい。

氣候はかく動植物の分布を限定するから、之を採取・栽培・飼養する漁獵・牧畜・農業・林業又は是等の生産品を原料とする商工業も亦従つて限定せられるのである。即ち米の栽培の如

きは高温と多雨とが必要であり、製鹽の如きは良鹽田に、日射強く、雨量の少いのが肝要である。又羊の飼養の如きは大氣の割合に乾燥する土地がよいのである。養蠶家が温度に湿度に注意するのも、能く人の知る所である。

一般に云ふと高温・多雨な熱帯地方や亞熱帯の地方では、珈琲・胡椒其の他の香料や、米・綿・茶・甘蔗・烟草等の栽培、並に象・水牛等の飼養が盛に行はれる。温帯地方は葡萄・林檎・麥・麻・甜菜等の栽培、並に牛・馬・羊・豚・家禽等の飼養が適して居る。然るに寒帯地方には植物性の産物に乏しく、僅に海獸漁業が行はれて居るに過ぎない。要するに氣候のみが各地の天産物の多少、各種産業の振不振に關係するものとは限らないが、主として氣候の影響を蒙ることが大であると言はねばならない。

## (四)

氣候は更は人類の生活を左右し、人類の分布をも制限して居る。前述べた様は氣候は直接生物の分布を限定し、産業の發達を支配する。而して人類はこの産業の發達・生産物の有無と密接な關係を有つて居る。従つて人類の生活は間接に氣候に左右されることが大である。

今日の如き交通の便が開けて、有無相通する時代に於ては、或る程度までは衣食住の資料を補ひ得るとしても、未だ交通の利便の開けない地方に於ては、住民の生活が如何に制限され如何に不便を感じたことであらうか。又如何なる特色ある生活を営んだことであらうか。茲に於てか氣候に應ずる生活、氣候に適應する風俗習慣が生れて来る。各地各國がそれ／＼衣食住を異にする生活を營んで居るのは、決して不可思議な現象ではない。寧ろ當然である。人類生活に對する制限は、軀て人類分布の上にも現はれて居る。人類の分布——人間疎密は素より氣候のみを原因とするものではないが、少くも氣候が其の一大原因であることは否定する事が出来ない。

試みに世界人口の密度を示した分希地圖に當られよ。人口の最も密なる地方は歐洲の西部亞細亞の東南部及び北米の東部等の區域と、天産物の豊富な熱帶の一部とである。之れ即ち氣候が良好であるから、若くは氣温は少々高いが氣温と雨量との爲めに起る天産の豊富と云ふことが人類を集中させたのである。

溫帶や熱帶の中でも特に雨量が少い爲に天産物に乏しい阿弗利功のサハラ沙漠やカラハリ

沙漠中央亞細亞、北米のロッキー山脈の東方、南米のバンバスタ、濠洲の西半部等には人口が少い。溫帶の中でも寒帯に近い地方は概ね氣候が不良で、天産物が少い爲め戸口も亦稀薄である。又、熱帯多雨の地でもアマゾンやコンゴ流域は、氣候が不順であるから天産物に富んで居るけれども人口が少い。寒帯の大部分は氣候天産共に大與の恩恵に乏しいので、人口が最も少く、極圈内には概ね永住の人類を見ないのである。

かく氣候が人類の分希を制限するには、主として氣候が人類の健康や活動力に大なる關係があるからである。人類は極度の高温や寒冷には、例令一時的には生活し得るとしても、馴致しない吾人の心身は迎も永續的に之に耐え、其の間に生活活動することは殆ど不可能である。酷寒で生活資料の殆ど皆無な極地は固より、天産物の豊富な熱帶地に、溫帶地方の文明人が容易に入り込み得ないのは之が爲めである。英國人が印度の寶庫に永く定住して經營することの困難なことや、アマゾン・コンゴなどの流域が、未だ開發されないのは主として之に基くのである。

(五)

以上述べた様に氣候の人生に及ぼす影響は實に甚大なるものがある。然るに吾々は環境の氣候に馴れ、如何な影響を直接間接は受けて居ることやら、平生一向意識しないことが多いが、短きは朝夕の消息より四季に亘る生活々動は、悉くこの氣候に直接刺戟を受け間接にも生活を制限されて居ることである。

ハンチントン は又次の如く述べて居る。曰く「人類の文明は恰も樹木に生ずる果樹の如きもので、果實の良否は樹種と手入れと氣候の如何によつて定まるが、殊に氣候は重要な原因をなすものである。人類文明は果實の如く三要因によつて發達するもので、就中、氣候は其の主なる要素となるものである。」と。吾々はこの影響刺戟の厳しい氣候中に生活し、之に順應すると同時に、この自然を征服して文化生活の充實と向上とを圖らねばならぬ。

最近、氣象學並に氣象觀測に關する研究が暑しく進歩し、其の精密なる科學的知識は遠洋航海、遠洋漁業は勿論、日常生活活動にまでも利用せられて來た。殊に航空界の進歩は、漸次氣象の科學的研究を促し、各地に於ける氣象の特質並に其の現象が明にせられる様になつた。歐米大陸に於ける天氣の觀測は、極めて精確なる域に達し、明日の何時何分頃降雪あり、風起るとまで精密に觀測し得るに至つたと云ふことである。我が國の如き地形の島國に於ては、觀測に困難のあることは事實であるが、今や海上測候の計劃も立ち、觀測の技術も進んで來たことであるから、近き將來に於ては確に信據すべき豫報を見るに至るであらうと思はれる。

「燕が低く飛ぶから雨だ。」とか、「蟻がよく卵を運ぶから雨だ。」とか、又「西の暗い時は雨」などと云ふ様な俚言を本氣に信じて、科學的研究による天氣豫報に注意せぬ様なことでは、未だ文明國民と稱する資格がない。素より是等の俚言中には時に長い間の經驗をもととして地方的に言ひ表はしたものもあるけれども、未だ一般的——科學的に價値のあるものではない。

よろしく文化國民たらんものは、郷土に於ける日々の天候より一年中の氣候の變化特質を悉知して、意識的に之に適應し、之を日常の生活に利用する境地まで、國民の修養を引き上げねばならぬ。進んでは各地各國の氣候の特質と生物の分布、人類の生活狀態等を比較對照して、各民族國民の氣質、生業や生活々動狀態を審にし、且、民族の發展と氣候との諸關係

を理解せしめることが地理教授の立場から見ても國民教育の精神からも極めて重要な修要であると考へる。氣候、天文等に關する自然現象には、更に人智の未だ透徹しない無限の自然力が隠見して居ると思惟される。將來文化の開展を要する方面は多々あることであらうか、就中この氣界天界に向つてはもつとく人智を注ぐべき餘地があることが指摘したい。

#### 第四節 産業の變遷と文化生活

##### (一)

世の文明が進歩したとか、文化が停滯して居るとか云ふことは、一に人間が如何に自然を征し、如何に自然力を支配して居るかの程度を意味するものである。即ち人間は不斷不息、この人力と自然力との交渉に立つて、常に人生の更新し文化の開拓に努力し、人類生活の向上發展に貢献して居るものである。殊に産業方面に關する人類の活動はその著しいものである。

今、この人類活動の状態を産業——經濟的の見地から歴史的に見るならば、時代が太古に

遡る程、人類は自然力に支配され自然に甘んじて居つたことが多い。例へば原人生活の如きもので、全く人は自然に生き、自然力のまゝに活動して居つたに過ぎない。然るに人類の進化は、漸次、人間が却つて自然力を征服し、之を利用して、所謂文化を建設して來たのである。殊に近世に於ける人智の進歩は、自然科学の發達となり物質的文明、機械文明の勃興となつた。機械文明の進歩は聽て強大なる人力と化し、著しく自然力を征服し、飽までも無限の自然を開拓して、之を支配せんと努めて來た。之れ人類が現代の文化を樹立して、ここに燦然たる經濟的生活を營む様になつた所以である。かくて人間の將來は、如何に自然力を統整し、如何なる經濟的生活を營んで行くかは、殆ど豫想することが出來ない。茲に人類生活の更新があるし、又限なき文化の開拓が行はれるのである。

史家は之を歴史的發達に基き、人類の生活状態を分つて、狩獵及漁獵時代、牧畜時代、農業時代及商工業時代の四大期として居る。又、之を現代に於ける經濟生活の實際について横に見るならば、矢張、等しく原始的の經濟的生活を營んで居るものか、更に燦然たる文化的の經濟的生活を營むものまでの各種の生活現象を見出すであらう。以下人類の經濟生活

の推移を訪ね、其の間主として經濟活動の主要素たる産業と文化との關係を吟味することに  
する。

(11)

第一、狩獵及漁獵時代の文化生活、原始的人類の生活は、全く本能的動物的生活に過ぎないから、嚴密には經濟的對象とはならない。狩獵及漁獵時代に至つて始めて經濟生活の時代に入るのである。この時代は殆ど勞働も資本も要することがなく、恰も今日見る南洋土人の如き、人間は唯、天産物を以て満足し、纔に天然物を採集して生活したに過ぎない。しかも豊富な獲物を自由に採ることが出来ても、將來の爲めに貯蓄しようとする意志さへなく、又家畜さへも使用することを知らなかつたと云ふ様な至極單純な生活であつた。家族が消費する物品の大部は、自己の家内で採集すると云ふ様な次第で、生活も亦孤立的であつた。従つて交換もなく、分業もなく、財産は凡て共有で、私有財産と云へば武器及び採集した食物位のものである。努力と云ふ努力は纔に天産物を衣食住の爲めに採集するのが關の山で、生活は極めて幼稚なものであつた。

然しながら、かやうな生活の間にも低級な文化を見出されぬ譯でもない。古代朦朧なこの時代に於ける産業的形式は、最初は手と石と杖とによつて獲られる様な食物に依從して居た金屬使用の發見後は弓矢を携へて森林に入り、禽獸を狩り、或は河海に臨んで魚介を漁つて其の生命を繋いで居たものである。此等に使用した器具發展の形蹟は、今日各地に於て發見される石器等によつて、その文化の程度を追跡することが出来る。

之を現住の野蠻人の生活に見ることが出来る。阿弗利加の南方にブツシマン(鍬の人の意)と呼ばれる種族が住んで居る。鍬の人と呼ばれるだけに未だ至つて開けない土人であるが、それでも幼稚な頭腦を絞つていろく〜と工夫して居るから面白い。彼等はまだ田畠を耕して、物を作ると云ふことを知つて居ない。草や木の根を掘つて、それを日常の食物として居るのである。然るに草木の根を掘りとする場合に、唯、先の尖がつた棒で掘つたのでは深く穴を穿つことが出来ない。だから圓い石に孔をあけて、それを罎として居る。かやうにすると軽い棒で土を掘るよりも、石の重みがついて居るから、どんく〜と叩くと手早く土が掘れるのである。

又、獸を捕へる爲に、極めて簡単な道具が出来て居る。それは丁度啞鈴を中央から二つに裁つたやうなもので、短い棒の先に圓い玉がついて居る。たゞそれだけであるが、獸を目がけて力を込めてそれを投げつけると、まるで鼠が兎でも飛んで行くやうにびよん／＼と地上を跳飛んでうまく獸にぶつかるのである。

是等は共に極めて簡単なものであるが、こんなものが段々と發達して、今日文明人が使用して居る様な便利な土掘道具なり、精巧な狩獵器具なり其他の各種の器具機械なりが工夫せられる様になつたことに注意しなければならない。

(三)

第二、牧畜時代の文化生活 この時代に入つて、始めて人類が自然を征服し、自然物を利用することを考へた。自然の征服は先づ生物即ち動植物の二方面に向つて始まつた。而して生物も成るべく容易に人類がその生活に利用し得る様な高等なものから手をつけた。例へば羊とか牛とか山羊とか云ふ様な高等な動物を馴致せしめて、之を日常の生活に利用することを工夫した。ここに於て牧畜業は水草を追うて移動することとなり、聽ては牧場を要するこ

とになつた。

かくて一定の土地を占領せんが爲めには、屢々種族間の争闘が免がれなくなつた。そこで男子には戦争に従事する爲め、之に應ずる鍛錬が必要となり、又、女子は子女の養育と牧畜事業に従事することになり、ここに始めて分業なるもの萌芽が自ら起つたのである。

元來、この生活は水草を追ふ所謂遊牧の生活なので、確たる土地所謂の觀念はなかつたが牧畜の保護と牧場の占有とは經濟上極めて必要なものであつた。私有財産は既に存在し、畜群・金銀・織物・寶石等の如き運搬し易いものは、財産として尊重される様になつた。茲に於てか經濟的に貧富の懸隔が生じ、物に値が生じて來たのである。當時は又當時住民の衣食住は總て自給自足であつたが、共同生活の觀念は漸次發達して來た。

ここで何故に狩獵時代の生活に移つたかと云ふことを見逃してはならない。狩獵を以て生活して居た住民の智識が稍々進むに従つて、欲望の範圍が擴張され來た。然るに狩獵による天然供給が絶えず問題して食物の缺乏を告げ、往々、數日も飢餓を忍ばなければならなかつた。かくて狩獵による生活幸福が少く、而も生活の不安定なることを悟つた住民は、漸次牧

畜による生活を試るに至つたのである。人類の經濟生活は常にこの境遇を繰り返す。そこに絶えざる文化の昇進があるのである。

牧畜業に於て動物を馴致せしめ、且品種を改良し其の利用を攻究して人類の生活に活用して行くと云ふことは、云ふ迄もなく自然の支配・統御である。之を今日牧畜業の状態に見るに、寒帯地方に棲む馴鹿の如きは、性溫柔にして馴れ易きが故に、土人は盛に人を放牧して或は櫓を曳かしめ、或は其の肉血等を食用に供し、其の毛皮は衣服の原料とするなどあらゆる方面に之を利用して居る。實に馴鹿は寒帯地方に於ける土人の唯一の富源をなす家畜で、物質の標準さへもこの馴鹿幾匹を以てすると云ふことである。

アラビヤの高原は由來名馬を産出する。此の地方に優秀な名馬を産する譯は、其の風土が乾燥して牧畜に適して居るのと、もう一は教祖マホメットが教義に於て愛馬心を土民に鼓吹した結果だと云はれて居る。よく馬を愛し、よく飼育する所に優秀なる種の産出するは當然なことである。我が國で良馬を産する東北地方も亦、馬を愛育することに於て誇とするものがある。是等の地方はこの馬の飼育を副業若しくは主業として生計を營んで居る。

又羊の國と稱せられる濠洲は羊の數に於て最も多く、范々たる草原を有つて居るから、飼料が豊かで、現に八千五百萬頭も飼つて居る。之を其の人口五百萬に割り當てると、一人が約十七頭の割合になる。従つて草のある所には到處に之を飼養し、小さな子供すら牧羊に関する知識を有つて居る。その有様は丁度我が國の養蠶地方の少年が養蠶に對する知識を有つて居るやうなものであると云ふことである。牧畜は比較的素朴で長閑な産業の様にも思はれるが、其の間に人類文化の情趣を味ふことが出来る。

(四)

第三 農業時代の文化生活 動物を利用することを知つた人類は、更に進んで植物を培養する術わざになつた。こゝに於て人類は家畜の飼養と漁獵との外に、農業と云ふ土地を本とする職業を生むことになり、漂浪生活は一轉して、子々孫々土着する農民生活を營むことになつた。既に農業生活に轉するや、同一面積の土地は牧草場に委する時に比すれば、遙に夥しい人口を支持することが出来るので従來の漂浪的で不安定であつた生活は、茲に益々安全な定住生活を營むこととなり、其の根據たる住家は堅牢に、築建せられ、かくて次第に住家の集



合せる村落が起り、將來、發達すべき高尚な社會の基礎もこの間に培はれて來た。随つて土地所有の觀念が明瞭に生じ、人類相互間には新しい義務關係が出來、從來よりも更に複雑な經濟生活を營まねばならぬことになつた。

この時代の始めは概して勞働に奴隸を使用したけれども、人權の發達と共に奴隸は次第に解放され、總ての民族は一般的に勞働すべきものであると考へる様になつた。かくて人類は動植物の二界に渡つて、その自然を利用し、着實な生産を營んで經濟生活の鞏固な基礎を作る様になつた。然るに一面に於て人々は各々其の天性と力量とを異にし、又、各所に散居する各部落は自ら其の境遇を異にするので、其の生産も亦自ら異ならざるを得ない。ここに於て人々は自己の需用する所のものを總て自ら生産することに満足せずして、自ら生産した物と他の生産した物とを交換して、互に便利を受ける様になつた。けれどこの時代に於てもなほ生産者と消費者即ち他の生産者とは互に物品と物品とを交換するに過ぎなかつた。

この時代の人類の文化活動に於て注意する價値のあるものは、同一面積の土地を以てして從來よりも遙に多くの人口を收容することが出來ると云ふことである。換言すれば土地の生

産力を増進して、生活に安定を與へるに至つたと云ふことである。土地の生産力は地味と位置とによつて大小があるけれども、人類の努力、社會の進歩は漸く之をして平均せしめようとする傾向がある。又、社會の進歩は土地の生産力をして、益顯著ならしめようとして居る。かく農業活動は常にこの生産力の増進に向つて努力して居る。けれども土地の生産力は決して無限のものではない。地力遞減の法則が明示して居る様に之に投する努力・資本が一定の限度を越える時は、土地の報酬は次第に減少するものである。

之を今日の農業活動に見るならば、粗笨農業と集約農業との二面を見ることが出来る。北米は文化の程度に於て歐洲に次くものではあるが、彼の約二倍の面積を以て、而も彼の三分の一にも足りない人口を有つて居る。従つてなほ原始的天然景の卓越せる地方を豊富に含んで居る。大平原は到る處に大農場があつて、器械やモートル等を利用して大規模に耕作が行はれて居る。即ち農法は粗笨である。南米、濠洲及び我が北海道本島も亦然りである。

然るに歐洲の農業は之れと趣を異にして來る。殊に白耳義・和蘭等は集約的である。白耳義は九州島にも及ばない面積で、九州島の約三倍に達する生靈を住はしめ、人口の密度實に

世界最大であると云ふことは生業の如何を物語るものである。この地は元來中部は小麦・甜菜等に好適な黄土的沃野があるけれども、其の他の地方は成は砂地又澤潟低地或は高原で氣候も地味も劣つて居る。しかるに白耳義は到る處土地を大に利用して、集約的に農牧を行つて居るので、面積に比して其の收利も亦甚だ豊富である。

又、獨逸の地は概して地味・地形・氣候共に農業に適して居るとは云ひ難い國土であるが、勤勉なる國民の努力と政府の保護とによつて産業大に發達し、諸種の農産物を産出して居る殊に馬鈴薯の産額は世界第一で、世界産額の約三分の一を占め、多く酒精の原料とし、又この國の重要な食料品で「貧民のパン」と稱せられて居る。甜菜の産も亦世界第一で、各地に其の産多く、中にもエルベ河流域は其の中心地である。かやうな盛大なる生産を見るに至つた所以は、そも何に起因するであらうか。曰く近時に於ける人口増加と科學的農法に伴ふ生産能率の増進に基くものであると言はれて居る。

翻つて我が國數千年來の經濟生活を見るに、殆どこの農業本位の生活で、國家も亦農を以て立國の基として來た。詰り本邦上下三千年の文化はこの農業生活の間に發達して來たと云

つてもよい。由來、農業本位の生活は、素朴で着實、固執的で安定、保存的ではあるが生産的である。故に其の文化も亦素朴で着實、漸進的で安靜、急進的ではないが發展的なるを特色とする。我が國固有の文化は蓋し之を基調とするものではあるまいか。

(五)

第四、商工業時代の文化生活 嚴密に見るならば今日の商工業時代に這入る前に、手工業時代とも云ふべき時期を經過して居る。この時代は即ち農業本位の生活から産業の時代に移る過渡期とも見るべき時期で、主として各種の手工業は漸次分化して、それ／＼分業が發達して來た時代である。一方製造業と商業との關係も密接となり、人口は次第に都會に集り、都會生活が地方生活の標準となり、總ての經濟活動は都會を中心とする様になつた。

商工業時代に進んでは、益々分業の發達を見、分業の發達は總て各種工業の發達となり、工業の發達は著しく社會生活——經濟生活に變動を與へた。又、一面手工業時代には主人と徒弟とは家族的で、而も親密な關係に於て、家内工業が行はれて居たが、産業時代に移つては工場が樹立し、工場の所有者と勞働者とは非常な懸隔を有つ様になつた。從來の身分は經

濟的の階級となり、一方に非常な富豪を生ずると共に、他方には極めて貧困な労働階級を見るに至つた。

かくて産業時代に於て第一に注目しなければならないのは、需要供給からする商工業の自由競争である。この自由競争は更に近世自然科学の發達と相俟つて著しく商工業の勃興を見るに至つた。殊に十八世紀中葉以後に於ては自然科学の發達が著しく、種々の機械の發明並に工業的發見を促し、かくて産業革命と共に從來に於ける經濟生活の基調が根本から破られ應用科學を原據とする生活に一變されて來たのである。就中、歐羅巴は産業革命の結果として、自ら消費するよりも多くの物産を出す商工業的世界と化した。そこで歐羅巴諸國は常に新市場を遠隔の地に求め、従つて世界各地の貿易が廣くべき程度にまで發達を遂げた。かくて西歐人は到る處に新植民地を設けて、市場を獨占するに努めたから、世界的通商と云ふ事が一大歴史的事實となり、進んでは各國民の競争を起し、遂に世界列強國の經濟的競争を誘致するに至つたのである。

殊に近時に於ける交通機關の發達は、著しく内外貿易を促進し、貿易の内外發展は、總て

各地各國の商工業の活動舞臺を廣め、總ての商工業は廣く海外各地を相手に、而も大規模に善む様になつた。かくて商工業の勃興は各地各國をして原料品の獲得並に原料品の販路の上に激甚なる競争を見るに至つた。従つて生産品の改良の爲めには、それ／＼あらゆる人智を傾注して、精巧に精密を重ね、一面工業道德に、商業道德の上に十分なる反省を加へ、廣く販路を獲得して商工業の發展を企圖することに着目せられて來た。之れ取も直さず最近國際間に經濟的競争——所謂平和の競争を見るに至つた所以である。

かくの如き形勢を示して來た現時の經濟的活動は、出來るだけ大なる人力と鋭い人智とを傾注して自然力を征服し、之を有効に活用して能率の増進を圖ることに努めて居る。顧るに經濟活動の進歩しない時代即ち自然力を利用することの少なかつた時代にあつては、生産に於て最も重きを置いたのは自然で、而も生産に關する人類の活動は其の範圍極めて狭小であつた。然るに經濟活動の發展につれ、自然を支配し其の自然力を利用して、生産能率を増大し、且、人類の文化を向上して止まない。實に現時に於ける所謂大商工業時代は、經濟活動の空前なる發達を遂げた時代である。之れ現代の經濟界は最近學術工藝の一大進歩に俟つて

偉大な人智を發動し、進んで無限の自然力を征服し、之を調理することを得たので、人生の經濟的・物質的生活の基調が驚くべき程打開され、且人類の文化が之に伴つて促進されて来たのである。

#### 第五節 交通の發達と文化生活

##### (一)

「文字と印刷術を除いては、總ての發明中、距離を短縮することの發明程、人類の文明に大なる貢獻を與へて居るものはあるまい。」とは有名なマコーレーの交通觀である。

交通機關の發達は、常に人類生活に直接を與へるばかりでなく、全世界に於ける國家社會生活の上に、物質的にも精神的にも一大變動を促したのである。即ち汽車・汽船の發達は、茲に世界的關係の端緒を開き、電信電話の進歩は地球上の出來事や、世界市場の狀況を居ながらにして速知することを得しめた。かくて世界の經濟は次第に接近し、市場の範圍を擴張して世界を一大市場と化成するに至つた。

又、交通機關の發達は著しく中央政府の統治力を増大し、國家の統一を容易にした。現今の如き鞏固な大國が產出したのも、主として交通機關の進歩した結果と云はれて居る。のみならず、人類交通及び電信機關の進歩は、實際の範圍を非常に擴大し、其の結果は國民の智識の分配を平均し、東西文化を融和して、國家——世界の文化を著しく増進した。之を細觀するならば、交通機關の直接關係に社會各方面に及ぼす影響には實に多大なものがあるであらうと思ふ。文明の進歩は交通機關の進歩の結果で、交通機關の發達は、又開化の姿であることと見ることが出来る。

本來、人類が交通を開き、運輸の便を圖ると云ふことは、人力によつて努めて自然の障害を除去し、地球上の距離を時間的にも空間的にも短縮すると云ふことである。即ち交通の發達は人力を以て自然を征服して行くことで、一面自然對人類の一戰闘であると見ることが出来る。併し交通の發達は交通機關の種類、水陸交通の如何を問はず、地勢の制限を受ける事が頗る大である。従つて交通の發達には自然を征服する所の大なる人力を要するのである。近時人智の進歩は偉大なる人力と化し、山も鑿ち、谷も埋め、千里の波濤をも打ち越えて、

専ら距離の縮小に全力を注ぎ、加ふるに科學の進歩は緒種の交通利器の發明を促した。かくて現今の社會は過去の人類が想像だにもなし得なかつた自然の障礙を破り、制限をも越えて之を支配し利用するに至つたのである。之れ取も直さず現今に於ける交通機關の進歩發達である。

原始時代即ち人智の未だ開發せず、専ら自然力に對して受動的であつた時代に於ては、社會結合の區域——文化發達の區域を限定すべき原因は、全く自然的勢力たる地理的條件にあつたのである。此の時代に於て主として交通を阻碍したものは、山脈・大河・湖沼・内海及大洋・砂漠・無人の境土・大沼澤・大豁谷等である。固より其の阻碍の程度に多少の差異はあるけれど、何れも或る發達の時代までは逞しい勢力者であつたことは殆ど疑ふことが出来ない。各民族の形成はこの間になつたものであると云はれて居る。

然るに社會に於て漸次、發展した人間の努力は、愈々外圍の自然力に反動し、その反動は總ての方面に顯はれた。就中、最も著しく現はれたのは交通の開拓である。かくて海岸は通路となり、山岳は墜道となり、電線は渺茫たる洋底に沈められ、鐵路は廣漠無邊の内陸に貫

通し、次第次第に阻碍物は排除せられて來たのである。今この發達、變遷を歴史的に見るならば、そこに交通と文化との關係が明に窺はれると考へる。史家は之を交通の歴史的發達に基き、河湖交通時代、内海及沿海交通時代、大洋交通時代及び内陸交通時代の四期に分つて居る。以下各時代に於ける人類と自然との關係を討ね、其の間に交通と文化との諸關係を吟味して見よう。

(II)

第一、河湖交通時代の文化生活 交通發達の最初の實現とも見るべきものは、簡単な裝置をした小規模の舟筏と、獸力の利用との發見であらう。一は河湖の障礙を排除し、他は低い山脈岳陵の隔壁を除去したものである。大山脈は後に荷車の發明と人工道路の開鑿に至つても、尙、其の勢力を失はなかつたが、河川・湖沼に至つては、之が爲めに全く征服されて其の勢力を滅却したばかりでなく、却つてその自然力を利用してし異社會——他國を結合せしめた。かの古來、幾多の古戰場が河岸に散在するは、一方に異社會を隔離する勢力を表はしては居るが、同時にこの場合に於ては、常に防禦軍の敗北を以て終るのが普通である。之れ即

ち其の勢力が滅却して結合力となつたことを證するものである。

この河湖交通時代に於ては、自ら一つの河系流域にある人類は相結合して一社會を形成した。而して一社會の各部を連絡せしむべきものは、唯一の河川と、之に附隨せる原始的道路に過ぎなかつた。従つて各所の河谷に分居散在せる小社會の大きさは、一にこの河川の大小によつて制限され、又、この時代に於ける社會文化發達の程度も、社會の大きさを直接に決定する河系の大小によつて決せられた。我が邦の如き短小な細流による社會が、未だ蒙昧野蠻の域を脱しない間に、大陸の長大な巨流を基礎とせる社會即ち埃及・ペロニア・印度及び支那等が夙に文明の域に達したのは、全くこれ河湖交通の賜ではあるまいか。之れ所謂河川文明と呼ぶる所以のものである。

見よ。世界の地圖を開いて、都會・港市は如何なる地點に散在し、集中して居るであらうか、如何なる地方に最よく文化が發達して居るか。新潟縣の主なる都會は信濃川に沿うて居る。印度の主なる都色はガンジス河の流域に、支那中原の大都會は總て揚子江若しくは黃河の流に臨んで居るではないか。又、利根川・淀川・ライン河・ダニユープ河・ミシシッピ河等

の河川を始め、多くの河川の流域は其の他・其の國文化の中心地となつて居ることは事實である。素より河川の流域の發達せる所以は、一二に止まることではないが、この河川交通の至便は、其の最も顯著な直接原因ではあるまいか。湖沼周圍の文明亦然りである。

かく考を進めて來ると、黒龍江が東流せずに西流して渤海に注いだ時の滿洲の開展は。ナイル河・コンゴ河等に急湍瀑布がなかつた場合のナイル・コンゴの流域の文化は。「バイカル湖が西比利亞鐵道の進路に直角でなく、而も多少左右によつた時の該鐵の至便は。」と思はずには居られない。

(三)

第二、内海及沿海交通時代の文化生活 帆船の發明はやがて異社會——他國を隔離した内海及び沿海の障壁を撤去し、併せてその海岸線に直角に交はる山脈の隔離的妨害を無効ならしめた。かくて是等の山脈によつて別離された並行、若しくは反對の河流の河口を連絡して比較的廣く他の社會との交際が行はれ、且、國家統一の一步を進むるに至つた。

上古神武天皇の東征が全く内海及び沿海によつて功を奏し、當時の交通機關の力の及ぶだ

けの静穩な瀬戸内海沿岸が先づ統一せられたことや、之に反して他の海運が未だ發達せず、而も其の征服によらなければならぬ東國の地方が永く王化に浴さなかつたことや、其後歴代の征討の功は悉く海洋交通によつて成就せられたことなどは、皆其の事實を例證するものである。地中海を中心とした希臘・フェニキヤ・羅馬等の文明は、即ち内海及び沿海の便をかりて發展したものに外ならない。

かくの如く内沿及び沿海交通の發達は、近世的意味の國家統一の端緒を開いたけれども、眞正の統一には、尙 次ぎの交通期を俟なければならなかつた。蓋し、沿海交通は各所の河谷に特發した各部落を接觸せしめ、次いで此等の種族として競争せしめ、争鬪せしめ、其の結果は、遂に優勢なる種族が劣弱なる他の種族を併呑するに至つた。加ふるに時々稀世の豪傑が起つて遠征を企て、統一の功を奏するも、當時の交通機關に於ては、未だ此等の社會を永久に連絡し、迅速に且、密接に其の相互の利害休戚を一にすることが出来なかつた。少しでも交通が疎遠になり、連絡が弛むと、忽ち地方の部落は獨立の勢力を得て、離叛を企て再び社會は分裂すると云ふ様な現象を演じたのである。

かくて征服と離叛、統一と分離、泰平と擾亂とが一起一伏、交代連續して次の交通時代を待つた。我が國に於ける神武天皇の統一より維新の革新に至る上下二千五百有餘年の星霜は正にこの交代起伏の歴史で、これ實に内海及び沿海交通時代に於ける社會現象の特質と見ることが出来る。かの政治上の所謂封建時代は當にこの時代に出現したものである。社會文化の發達も、これと殆ど軌を一にして居る。今日なほ然りである。吾人が目前見る様に九州と東北、關東と關西、山陽と山陰、熊本と薩摩と云ふ様に地方によつて言語、風俗を異にして居る。況して世界各地に於ける人情・習慣・社會組織等の差異は、敢て怪むに足らない。

(四)

第三、大洋交通時代の文化生活 内海及び沿海の交通に止まつて居た海上の交通は、汽船の發明によつて大洋を縦走横航するに至つた。かくて汽船の發明は曾て世界各地の接觸を阻碍して居た大洋の隔壁を撤去し、大洋の沿岸線を横斷する大山脈、其の他の障礙物を無効に歸せしめたのみならず、海洋は恰も河川の如く、一度取り除かれた後は、却つて異社會をして互に接近せしめる媒介物となつたのである。大西洋の横斷、印度洋航路の連絡、太平洋の

縦走横航に即ち是れである。この大洋の交通は地峽開鑿の成功によつて益々擴大され、遂に東西兩洋南北兩海を水路によつて連結することになった。

遠洋の航海は前時代よりも、遙に遼遠な土地に於ける世界の各地を互に接觸せしめた。時代的國家の建設統一も、未開地の開拓も、共にこの時代の所産で、我が國の國民的統一並に植民地の經營なども實にこの賜である。由來、我が國は極東に僻在し、永く武陵桃源を夢み其の眼界は此の島帝國の以外に及ばなかつた。従つて國內に齟齬して、其の力を國內の小争闘に費して居た國民も、一朝、民族を異にする歐米各國と接觸するや、茲に始めて國民的自覺の念が勃然として喚起せられ、國家統一並に植民地經營の氣運を促したのである。

更に眼を轉じて海外を觀るに、各大陸に於ける弱小國民が、遼遠な地にある歐米文明國民の爲めに征服せられ、或は併呑せられたのも、正にこの時期で、又、幾多の社會が海岸に於て先づ大變動を呈したのも、畢竟するにこの大洋交通機關の發達の結果である。この時代は民族的國家統一の時期で、海岸社會の變動時期と云ふことが出来る。

顧るに河湖文明は内海文明に進み、内海文明は更に大洋文明に開展して來た。之れ東西軌

を一にする現象で今日の文明は正に大洋の沿海に華いで居る。殊に大西洋と太平洋とは世界文明の二大中心で、現代文明國の大半はこの二大洋に臨んで居る。曩に西班牙・葡萄牙の大西洋に面する二國が、東西に航路を求めて世界各地に雄飛したのも、この大洋交通の發達に魁した賜に外ならない。和蘭が暫くの間海上に權力を握り、世界の各地に發展し、今日なほ其の効績を海内の植民地に遺して居るのも亦、當時和蘭が大洋交通に成功した俤と見ることが出来る。殊に英吉利は島國的海洋的地位を自覺し、次第に海軍を擴張して勢力を海上に得西班牙の領土を侵略し、和蘭と競争して海上權を奪ひ、世界各地に貿易を以て、成功し、其の後進んで佛蘭西の植民地を侵略し、海外に大いに領土を廣め、日不沒國の基礎を立てたのも、詰り英吉利が地の利を利用して、盛に大洋交通の發展を企圖した賜に外ならない。

之に反し我が國は大洋交通上絶好の地位を占めて居ながら、永い間鎖國政策の爲めに封鎖され、大洋交通進展の氣運を阻止されたので、歐米諸國人が大平洋岸を侵略し、成が近邊を窺ふまで全く隋眠を貪つて居たのである。黒船の響に覺醒して見れば、既に近隣は征服され併呑され、歐米文化が侵入して居たのである。我が國が歐米に機先を制され、今日の如く植



民地の經營に立ち後れるに至つたのは、畢竟、直接には鎖國方針の禍ではあるが、間接には大洋交通の不振に起因するものと云つて過言であるまい。今日世界の文明は大洋を中心として開展して居る。殊に地球面積の約三分の一を占める太平洋は、世界列國の注目する所で、今後太平洋に勢力を占めるものは世界を支配するものであるとさへ豪語されて居る。我が國は太平洋上に、恰も英吉利が大西洋上にあるが如く位置して居る。太平洋交通の發展は我が國運の發展であり、又航路の開拓は富源の開拓である。今日の時代が太平洋中心時代であると呼ばれ又、我が帝國が二十世紀の舞臺に擡頭して國運開展の期に際會して來たのも、蓋し之れ偶然でない。

(五)

第四、内陸交通時代の文化生活 以上述べた様に、交通の發達は曾て國家社會を隔離し、各民族を孤立せしめた自然的勢力の條件中、水界の障壁は悉く除去された。残る所は唯水界に連絡ない廣大な陸界の地理的事情のみとなつた。即ち海岸に並行して内陸を隔離する大山脈・大沙漠及び水界に連絡のない無人の疆域などは其の重なるものである。然るに鐵道の發

明は是等の事情を悉く一掃して内陸と海岸とを結び、大陸を縱走横斷して兩海岸を連絡した。西比利亞鐵道の開展は、歐亞兩大陸に跨亘する廣漠たる氷野、寂寥たる荒野を貫いて歐洲と東極とを結びつけ、北米を東西に横斷する七條の大鐵道は、ロッキー大山脈を貫通して太平洋と大西洋との兩洋を連絡して居る。又、英國が企圖する阿弗利加縱貫鐵道は、野蠻騰味の荒蕪の地や、一望千里の大沙漠を開拓して南阿と埃及を結びつけ、更にアラビヤ・波斯等の酷熱の一帶を連ねて、印度のカルカッタとを將に連結せんとして居る。何れも大なる自然的勢力を徹去して飽くまで距離を短縮し、土地を開拓することに全力を傾注して居る。

大洋交通の發達は世界の海岸諸國を接近せしめて、之に大なる影響を與へたけれども、海岸に水路の連絡がない地方は未だ其の勢力が及ばなかつた。然るにこの鐵道の敷設は、萬障を排して國家社會の膨脹を大陸の一部に向はしめるに至つた。露國が西比利亞・中央亞細亞に侵略の手を伸ばし、米國が東海岸より漸次内陸に國家統一の歩を進めた様に、直接境土と連絡せる内陸に勢力を擴張したばかりでなく、遂に露國の東方侵略、米國の太平洋霸權、英佛の阿弗利加經營、英國の印度・濠洲の經綸、並に支那に於ける列國の鐵道政策の如く、海

外にある他の内陸にまでもその影響を及ぼして来たのである。

我が國の如き狭長な島國にあつては、大陸に介在する國家社會程、この交通の發達と密接な關係はない様だが、本邦幹線の延長はどれだけ實際的に距離を短縮して居るであらうか、中央線・信越線の敷設は該地方の産業を如何に促進したであらうか。又、北海道内陸鐵道は如何に北海道の植民並に開拓に貢献し居ることであらうか。島國に於てなほ且然り、況して大陸國に於てはと言ひたい。

若し、交通機關の發達にこの時期がなかつたならば、北米合衆國の如き尨大な國家を現出することもなく、又、露西亞が廣大な西比利亞を連絡して、歐亞大陸に跨る廣漠たる一大國を形成することも到底出来なかつたに相違ない。之に反し、今日支那大國が南北に勢力が分れて國家の統一を缺き、且、西藏は秘密國と稱せられ、滿蒙の地が土匪の跋扈の巷となり、新疆・青海の偏境は人煙極めて稀薄、未開の山野徒らに横つて居るのは、之れ言すもがな、内陸交通の不備に起因するものに外ならない。阿弗利加・南亞米利加兩大陸の如きも、なほ其の域を脱しまい。

茲に於てか、國家の統一、植民地の經營、並に勢力權張を企圖して止まぬ列國は、競うて鐵道交通——内陸交通の發達に焦慮して居る。國內の縱走横斷鐵道の敷設、鐵道網の經營等即ち之れである。殊に最近大規模に經營せられたものは三B、三C、三A政策に基づく鐵道計劃である。獨逸が世界政策の一方案とし企圖した伯林・バクダート鐵道は、今や水泡に歸したとは云へ、英國が多年劃策を焦らした所謂三C政策に據るケーブタウン・カイロ・カルカッタを連ねべく、南阿より亞細亞に迂廻する一大鐵道や、北米合衆國が經營する所謂三A政策に基づきアメリカ・アラスカ・アジアを連絡せんとする鐵道は、漸次、其の計劃を進めつゝあるのである。この計劃の成就の暁は如何に英米が該地方の文化發達に、勢力の扶植に一大福利を招ぐことであらう。

尙、陸上交通は單に鐵道交通に止まらず、電車・自動車の發達につれ、陸上發達系が整へ次第に陸上の障礙物は除去され、恰も平地に於ける如く隅から隅へと交通網が延びて行くのである。最近に於ける飛行機・飛行船の進歩は、全く自然の障礙を超越し、過去の交通系と没交渉に、而も一直線に二點間を連絡するに至つた。かくて交通の發達に一新期を劃し、正

に大空交通の時代を現出せんとして居る。實に交通の發達には際限がない。之に伴ふ文化の進展にも亦計り知るべからざる無限の開拓がある。

(六)

以上は交通の發達を四期に分ち、其の發達の次第を述べる間に、人類と自然との關係を訪ね、特に交通の發達が人類文化の上に、直接間接に如何なる影響を及ぼしたかを吟味した積りである。要するに人類は交通開拓の爲めに渺からぬ人智と犠牲とを拂つて自然を征服した同時にその交通の發達は國家社會を著しく接近せしめ、人類生活に大なる變動を與へた。かくて交通機關の發達と人類の文化生活とは常に密接な關係を保つて發展して來たのである。世界交通の發達して居る、その時は世界列國の接近して居る時で、又、東西文化の融合しつゝある日であると見ることが出来る。交通の發達して行く進路は國家社會の政治・經濟・文化の進展して行く姿で、又、世界的諸關係の深みを加へつゝある状態である。文化の向上發達の基礎は交通の縦横自在な發達に俟たなければならない。人類は古來交通運輸の便を類に求め、之が爲めには幾多の貴重な人命を賭し、人智を傾注して、其の發達を圖るべく死力を盡

して來たのである。之れ取りも直さず人類が文化に對する貢獻でなくてなんであらうか。

第六節 都市の勃興と文化生活

(一)

社會文化の發達につれ、人口が都市に集中して居ると云ふことは、最近世界趨勢の最も著しい傾向の一つである。又、一面都市の膨脹は、現代文化によつて醸された社會文明の反映であると思ふことが出来る。従つて都市の研究は、現代文化の闡明を以て任とする地理教授に於て於ても肝要とする所である。

由來、人類は社交性の動物であるから孤獨無援の状態で過す事は出来ない。必ずや群をなして共同生活を営むものである、村落はその群居の簡單なもので、都市は村落の發達したものである。都市發達の要因は多種多様である。都市の最も普通なのは第一に地方生活の必要から起るものであつて、即ち生産物の集散を任務とする地方の經濟の中心地である。第二は交通線路の終點又は集合點であるが爲めに發達するもの、若しくは水陸連絡の港津に發達し

たものなどは其の主なるものである。詰り位置・地勢の關係から發達した都市である。第三は政治・軍事・宗教・學術の中心地であるがために發達するものである。第四は工業地なるが故に發達せるもの、第五には温泉や名勝があるために發達せるものである。固より都市の發達は單なる一二の原因のみに基くものではない、多くは歴史的・地理的の諸原因、又は地理的原因にしても自然的、人文的の諸關係によつて發達するものである。従つて其の發達の原因なる過程を異にするので、等しく都市ではあるが各々異なる特色を有つて居る。かやうに多種多様な現代都市について、各々其の發達過程なり現況なりな研究して見たならば、地理學上價值のあることは勿論、更に現代文明を理解する上に、極めて意義あることと信ずる。

(II)

輓近頃に都市が勃興したと云ふことは事實であるが、古來幾多の變遷を経て今日に及んで來たものであるから、先づ其の變遷の概略を述べて見ることにする。上古の都邑は今日の如き街巷縱横、民煙稠密、萬家蒸々の都市ではなく、一邑里に過ぎなかつたのであるが、平城平安兩京に至つて始めて眞の意味の都市が出來たのである。上古は都會と云へば京都を指し

て云ふので、別に人民が交易に集る所を市と稱へ、往來集散の便宜のある地點ならば、何處でもよいので、必ずしも百千の人家を要しなかつたのである。従つて後世の所謂都會を形成して居なかつたのである。

封建時代に及んで政治上・經濟上の都會が次第に發達し、處々に町なるものが獨立的に發展して來たのである。今封建時代に於ける主なる都市發達の原因を擧げて見れば、(一)城塞又は治所であつた爲に發生したものの、(二)水陸運漕の要地であつた爲めに發達したものの、(三)鑛業の爲に發達した金山町の如きもの、(四)産業自然の發生に依つて商工業の市街を形成したものの等の如きものであつた。本邦に於ける現代都市の成立は、多く近世の政治的發達によるものであつて、彼の城下町・宿場町・湊町・金山町等は封建時代の所生であつたと云ふことが出来る。又、町が村に對して行政上特別の名義を確定したのも、市制を布いたのも極めて最近の事である。

都市の發達はかく遅々たる發達を経て輓近に及んだのであるが、最近に至つて實に驚くべき程勃興したのである。これを先づ我が國の都市について見ると、大體に於て人口は逐年都